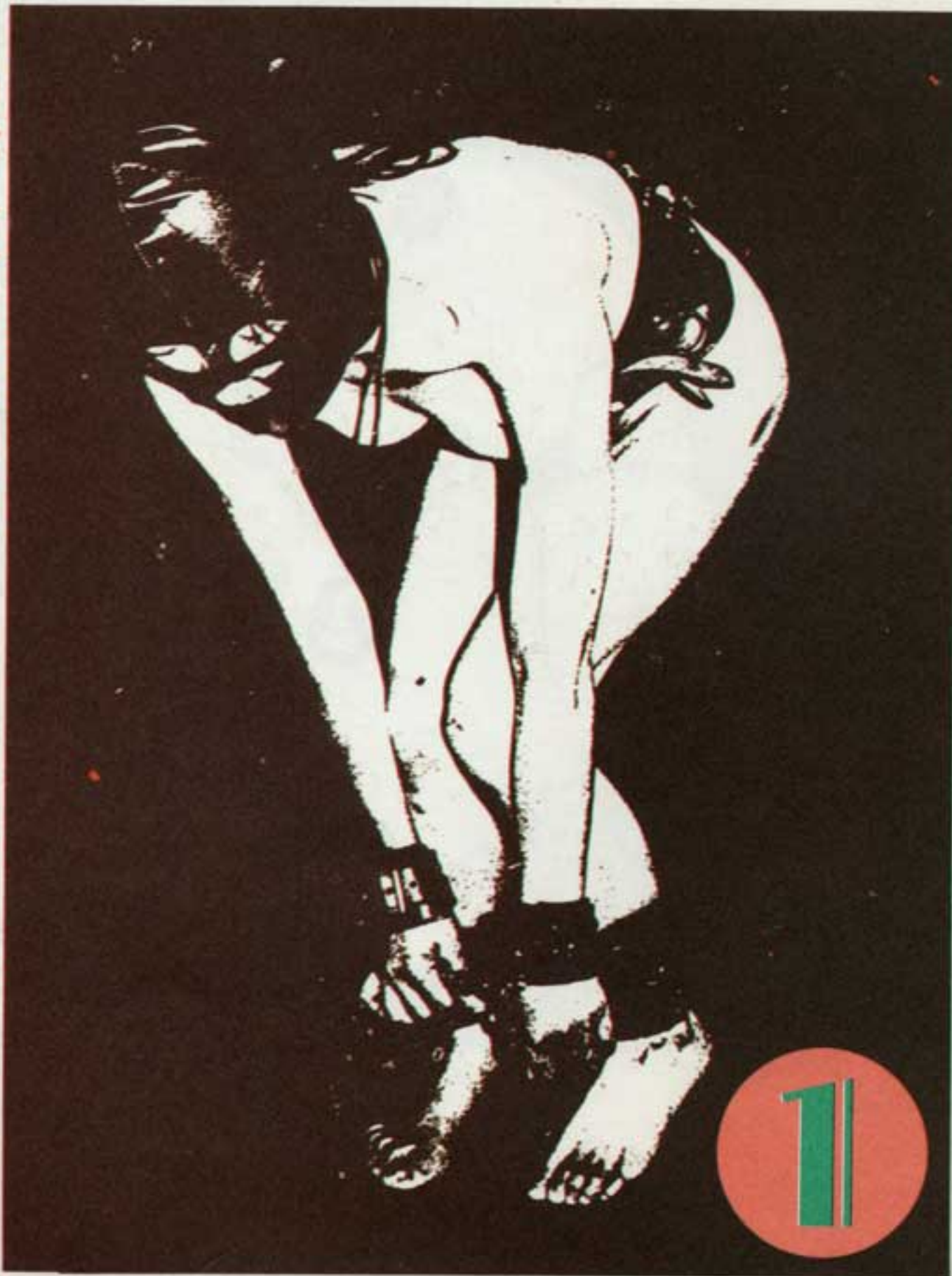


創刊第1号

愛を見つめる雑誌

SUN & MOON

●わが女房飼育記 葛西六郎 ●柱とわたし達 浦賀美恵子
 ●ハット・カメラ 縛絆記 世田介一 ●カメラ レポート 好事二昧 六木本薫



1

SUN & MOON

●各種S・M・F皮革衣裳・下着・責具・抱束具 600種展示販売

飼育・調教の

奴隷市場

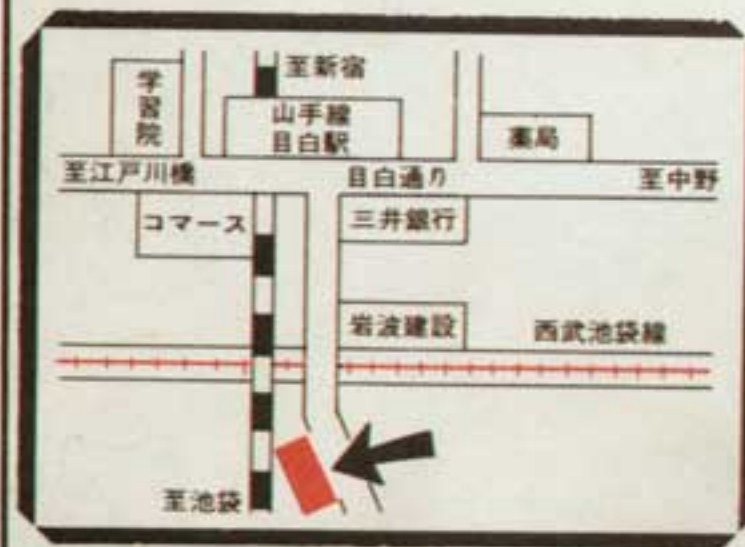
本格的皮革S・M・F専門店
〈オーダー・メイド承ります〉

奴隷市場オリジナル 皮革具総合カタログ¥1,000(切手可)

御案内

- S・M初歩の方には当方でプレーの指導等も致しますのでお気軽にご相談下さい。
- 男性・女性・御夫婦の奴隷飼育・調教も致します。
- 個人又は複数でプレー写真の撮影を御希望の方は、当方専属のカメラマンが撮影のお手伝いを致します。
- 個人及びグループでプレールーム設置をお考えになっておられる方は、設計・施工も致しておりますので、お問合わせください。

—奴隷市場— 代表 堀井 —



〒171 東京都豊島区西池袋2-24-5
 水明ビル2F1号
 TEL 03 (986) 7859
 営業時間 PM3:00~PM10:00 (日曜休み)

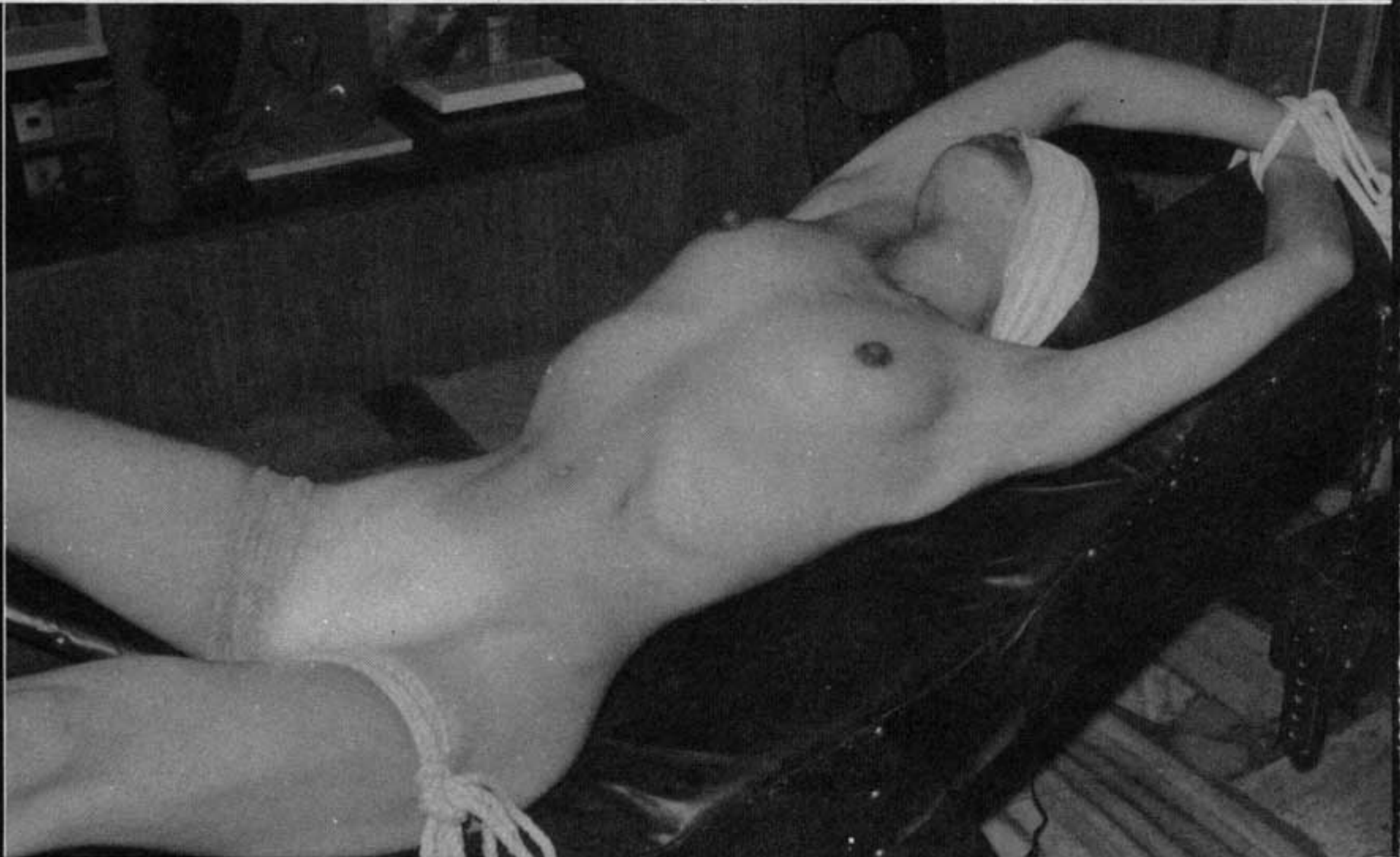
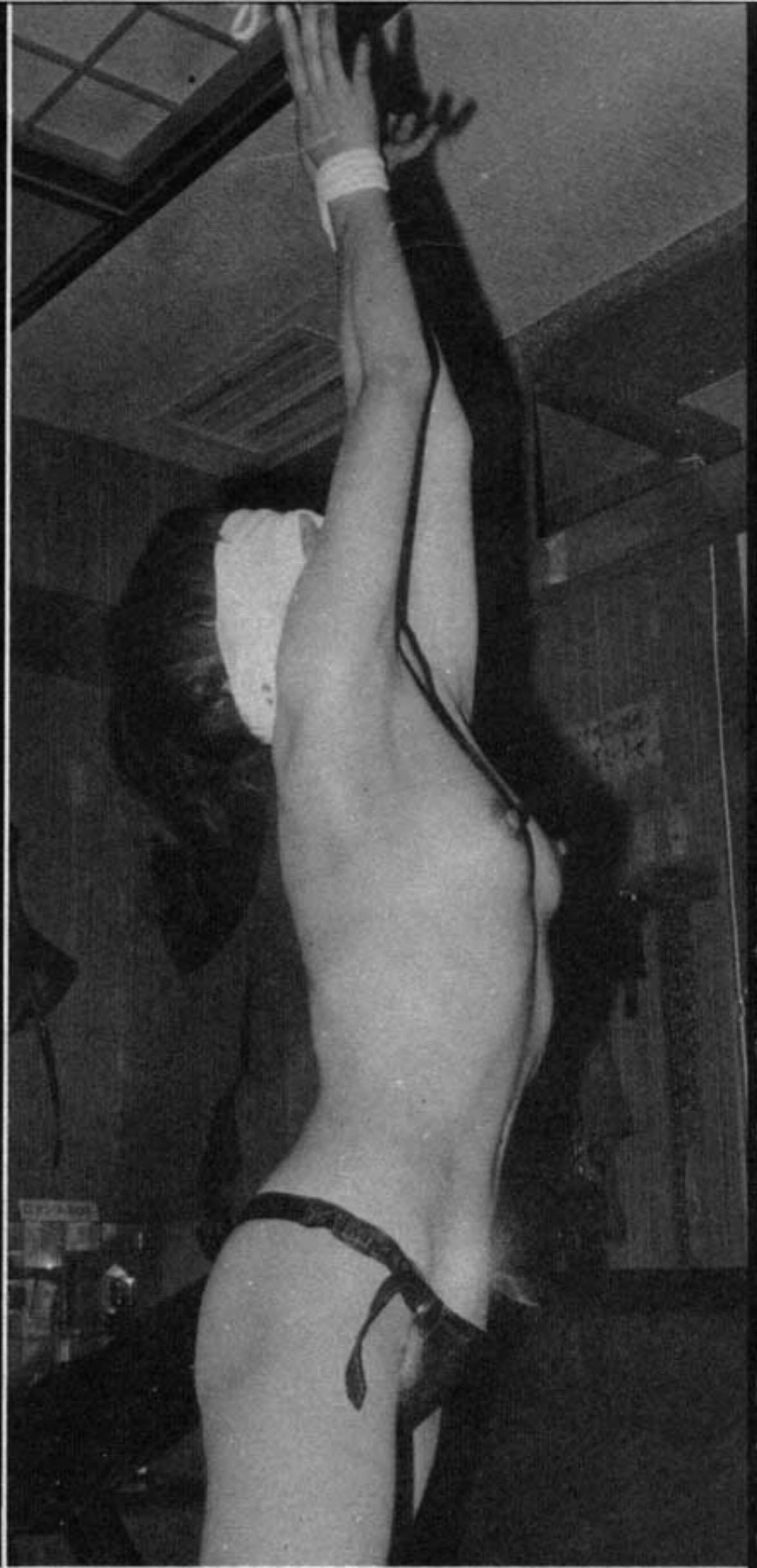
月刊 SUN & MOON誌優先販売中
(御来店御購読の方に特写フォト進呈いたします。)

限定3000部・定価1,200円





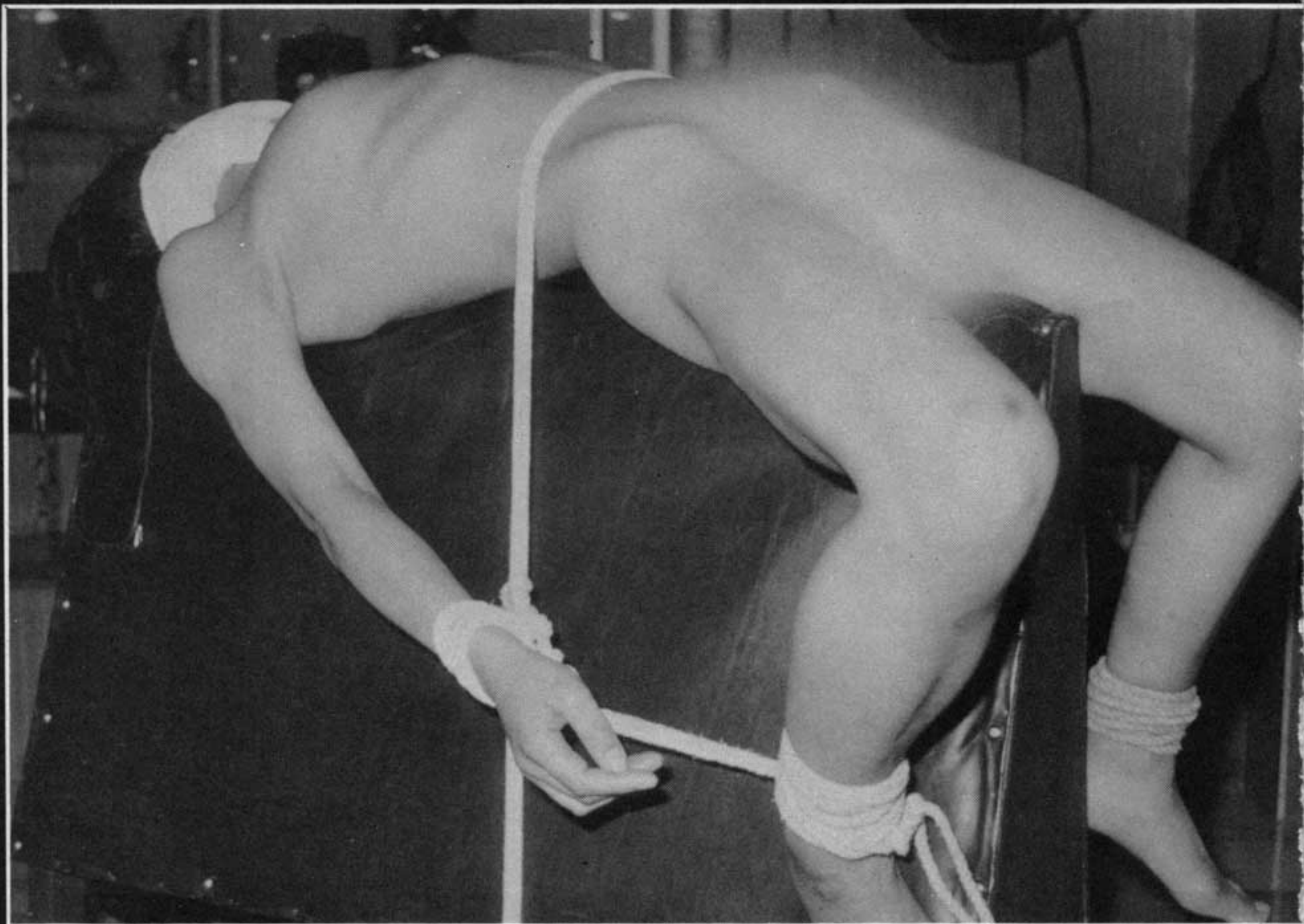
カメラ
ハント
脾悦逆さ吊り行



『奴隷市場』で皮製拘束具での撮影行で
気をよくした六本木薫氏の第二回目の撮
影行で、詳しいハント記は次号に掲載。

今回はSMショップ『奴隷市場』で撮影した（右下写真・本文82頁参照）六本木氏、やも楯もたまらず、今度は逆さ吊りに挑戦。女奴隷の苦痛と悦楽のないまぜの表情にいたく満足したようで、その興奮のハント行は次号で詳しく報告されるはずである。





愉悦がすぐそこに：：！！

嬉々として下半身を開く……そこには
被虐を求める悦楽に身をゆだねる女が！！



目次

創刊の序 「太陽と月のように」

座談会——実践派交歓録

「唯美人種のくらしぶり」

リレー・カメラハント——縛絆記

「一枝に残った赤い熟柿」

グラビア

カメラ「脾悦逆さ吊り行」 六本木薫 3

「愉悦がすぐそこに」 6

「妊孕美」 中宮さかえ 55

「女奴隷」 Y・Y生 59

「受虐を待つM女」 60

「若妻M化馴致」 63

「拘束衣の縄人形」 N氏 67

「豊満女体緊縛図絵」 室蘭・村井氏 68

「被縛の奴隷」 川崎・R氏 70

わが女房飼育

「尻鞭打ち愛好者の独白」 菖西六郎 17

妊婦M訓致の興奮ルポ

「妊婦緊縛」 中宮さかえ 47

カメラレポート

「好事三昧」 六本木薫 82

スパークする愉しみ

「夢のある夜の生活」

岡 淳 105

ポルノ8ミリホームムービー紹介

バーバリアン・ガールズ

35

縛り方教室

六本木 薫 41

【告白・手記】

妻との過去

田代 正志 42

義姉とのSM二年

大野 誠也 22

柱とわたし達

浦賀美恵子 96

マゾ女性の傾斜

篠崎 敬子 71

海外SMフォート紹介 ①

45

海外SMフォート紹介 ②

46

特別企画「多貫欣作品集」

76

「竹責め」イマージュ」

多貫 欣 78

新年随想

「よき素材の発掘に邁進したい」 河本隆治 98

SUN & MOON 通信欄

114

太陽と月のように

明けましておめでとうございます。

おそらく、月刊誌の体裁をとる雑誌のうちで、一番遅い新年のお祝詞だと思いますが、この年、初めて世に出た本誌は、まことの新年冒頭のご挨拶として皆みな様にお慶び申し上げる次第です。

過ぐる日来る日、厚い雲にはばまれさえしなければ、人間の住む地球上に光を注いでくれる日と月のように、これからは皆様のお暮らしに本誌がご一緒申し上げようと思っております。

新雑誌の発刊は、出版界の複雑な事情を全く知らない野人の企画（夢想）から、急に実現の運びとなり、夢が現世のものになったと青天の霹靂を感じておるのは、当の立案者ばかりではなく、夢想に耽けり語り合っていた十名たらずの仲間とて同じです。

私の知己は企画を聞いて、即座に「やりましょう」と断を下してくれたものですから、慌てたのは私を含め仲間全員みな同じでした。

夢へ理想へは夢をみている間中が楽しいのであって、それ目を覚ませ、と肩を叩かれようものなら驚天動地の騒乱が起ります。お蔭で昨年末は大変めまぐるしく、昼夜の区分がなければよいと思ったほどに日々が経ちました。その真剣かつ狂奔して創り出した雑誌が本誌誕生の創刊号です。

仲間がなにを夢見ていたかは一目瞭然のことと思いますし、多くを語ることは必要ではございません。ご賢察いただきたく、さらには進んでご参画いただけるものなら積極的に本誌の許にお集りをお願い申し上げます。

異端の趣味、歪められた耽美と狭い視野しか持たない人びとからはいわれましょうが、さまざまな想念、雪崩寸前の欲望などを体面のみを取繕いから懊悩にとり憑かれて暮らす人より、遙かに充ち足りた生活を築き、または目ざしている人の方が、生活の知恵者といって過言ではないでしょう。

社会生活の規範から逸脱せずに、この世で巡り合った異性との間で愛をはぐくみ育てることは、なまけ者では

できない人ひとりの大事業です。かつては「貧乏人の子沢山」と、快楽が性交に限られていた証左のような揶揄があり、いかに人間が安逸な事柄に熱中したかを物語っていますが、快楽の副産物として子孫を残すべきではないときが来ているのです。理知ある人こそが、異端の趣味や耽美な暮らしに没我して、そこから活動の情熱をたぎらせて行くのなら、社会は改新されるとさえいえます。

本誌は、成人を対象に編集してまいります。「性」に関して未熟な、あるいは水仙やバラにたとえられる異性愛に立ち向かわれない種族には冷淡であるばかりではなく、人間失格との判断から、記事は扱いません。いかなる形にせよ、「男」と「女」で構成される人間社会である以上、異性間に起り思索する事柄を採り上げて行くのが、本誌存続を意義づけるものと考えます。

お気付きのことと思いますが、本誌には一篇の小説も掲載してありません。これも基本姿勢であり変更はないとお約束できます。紙幅に制限があることによるものではなく、企画の段階から眼目においていなかったのです。勃起小説ともいわれ、若さの発散には自慰行為の補助材になるかもしれない煽情文章は排除して当然で、空想虚構より現実真相の人生謳歌を語りつぐことの方が必要です。

「太陽」は、数値の上では燃えつきる時があるでしょう。しかし、今の私たちの未来には無縁です。「月」は欠け、暗夜となる時があります。しかし、その変化が時の流れを感じさせてくれます。光りは人の暮らしに喜怒哀楽を与えて、また、それをうつし出すわけで本誌はそれらの記録を集めるのが任といえます。理知ある方の、人生の知恵者というにふさわしい市井の人々の間から、本誌を支援し寄稿・ご意見をお寄せ下さる方に、誌面作りをお願いするゆえんはここにあります。

広い世間（洋の東西を問わず）から、知識・情報・夢へ理想Vを得つつ、歓びを分か合いながら、人生のうろおいや糧を読者間で生育させて行くことが叶えば善いと考えた次第です。

こうして創刊号をお届けしたからには、努力して絶やすことなく続刊して参りたいと思います。それが成せるも成せざるも、ひとえに読者各位のご鞭撻とご支援によるものと思っております。

なにとぞ、よろしくお引き立て賜りますようお願い申し上げます。

最後に一言申し添えますが、ご忌憚のない読後感想を是非各位ともお寄せ下さい。それが万が一にも本誌存続が危ぶまれた際にはご挨拶・お知らせの手がかりともなって、不始末なく有終の美を飾る礼ともなりましようし、編集室で大切に保存させていただきます。

『唯美人種のくらしぶり』



座談会 実践派交歓記録

インチキの多い S M誌の通信欄

司会 今日(今日は週末の土曜日……)いろいろご予定が(おありでした)でしょうが、小誌のためお集りいただき、誠に有難うございます。この種の雑誌に座談会を企画することはなかなか困難なことですが、幸い二組のご夫婦と単身ご参加の方、奥様は感冒でご出席なされずご主人だけなのですけれど計五名の方のお話が伺えることは大変嬉しいことだと思います。では、固くならず(に)ざっくばらんなエンジョイ・ライフをお話(いた)だきたい(と)思います。

武井 「奇ク」「風奇」の二冊が消えてから私は気がついたのですが、なんだか淋しい生活になっていました。「奇ク」誌がバックアップする(と)かいわれていた塚本氏主宰の「S研」に入(って)やろうと、ワイフを特訓したこともあつたのですが、その期待がフイになっ(て)……ガックリしたのは事実です。

山本 確かに物足りないですねえ……S M誌は他にいろいろありながら、買うのはS誌が毎月で、あとはその時の内容次第です……。

緊縛写真集は各社で出すたび揃えています、
そうでもないかと退屈だからです。

山本夫人 雑誌の始末に困らなくなって、大
助かりです。(笑)

司会 始末といいますと。

山本夫人 やはり子供には知られたくないの
で、必要な所だけ切り抜いてとっておくこと
にして、切り抜いたあとは焼き捨てますの。

武井夫人 うちの人によく聞かせてやってい
ただきたいわ。なにしろ年ごと月ごとの順序
まで揃えて並べておくのが趣味で、一冊たり
と処分できません。

武井 本や雑誌、男が必要として買い揃えた
ものは、男の財産ですよえ。それがなかな
か女にはわからない。

鈴木 私は「奇ク」は全部完全保存ですが、
「風奇」の関係は……特に誌名を変えて存続
が怪しくなりはじめた頃から、必要な分をピ
ックアップしておく方法にかえ、今じゃあ原
型あるものは一冊もなし、です。長く続くか
と思った「SMキング」も……あれはアンチ
・奇クで面白くなるかなと期待してたのです
が、中途挫折でしたね。ともかく我々には、
面白いというものはなくなりましたね。

司会 出廻っているSM雑誌は、得るところ

《出席の方々》

武井 一郎(39) 会社員(課長)

千秋(35) (主婦)

山本 俊夫(40) 地方公務員

久美子(32) (主婦)

鈴木 英司(38) コピライター

司会 世田 介一

なしですか。

武井 ボリュームはあっても、中味は虚構。

「奇ク」誌には珍人奇人が競い合って、それ
がホラの部分があるとわかっていても、刺激
になるものはありましたからねえ……今じゃ
あ、あの文献価値は大したものですよ。

鈴木 惹かれたのは「奇クサロン」や読者通
信です。正直に言って。でも「風奇」の回送
文扱いのものには、いい加減なものが多かつ
たようです。

司会 その例を挙げていただけませんか。小
誌でも、真面目な投書には、誠意をつくして
「文通交歓」の便宜は計ろうと思っています
ので、その参考に。

鈴木 システムは悪いものじゃないと思いま
す。けど、初回の回送が終ったあとの、個々

の文通で欺されることが多かったのです。M
女なんていうのは、ありや全部とっていい
ほど嘘でしたね。だまし方も下手ですよ。

武井 岐阜の「淋しい女」は、ちゃんと本人
から便りを貰ったことがありますよ。

鈴木 へえ。じゃあ、私は選にもれたのかな
……。ま、そういう果報な例もあったでしょ
うが、一番ひどいのは、M女に群がった者の
住所氏名を「SMマニア」の名簿作りに利用
して、それを営利にした人間がいたことですよ。

どうしてそれが判ったかという、ある日突
然人が我が家に訪ねて来たのです。「XXさ
んはおいでですか」というので「私ですが」
というと、狐につままれたような顔で、「奥
さんか、同居の御婦人のはずですが」という
わけで、それからその人がなんで来たのかを



問いつめて行くと、××はつまり私の名なのですが、相手が買わされた秘密名簿には「M女欄」にのっていたわけですね。

司会 そうですか。いやな具体例ですねえ。

武井 岐阜の人は、ここで打ちあけちゃうと「奇ク」には安井夫人で登場した人です。

山本 ホウ……あの人の写真は、あの当時と余りかわらないものがS誌に時々載りますが……交信できたんです？

武井 ええ。今でも電話して話すことはありますよ。でも、あの人はあの人で、いやな経験をして人間不信になってしまったんです。この座談会が暴露特集ならその前後の話まですっかりおきかせしますけどね。

武井夫人 あの方のお写真の影響で、夫はすっかり「特訓」づいてしまったのです。剃毛、ラビア責めなど、それが日常茶飯のならわしになって……とうとうA感開発まで。

山本 いやあ……本題に入ってきましたねえ。私は最近でも「夫婦プレイ」が続いている渡辺夫人に関心があります。あの夫人は東映の映画にも出たことがありますし、S社の雑誌では「山村広子」で人妻告白を書いてますし、なんとも彼女の被虐性は大したものだと感心しているんです。

山本夫人 その方と同時責めしたいというのですから、夫の神経を疑いたくなります。

司会 実践派ですから、やりかねませんね。

山本夫人 ええ。

山本 武井さんだって「S研」に参加しようと考えたくらいだから、M女自慢してみたいという気持ちはわかるでしょう。



武井 「はい」といいたいところですが、その気は一旦失せました。「奇ク」「奇ク」いうのはなんです、あれが結局のところ新興SM誌の前にポシャって、なあんだという落胆を感じて以来、逆にワイフを大阪くんだりまで連れ出さなくてよかったという気がしましてねえ。これも、今回の座談会趣旨と違うので喋りませんが、妙な噂を聞いてから特に安堵を感じたのです。

妻の臀部と大腿部に刺青をする

司会 興味ある情報をいろいろお持ちのようですが、強いてご発表を願いません。で、「S研」参加の望みを断られた以後は、どういう愉しみをされてこられたんでしょう？

武井 刺青興味ですね。それも最近女性週刊誌……といっても隔週刊の「微笑」にのった和田さんという人のように、ワイフの全身に総入墨したいと思うわけで、幻想にとりつかれています。

武井夫人 お尻と腿はできたのだ、といいますが、実際は見えません。

鈴木 かくし彫りですか……白粉彫りという
ような秘伝で？

武井夫人 (笑って) いいえ、真似ごとです
……針だけ使う。

武井 秘術を紹介しますとねえ。道具一式は
本物らしく揃えてあるんです。でも、黒墨、
朱墨は使わず、マジックペンで描くのですよ。
しかし、チクチク肌には針の先は刺しますよ。
刺す時、針にホワイトリカーをしめしておく
のです。

そして、実際に血がにじむスジ彫りを少しは

ずして、マジックペンでその後を追うのです。
痛みは本物で、鏡を見ると絵もかけている。

けれど消すことはできるわけでして……一瞬、
部分彫りができ上がったぞ、という気にはなり
ます。

司会 愉快的な工夫ですねえ。で、奥さんも入
墨したという気になって……。

武井夫人 はい、満更悪い気持ちではありま
せんね。でも、おそろしいですわよ、身動き
できないように、小さな茶袱台に縛りつけら
れて……その前に粗相してはいけないと、浣

腸とビデ責めがあって……その日は朝からノ
ーショーツ。とっても不安な気持ちにさせら
れているわけですね。

司会 そうですか。ところでできた手描きの
入墨は、何日ぐらいそのままにしておくので
すか。

武井 写真を撮って、翌日までですねえ。ど
んな物にもかけて消えないマジックインキと
いうのは嘘で、肌だと下着にこすれてすぐボ
ケてしまいますから、お蔭で専用シートや
浴衣が必要です。

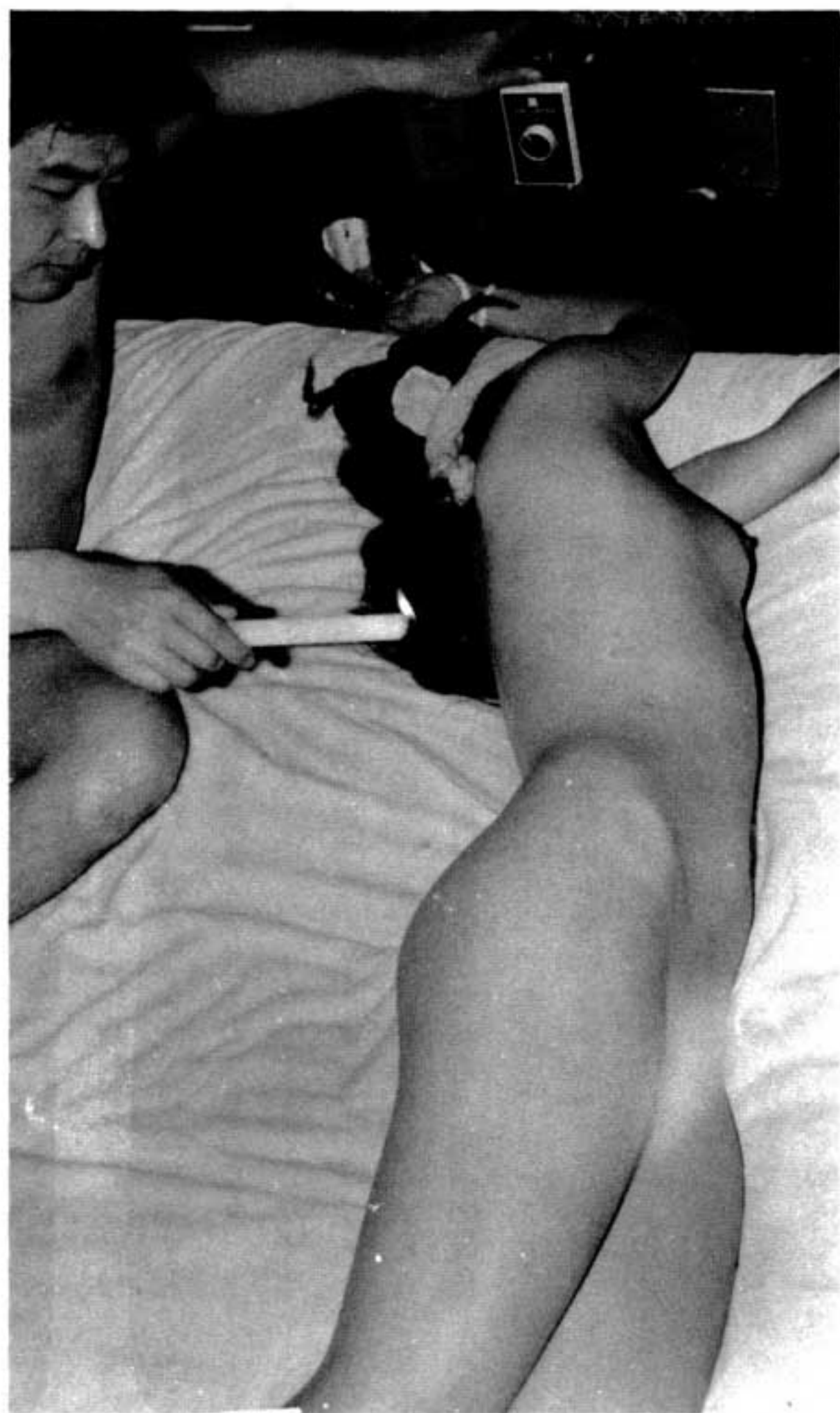
司会 刺青プレイをしたあとに、セックスす
るのでしょうか。

武井 ですね。その味が格別なわけですから。
鈴木 というと、人墨師に余禄があるという
のは本当かな。

武井 かもしれませんよ。私も人から聞いて
「そりゃかなわん」と本ものの入墨はさせた
くないと思ったんですし、SMスワップはで
きないタチだと思います。

SMスワップで 燃えた一夜

司会 SMスワップが口にのぼったところで



……山本さんはなにかご体験はありますか。
山本 一回だけあります。男だけで話なら喋りやすいんですが……。

山本夫人 構いませんわよ。昔のことですから……私も若気のあやまちみたいなのですし。

司会 そうですか。では、さしさわりのない程度で。

山本 そう昔ではないのです。約一年前でした。知人を経由して紹介された夫婦なのですが、東京に出張して来るというので歓迎プランの中にSMスワップを組み込んだのです。これにも相当めかしこませて出掛けました。家を出る時から縄貞操帯と後手縛りです。

司会 M女の完全装備ですね。

山本 いえいえ、私の計画を下廻った、ホンの形式的なものです。ところで先方さんは東

京出張ですから、連れて来た女性は本妻さんではなく懇意な女性、代換品ですね。

武井夫人 だまされましたの？

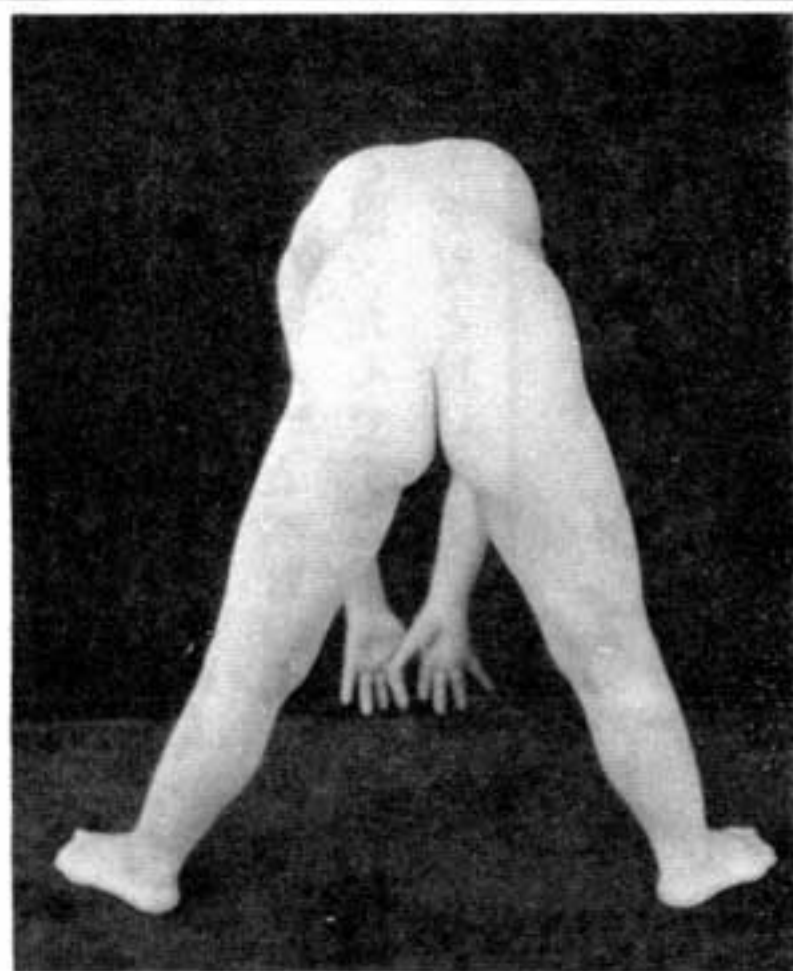
山本 いえ、予期してました。そうそう初めから対等なんてことはありませんよ。それだけに、ワイフには相当無理してもらったんです。驚いてましたねえ、相手の仮装夫人は。

武井 でしょうねえ……一ぺんに化けの皮がハゲたのと違いますか。

山本 もちろんですよ。「町長さん」と思わず詰問口調が飛び出して、おさえようとしたが後のまつり……バレてかえってよかったんです。彼も「エエイ、金で解決つく相手だ」と思ったんでしょう。ムクムクと嗜虐心が燃え上って、それこそ猿轡はホテルの薄手なタオル一本が口にそっくり詰め込まれた防声完壁なものになりました。

着ている物はムシリ取り、手足を大の字にベッドへ縛りつけて、強引に剃毛です。これ（夫人）がそれなら、同じようにしなけりゃと思ったんでしょう。空剃りに始まって、次ぎは入念な手入れで綺麗に剃り上げましたよ。

司会 いやがる者を相手にしてこそ、加虐趣味が満たされるのが本当ですから、さぞ立会いの山本さんも堪能されたでしょうね。



本誌は強力なスタッフが控えています。SM情報には「スクランブル」が可能です。しかし、臨機応変なスタッフでも「馴れ」「習熟」の技巧だけでは、よい映像・衝撃的な光景の描写はできても、新味に欠く面がでてきます。

そこでスタッフを刺激するようなアイデアを読者の間からお寄せいただき、読者が自分ではできないでいるプレイの夢を実現したいと思います。お礼は、そのアイデアをに使わせていただいた時の組写真をお届けすることにしますので、住所・氏名は正しく記入の上、必らず封書でお送り下さい。



山本 剃り残しがないかを調べたりして……

(笑)。ついでに腋毛も剃り、眉も剃ったんです。その時になって彼氏は一步先んじたような笑顔を見せましたね。これは眉まで剃った化粧はしてませんでしたからね。

武井夫人 奥さんはその間、どうしていらっしまったの。

山本 はいはい、とよくいうことをきく奴隷です。度胸がいいというのか同性に対する矜りの興味が湧いたのか、電動のボクサーを手渡すと、レズ・ラブでのタチ役にまわって攻撃です。ベッドの女性は悶え呻き、本当に失神しましたねえ。全身がケイレンし、急に弛緩したのですから「町長」との関係では味わったことのないアクメを経験したことになるでしょう。

急にそのあと妻になじんで、その日はワイフのいうことすることと見よう見真似で男二人を満足させてくれました。

山本夫人 でもね。オシャブリ奉仕だけはイヤでしたね。その人は子供ができるのを怖れ

て、町長さんのを口に含み、最後の始末までできるように仕向けられていたようですが……私はのみこむまではとてもとても……女同志バックスタイルでドッキングしてましたから、その具合が悪いようなふりして顔の向きを変えた時、町長さんのを頬に浴びるということとで済ませてしまいました。

武井 「町長」というのは本当の役職名なんですか。

山本 そうです。何県何郡まではいえませんが……つまり、スキャンダルが政治生命を断つばかりではなく、家庭をも破壊するような立場の人なら、互いのシークレットは確保されるだろうという安心感で、SMスワップになったのですから。

司会 約一年前のお話ということですが、その後の交流はどうなりました。

山本夫人 その時の人から私に同性愛風のお便りが届いています。

山本 二人は仲良くなりすぎて……妙なものですねえ、町長夫人は癌で長病いの末、亡くなられて……その女性が、今すぐというわけにはならないでしょうが、町長に同情する人の薦めもあって後妻に納まることになるでしょう。

武井 めでたしめでたしですか……SMのとりもつ縁なら桃源に遊ぶ思いの生活になるな。老後はバラの人生か。

鈴木 え？ 町長はそんな年寄りですか。

山本 男の働き盛りです。それだけに、付き合いはまだまだこれからが楽しみになるわけですが、これは目下「横須賀ブルース」で。

鈴木 うーむ……なんのことかな。

山本 「これっきり、これっきり」というわけです。

武井夫人 あれは、「これっきりですかあ」ですね。誤解されましたよ。(一同哄笑)

山本夫人 ひと通りのことはして上げたですよ。だから一度したことはしません、って強く云い張っているのです。

真の意味での 夫婦SMプレイ

鈴木 亭主の方は欲深くあれもこれとも思っても、連れが頑強に拒めば止むを得ず飽らめますねえ。他人にはマゾ豚だなどいっても、本心じゃ大切な女房殿……手塩にかけて己れ

好みに調教した宝ですから、ご機嫌とりも必要です。機嫌のいい時の女房は、それこそどんなM女といわれる人がいようと見向きしたくないほど、女として最高ですね。

第一、安心して遊蕩できる。正に陶醉が約束されたSMプレイになるわけで、最後には居丈高に振舞い通してみようと思っただけでも、ガタガタと崩れて養子婿のようになってしまいますナ……「ごめんよ、カァちゃん」なんて縄跡のついた肌をなでさすったりして。

山本夫人　そうでもしてもらわないと、勘忍できませんワ。

司会　それが本当の、SMプレイを愉しんでおられる御夫婦の姿であり、仲のよさを保っておられる要点でしょうね。読み物、小説の類いでは、虚勢のままで終わりますが、今日ここで、最終の部分が語られたように思います。合意の上に立つ異常な行為……他人から見てのことですけれども……は、決して背徳行為ではない。むしろ、なにも知らず「オカシナコト」ときめつける立場にある人は、不幸だとさえいえるでしょう。

SMプレイの是非を説くのは、人生の広範な性知識が語られる人でないと駄目なことで、マスコミ用語の「変態」「異常者」からものは

つきり区別して考察していかないといけないと思います。

今日は、本当に有難うございました。このあとなんらかの知識になるうかと思ひ、最近入手できました映画を上映してみますから短い時間ですがお愉しみください。

〔司会者補足〕

座談会当日、テープ収録が終って上映されたハミリ映画は私が直接入手できた映画フィルムではなく、某氏より借用したものであり

新人飼育中

皆様のペットになります。

お便り下さい。

明けましておめでとうございます。

私は今年の春で二〇才になります。昨年の夏、風変りな男の方（第一印象はそうでした）にお便りいただいて、文通を続けて



ご出席の方々も、それが観たいという条件つきであったことをお断わりしておきます。

映画の内容は、別項「ポルノ紹介」で記述してありご覧に入れますが、観終わったご出席者は「ポルノは空想の所産」と語られ、自身たちの暮らしには格段新しい刺激とならないように思われました。作りものは作りものだと割り切っておられるのでしょうか。それだけ、愛情生活が濃厚であり、充実感をわかち合っておられるのだとお見受けしました。

いるうちに、新しい雑誌のカバーガールになつてくれないかとお誘いを受けるようになったのです。でもお話を直接うかがうと、コワイような内容だったのですぐにはお引きうけませんでした。

そのあと、「〇嬢の物語」「イマージュ」などの一人ではとても見に行けそうにない映画へご一緒していただくうちに、すこしずつ私自身が変化してきたようです。「アミカ」派ガールだった私が、女性として一段成長したことになるのかもしれない。ヤセッポのミコですが、私の変身願望を満たすお仕事なのでモデルになって活躍したいと思います。

わが女房飼育

葛西六郎

尻鞭打愛好者の独白

大学三年の時にふと知り合った年上の女から目覚めさせられたサディストの血は、その後連綿と私の中でくすぶりつづけていた。

やがて結婚。その気のない女房を少しずつ飼育した結果——。女房はその豊かな臀部に鞭が炸烈する度に、鋭い快楽の呻きをあげるようになっていた。

ホテル代むこう持ちで飢えた性の渴きをいやした大学三年の思い出

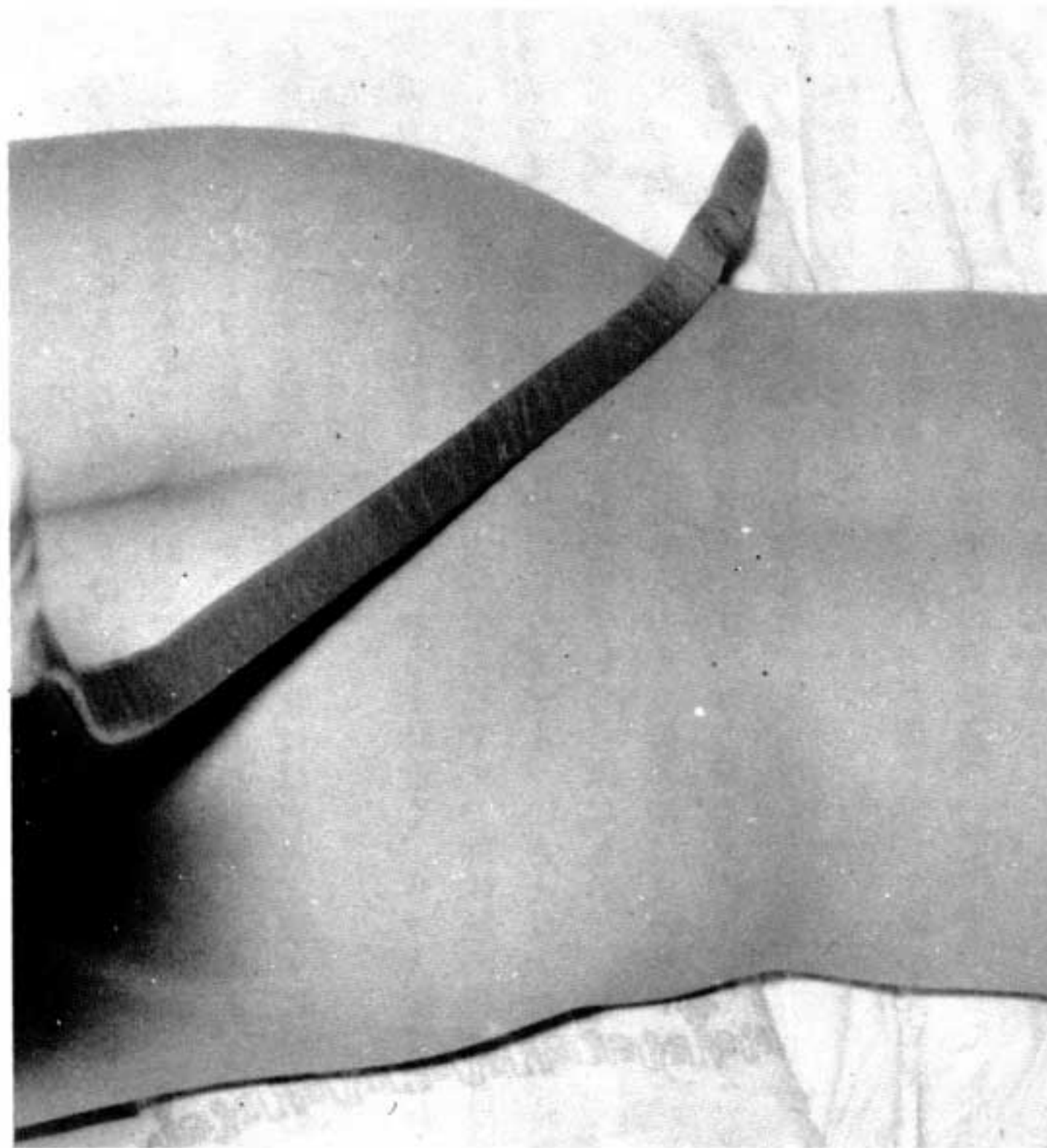
結婚前のことでした。当時私は大学の三年生で、金はないしガールフレンドもなし、そのくせ性欲だけは旺盛で、女なら誰でもよいというあさましいありさま。街をうろついて安い映画を見たり、今から思うと乞食同然のような姿。

そんな時に、天から降ったか地から湧いたか、まったく偶然に出会った女が、私をしてSMの妖しい世界に招待したのですから、人生ってわからないものです。

彼女は三十も半ばといった年令ではなかったかと思いますが、色白の肉感的な中年女でしたが、特別目立つような服装はしていませんでした。食事をしたあと上野の街の雑踏から離れるように、浅草に向って歩いて行くと、彼女は、

「あなたの行きたいところはこっちじゃないわよ」

といったものです。それは正に図星でした。とりとめのないことを話してはいましたが私は心の中で彼女とナニをすることばかり考えていたのですから。彼女のその一言がきっかけでたちまち私達は



合意してタクシーに乗り、ラブホテルにしけ込むことになったのです。

ラブホテルに入った後の彼女は、初め見た時の印象とは違って、それに年令の差もあってか大胆で凄いほどの淫らさでした。若い私も三度目にはさすがにヘパッテ、起きあがれないでいると、彼女は口に含んで刺激する始末。ついにその夜はほとんど寝ずに絡み合っていました。

彼女に起されて時計を見ると、もう十時近く、サア大変でした。というのも慢性金欠病の貧乏大学生の私です。御休憩の料金分は持っていました、宿泊料まではありません。いざとなったら腕時計を質草に、なんて考えていたのですから呑気なもの。

しかし、現実に代金となると、そう簡単にはまいりません。あらためて弱った顔をしていると、すっかり帰り支度をしてしまった彼女は、したり顔でいいました。

「料金ならもう払ったわよ」

まさに頼りになるお姉さま、といった感じで、太陽の光のまぶしさに手をかざしながら、私は彼女の後からついて行き、右に左にと歩いたにゆれる彼女のお尻を見ながら、

「この尻が夕べは凄く動いたんだなあ」

とあらためて思ったものでした。

旦那とのSMプレイの写真を見せられて本気で鞭打ちを行ない興奮した私

さて、その夜以来、私は週に一度の割合で彼女とラブホテルに行っていたのですが、何度目かは忘れましたが、ある夜のこと、彼女は自

分がある会社の重役の二号夫人であることを告げ、私がびっくりするようなことをいい出したのです。

今でしたら、そんな告白を聞いても驚かないでかえって心の中でニタリニタリとするのでしようが、彼女は、重役である旦那、スポンサー氏にSMプレイをされていることを告白し、その上、数枚のプレイ写真を私に見せたのです。

もちろん白黒でしたが、緊縛された彼女はこれ以上ないというような浅間しい姿をとらされており、とくに私の目を引いたのは両手吊り開股のポーズで、ヘアーはすっかり薊り取られた上、例のバイブ、それも特大と思われるものを呑み込まされ、落ちないようにガムテープで固定されていて、九尾の鞭が彼女の豊臀に空を切って炸裂した瞬間をとらえたものでした。

腰を前に突き出すようにのけぞった姿、そして、口を大きく開け眉を寄せた苦痛の表情、それは強烈に私の心をとらえました。



残酷と快楽、SMについては多少知っていても、それがこのように現実に行なわれていたものだとは思ってもみなかった私は、彼女と写真を交互に見ては「ヘーッ」とか「ウーン」とか驚きと感心の半端な声を出しておりました。

彼女はさすがに羞かしいのか、うつむいたままでもいいました。

「私、いつもこんなことされてるのよ」

しかし、彼女の言葉の中には自が身の不幸をなげく響きはなく、むしろ逆に明るく、私とその写真を見て興奮しているのが面白いといった風でした。

私が相手の旦那の悪口をいい、別れるべきだ、なんて無責任な忠告をすると、

「とんでもないわ、私イジメラレルのが好きなのよ。ねえ、今夜、この写真みたいにして私をイジメてみて、ね」。

と、ついに催足されてしまったのです。正直にいった女性の方からプレイを求められたのは、この時が初めて最後のようない感じがします。

彼女はプレイの方法を知らない私にアアシテ、コウシテと自分から求め、うつ伏せになった彼女の豊臀に鞭をあてる私が手ぬるいと、「モット強く、モット強く打ってえ」

と叫び、アタマに来た私が高校時代剣道二段の腕前で力まかせに鞭を叩きつけたところ、

「ヒェーッ!!」

というような悲鳴をあげ尻の肉をピクピクとふるわせ、

「好いわよ好いわよ、そうやって、思い切り打ってえ」

と、まるでセックスしている時のような甘い声で訴えました。

妻の従忍を待つ鞭



彼女の豊かな尻肉は赤い筋が浮き出し紫色に変色しているのもありました。が、ほかの抜けるような白い肌と赤い鞭跡の微妙なコントラストの妖しい美しさ、そして、腰のくびれを境に上と下が別の生き物のようにうごめくエロティックな光景に、私はもう自制心を失ったかのように心の中で「この豚女め、これでもか、これでもか」と叫びながら鞭を操ったのです。

やがて、彼女は、

「もういゝわ、後からして、早くう」

と求め、鞭とセックスの同時責めにあって、絶息するような呻き声を何度もあげて終ったのでした。私も、女の豊臀を鞭で責めながら行なうセックスが、いかに優越感と嗜虐の悦び、そして犯すような快感をもたらすものかを知りました。

全裸で縄を待つ妻を固く縛り、全身を愛撫したSMの初夜

彼女と別れてからもう大分経ちますが、いまだに彼女とのことは鮮烈な映像として目に浮びます。

ところが、そんな凄い体験をしていたとは露知らぬ妻は、私が縄をかけるときいったものです。

「あなたって過去に余程女の裏切りにあったのね」

つまり、女に裏切られた私だから、妻を縛って責め、ウラミを晴らしてるのでしょうか、というわけです。まあ、それもあるでしょうが、一度やったら止められないのがSMプレイです。

ところで、私と妻は見合い結婚です。この風習の是非はともかく、男と女の縁とは不思議なものです。まったくの赤の他人だったのが、ずっと一緒に生活をしてきた親兄弟姉妹以上に仲良くなり、それこそ親にも見せぬ羞かしい部分まで全部見せ合ってしまうのですから。

さて、妻を調教するという私の黒い欲望は消えることなく存在していたのですが、結婚してすぐというわけにもいかず、そのチャンスを探いながら、たちまち三年も経ってしまいました。長男が生まれたりして、性技を楽しむという精神的ゆとりがなかったともいえませんが。

しかしついにチャンスがやってきました。

それまでかたくなに拒否していた妻が、その夜は丸で百八十度の変化を見せ、

「縛っても打ってもいいわ、思う存分にしてくれ」

といったではありませんか。青天の霹靂とはこのような事態をいうのでしょうか。

私の方がかえってたじろいで、まさかヨロメイたのでは、とか、なにかとんでもないことをしでかしたのでは、などと心配になったほどです。

しかし、なにはともあれ、変りやすいは女心、善(?)は急げとば

かりに妻を布団の上に坐らせると、後ろ手に縛り胸にも縄を回して乳房を上下に挟みつけるようにして縛ってしまいました。

羞恥に顔を伏せた全裸の妻の姿を見ていると「思い切り泣かせてやるぞ」とばかり、私の体に熱くSの血がたぎってきました。

しかし、何分その夜は初めてのプレイです。恐怖心を抱かせてはお終いです。私は興奮をできる限り抑えるようにつとめ、その替り執拗なくらい妻の体をくまなく愛撫したのです。妻は緊縛された不自由な体をよじり悶え狂い、嵐のような一瞬が過ぎた後は、大きく開股縛りにされた羞恥のポーズをカメラに撮しとられても、もう拒否しようとはしませんでした。

ついに全裸の妻に思うさま鞭打ちプレイを楽しみ妻も激しく燃える

一夜、激しい鞭打ちが実現しました。一糸纏わぬ姿の妻を鴨居から下げたロープに両手吊りにした私は、じつくりと妻の裸身を眺め、全身を撫で回したり、乳首を吸ったりして、妻の体が興奮して熱くなった頃を見図らい、バイブを一気に装てんしました。そして落ちないようになると、スイッチを入れました。

「あっ・あっ・あっ」

たちまち挙がる狂声と同時に私は右手に持った自家製の皮鞭を、豊かな尻朶に向けて叩きつけたのです。

「あ、ひーっ、ひーっ」

のけぞる妻の咽喉から奔ばしる悲鳴と、ブルルンとバイブの電動音、そして、ピシッピシッという皮鞭の音が妖しい狂奏曲をなして私を昂奮のつばに落とし入れました。

右に左に揺れ動きうねる女体の妖しい踊り。妻は自分でも意識せ

鞭打たれる妻



ぬ内に脚を開いて腰を引っ込めたかと思うとぐっと前に突き出すというように踊りをくり返し何度か叫声と絶息するような呻き声を発した末、遂にぐったりとなってしまうたのです。

パイプのスイッチを入れたり切ったり、そして弱く強く妻のうねりに合わせるように鞭打っていたのですが、反応を示さなくなった妻に私はいささか慌てて、妻の頬を叩きました。

妻は物うげに反応を示したので安心しましたが、これはちょっとやりすぎたかなと思い、急いで縄を解いてベッドに横たえてみると、妻の尻から腰、横腹、そして背中にまで赤い鞭跡は暴虐の限りをつくしておりました。

「痛かったろうゴメンヨ」

と柄にもなく詫びていたのですから、しまらぬ話です。

ところがです。ここが女の魔性ともいうのでしょうか。妻はいまだ桃源の夢冷めやらぬ面持でいったのです。

「凄かったわ、こんなの初めてよ、時々今夜みたいにして!!」

女性心理の不思議さといえ、そうもう一つ。

妻をして淫らなM女に急変せしめた原因です。それはなんと、見

知らぬ女性と私との前代未聞の交換で、三十六才という独身女性（離婚したと思われる）の赤裸々な欲望の表現でありました。

泥棒でもいいから男が欲しい、そして火照る中年女の性欲がその手紙の中にはめんと告白されておりました。

彼の女性の手紙には私の意に添ってかSMプレイで歓喜の声をあげる自分の想像上の姿をも描写しており、おそらく妻はそれを読んでいたに違いなく、

「なんでも好きなようにして、うんとエッチなこととして」と夢中で叫んだのです。

妻のM飼育といっても、私の場合、每晚ネチネチと口説いたわけではなく、まことに偶然で、件の女性の手紙が妻を変化させたのですから、摩珂不思議な女心としかいいようがありません。

ともあれ、私は如上の棚ぼた式経過でプレイをすることができましたが、人間の欲望は果てしなく、あの手この手と考えては実験しております。

妻もすっかりプレイになじみ「今夜アレする」などと目を潤ませている始末。「お前も変ったなあ」というと、

「みんなあなたが仕込んだんじゃない、あなたってホントに二重人格ねえ」

と逆襲し、プレイたけなわとなれば別人のごとく、辺りはばからぬ狂声を発して悶え抜く。お蔭様にて防音装置付きの部屋を増設し、春夏秋冬を問わぬ汗みどろの大熱演。

人間とはどこまで狂えばおさまるのやら。さて、今夜もあのドデカイ尻を痛めつけてくれよう。

ある夏の夜、俺は「義姉さん」と呼んでいる彼女の家に泊った。義姉は三十六才の美しい未亡人で、ずっと年下の俺をいつも喜んで、でもてなしてくれていた。俺も美しい彼女に姉のような親しみと、妻を貰うなら義姉のような女性をと、憧れのようなものを持っていた。

その夜、まるで夢のように、俺はその憧れの義姉と通じてしまったのだ。義姉は一年前に未亡人となっていた。マンションをいくつももっているので生活には困らない。

風呂に入っただ、俺は鼻唄を歌いながら、洗面所に入って歯を磨いていると、トイレの中に誰かいるようすだ。妹と一緒にだったので妹かと思ったが、好奇心が湧いてきて、俺はそっとドアのノブを回してみた。すると、鍵が掛ってはず、それは音もたえずに回り、俺は中をのぞき見ることができた。その瞬間俺の

鼓動は早鐘のようになった。

真白な逞しいばかりに大きな義姉の豊臀が、目と鼻の先に見えたのだった。

なんという素晴らしさだろう。俺は夢遊病者のようにドアを開

本当は知っていたのだ。

振向いて俺を見て「五郎さん」といった。ところが、義姉は俺を叱るところか、立上りもせず「いけないわ」とか「だめよ」と云いながら、俺の狼籍を許し

大野誠也

告白編掌 との義姉 SMの2年

けるとトイレの中に入り込んでしまった。

そして、俺の手は別の生き物のように、その巨大な肉塊を撫でてしまっていた。義姉はびっくりして声も出ないのか、いや

ているのだ。

俺の手は豊臀の感触をたっぷり味わうと、吸い込まれるように肉の谷間にすべり込んでいった。そこはもう溢れるばかりになっていた。

俺は慌てながら、ベルトをはずし、夢中で義姉の豊臀を抱えこんで突入していった。義姉は水洗の鉄パイプにつかまりながら、絶息するような低い呻き声を発してのけぞった。

その夜以来、俺が結婚するまでの二年間、義姉と俺の関係が続いた。

そして、遂にSMプレイを求めていた俺の奴隷となった義姉なのだ。

今でも俺は義姉とプレイをしている。もちろん妻は知らない。美しい義姉がどんなに浅ましい姿を晒して悶えるか、その秘密の写真は義姉の家にある。

俺の今秘かに念願していることは、義姉と妻を同時に責めることだ。

女同志どんな気持でお互いの被虐の姿を見るだろうか。

それにしても、義姉を見る時俺は女というものの不思議さを思わずにはいられない。

★縛縄記★

一枝に残った 赤い熟柿



笹田 介一

S Mプレイを気軽に 見せてくれた夫婦

十二月に入って、それまでカラカラ天気続きで、三の酉まである年は火事が多い、いという言い伝えを実証するように、昼間でも夜でも消防車が出動して行く不気味な音を聞かされた東京に、二十一日振りのお湿りがあった日の夜であった。

「八時になったら、ドアのロックを外しておきますから、挨拶抜きで入って来て下さい」と、その日の午後、池袋に住む前野氏から連絡を貰い、私は「とうとうその気になったか……よく口説き落したな」と感心したり、褒めてやりたい気持ちで心はずんでいた。

前野氏とは、休刊した「S Mファンタジア」の読者アンテナを通じて知り合った。「風奇」と略して呼ばれる月刊誌は、西

の同じく廃刊か休刊か分らないままに、我々S M愛好者の前から消えた「奇ク」と違い、住所氏名を明記していれば読者相互の回送文を仲介してくれた、いわば頼り甲斐のある風俗誌であった（願わくば新雑誌「サン・アンド・ムーン」誌もそうあって欲しいし、その意味からだけではなく、永続して貰いたいものだ）。

初めはなにぶんにも相手分らずのことでもあり、手にした親書の内容も半信半疑で、返書も通り一遍なものでしかなかったが、出せば折返しし便りがあり、文通だけですっかり相手の人物が理解できた程、書簡往来はこの秋まで煩ばんに続いた。

前野氏だけには、池袋西口の喫茶店で会いポルノ映画を上映



しているロサ会館内のセレサへSM映画がかかる時には一緒に観に行くこともあったが、新婚ホヤホヤの夫人の方とは面識はない。ただ、グアム島へ新婚旅行した際の記念写真の中一枚が、砂浜につつ伏したヌードで若々しい見事な肢体美を私に披露してくれていたに過ぎない。M化馴致を目指しています、など、S派にとっては生ツバをのんで見守りたくなる話ではあっても、こちらから「会わせろよ」

とお節介すべきことではなく、問われれば語るといふ程度の内容で二人の倅せを祈る気持ちの枠の中に、私はとどまっていた。

前野夫人の緊縛フォトを初めて見たのは、昨年の夏のことである。メカに弱く、撮ってもDPE店に現像を頼むことになるからと、警戒心が強い前野氏は、ハネムーンの記念写真がそうであったように即、目で確かめられるポラロイド・カメラで夫人を

写し、その内の数葉を喫茶店の片隅で見せてくれた。

「差し上げます。いろいろ資料をくださったお礼のしるしに」といわれても、私は「初めての作品なら、なおのこと全部大切に手許に置いておきなさいよ。後になってワンカットでもなくなっていると、なんだか損したような気持ちになるものですから」

私は縄の使い方の出来不出来を問題にし、嫌ったのではないことを力説して彼の手許に戻した。その折りの口約束で、先刻記述したように、「挨拶抜きで入ってきて下さい」との前野夫人を肴にする「夫婦プレイ立会い」の機会が、遂に到来したわけなのだ。

八時数分前……前野夫妻の住むマンションの窓は明かるく、CMタイムで色が次ぎ次ぎに変わるTVの光をサッシの窓枠に映し出していた。その部屋で緊

縛遊びが始まっているとは考えられない。恐らく、「約束通りお待ちしています」と暗示するための平静を装った合図であろう。私は露骨にカメラを肩から提げて訪問することを遠慮し、小さなレザーバッグに器材を一括して入れたのを小脇に友人顔をしようとして頬をひと撫ぜして時刻が至るのを待っていた。

階段を昇るのも忍び足なら、ドアの開閉も忍者の如しである。

待ち受けていた前野氏は、あがりがちから直ぐ奥へ行くように交通整理よろしく腕を向けていた。

「おい、芳子、先生がお見えだぞ」

「台詞を忘れた役者に物影からプロンプターが無声音でつけるように言葉をかける彼の言動は、いささか緊張しすぎていて滑稽であり「先生」呼ばわりされて私は、折角の穩密行動がシラケてしまった。

■ 縛 絆 記 ■

こうまで周囲に気を遣わなくては夫婦の楽しみが叶えられないものなのか……と庶民生活の哀しい一面をも見た思いがする。プライバシーが保護される筈の近代的マンションではあっても、まだ就寝前の時刻であり階上の住人が歩きまわる音が伝わる普請では、気弱な者ほど萎縮した暮らしを送らなければならないのだろう。私は共儲ぎ夫婦がただ寝に帰る巣箱のような部屋に佇んで、予想したわけではなかったが、カメラをレンズ・シャッターのありふれた旧タイプのものにしてよかったと思った。と同時に、他人の前でポーズをとることを決意した前野夫人の健気なさに、誇大ではなく感服したのである。

着衣のまま、胸高に当りの柔らかい綿ロープで拘束され、正座している夫人は俯向いたまま一礼した。

「よろしくお願いいたします」

心なしかうるんだ声の、初めて耳にした夫人の言葉は、ぐつと私の胸をつく。

「夜分……御免なさい」

やっと出た言葉がこれだから、ベテラン面もしれたもの。何に

が御免なさいだ、内心ホクホクしやがってるのにと、妙な照れを感じながら、私は一旦天井の蛍光灯を消した。

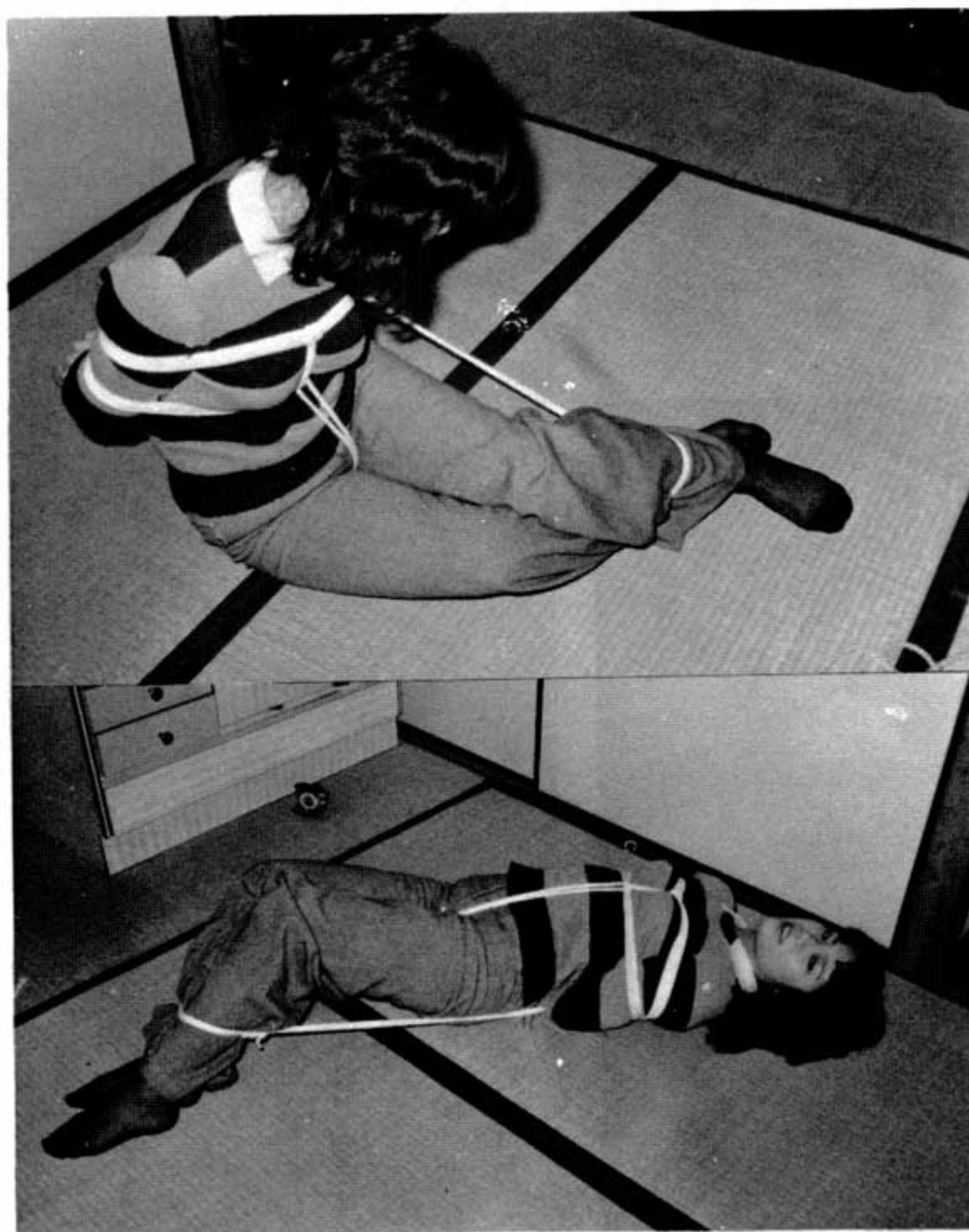
「ああア」

と奇妙な声を出したのは夫の方

である。

「一寸、暗闇で辛抱を……」

私は理由を告げることより先に、窓に暗幕を垂げる行動を起こした。明るい窓に、いきなり黒幕をひっさげた男が映って



モタモタ動いたのでは、それを目撃した人間が妙な関心をもっ
てはいけないと考えて、幕が張
られるまで灯を消して寝たふり
するためのジェスチャーなのだ。
暗幕を吊りさえすれば、ストロ
ボでパチパチ写し出しても安心
と説明しおえて、部屋に再び家
庭の明りを呼びもどす。

ありありと夫人の顔に、安堵の
色が浮んだ。

縛りの技術は“馴れ” “欲”から工夫が……

夫人は、

「お願いですから発表なさる写
真には、顔の判らないものを使
って下さいね」

と私に哀願し、夫へも、

「ねえあなた……よくお願いし
てよ」

と念を押す。

「心得てます。御迷惑がかかる
ようなことはしませんし、選ん

だ写真を更に奥さん自身に取捨
選択してもらいますから」

と答え、前野氏にも頷いて見
せる。

「間違いないさ、先生は固いも
の」

彼はすっかり私を信任し、コ
タツの上に揃えてあったコーヒ
ーセットで接待準備にとりかか
った。



「手首は痺れていない？」

「大丈夫です」

「今度は少しロープを足してみ
るよ」

作業が始まったとなると、私
は年長者の口をきいて、初回の
緊縛記録作りの成果を挙げよう
と立ち廻わる。

胸のロープに別のロープをか
らげて股縄がけにし、前野氏の
人身御供の基本型から責め味を



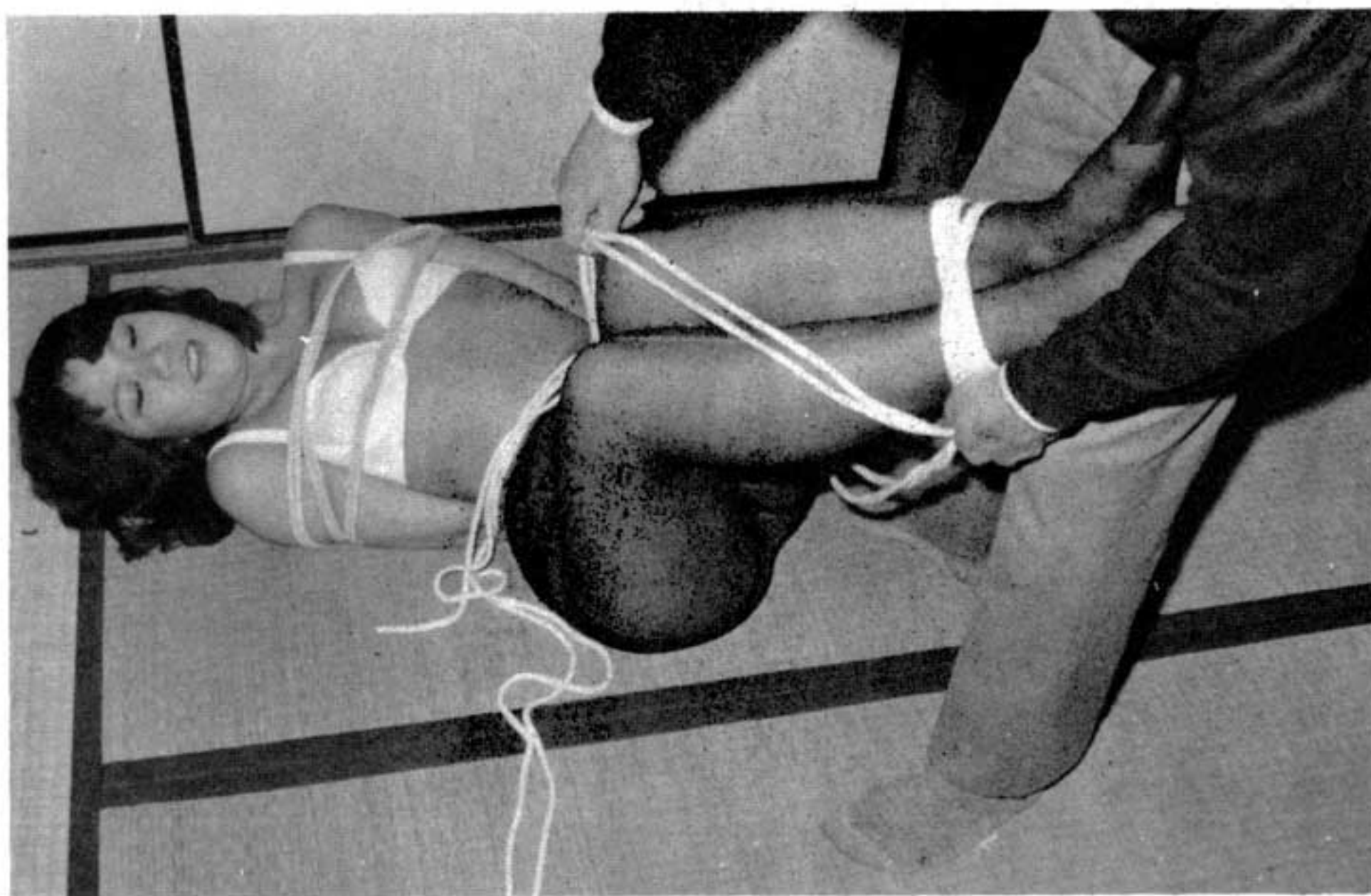
やがて閃光一発……私にとっ
ても前野夫妻にとっても記録す
べき撮影が始まった。

つけ加えてみる。

「奥さんはどれ位の経験を積
んだかな」

夫と妻とのどっちを指名する
でもない質問を与えながら、私

はシャッターを切り続ける
夏以来、夫婦の秘悦が如何に進



展したかをきき
出すためである。
「少しも……」
はにかむ返事
は先ず夫人から
出た。

「全く駄目でし
た……いやがっ
て」

「でも今夜はよ
く」

「えゝ……。芳
子は先生に興味
をもったんです
よ」

「あのね、前野
さん。『先生』
はよしでしょう、
調子が狂っちゃ
う……。先きに生
れたことはたし
かだけど」

『先生』にこ

だわるわけではなかったが、一
目置かれたように良きにつけ悪
しきにつけ思われる言葉の響き
は、前野夫人をなごますことに
ならないように思われて修正を
促す。例え自分が出来ないでい
ることを私にまかせてして貰う
という謙虚さのあらわれであっ
たにせよ、前野氏には年若くて
も同好者としての積極的な参加
が欲しかったし、その障害とな
るものは早めに取り除いておき
たかったのである。

「すみません……。きつくなって
きました」

夫人を股縄かけたまゝ、畳の上
に仰向けに寝かせて、諦観の表
情を注文して撮り終えると、夫
人は暗に縦縄であることを示し
て詫びるようにいった。

「これで、ひと息つきましよう。
ご苦労さん……。私のこと、いや
らしい男に思ふかな」

ロープを解きながら耳許で囁
くと、「えゝ、本当。ゾゾゾッ

としますわ」

と、やっと軽口がききだしは
じめた。

「前野さん、奥さんにきらわれ
だされた。だめですよ、貴男が
今夜の機会を最大限に、マゾ馴
致の腕のほどを満天下に示すよ
うに活躍してくれなさい。私は
レポーターなんで……。ここ
に羨しき……。仲睦じき夫婦が
いると、夫婦でSMプレイを楽
しんでいる実践者を紹介するの
が目的で、私が奥さんの馴致を
買って出たのとは違うんですか
ら」

私はコーヒをいれてくれた
彼に感謝しながら、夫を刺激し、
夫妻の融合を画策する。「キス
したくなったら私のことを眼中
におかずチュウしなさい。抱擁
したくなったらおじけずやって
みなさい。私はセルフタイマー
がついたカメラのように、自動
的にシャッターを押すだけのカ
メラマンで、一部始終を記録し



の上から掛けたロープで、胸の谷間を一段と強調するようにした前野氏は、してやったりと会心の微笑をこぼす。夫人の乳房は見事な隆起をのぞかせて私の視線を針づけにした。

ておいてあげますから」

私の喋りを聞いて、どうもそこまでは……と困惑し肩をすばめ合う二人であったが、私がフィルムを交換している間に、夫は妻のセーターを脱がして、再び元のように胸からロープを掛け出した。

「エエネエー、エエゾウ」

お国言葉であろうか。それともわざと野卑に言って、妻を羞恥困惑させて愉しもうとする魂胆なのであろうか。ブラジャー

どうやら彼我とも男二人はマザーコンプレックスが強いようである。

「こうしてみると、自分のおチチじゃないみたい。ウフフ……」
「そう。貴女は今までの貴女じゃなくなった……マゾの女に变身したのさ。変身は今までの自分に、いま一つ新しい個性……別の一面を発見して、それだけ人間生活の視野を広くもって見ることが出来るようになる。単純にいても、"よろこび"が

広がることになるんだと思うねえ」

私は乙に澄まして被写体を狙う婦人科カメラマンではない。不様な恰好して寝そべり、すねっ子が壁際の隅でうずくまるように縮み込んでピントを合わせ、気に入らなければサッと位置を代える。心では充分物音に気をつかっているつもりだが、傍若無人にも見える機敏な変動には前野氏の表情を盗み見ると困惑がつきまといっていた。

「奥さんに変身期待ばかりしては駄目ですよ。ご主人の方も『よし、体面をかなぐり捨てて、挑発してやる』って気にならなきゃ……ハッスルしなさい」

「それがね、どうも……。どうやって縛りに変化をつけたらいいのかわからなくて」

「縛りの技術は『馴れ』ですよ……『好み』です。工夫は『欲』ですよ。たとえば、貴男が今、自分の恋人に"いやらしいこと"

していると感じていたとしますね。当然恋人の方も薄気味悪がって逃げだそうとするでしょう……そしたらどうします。逃げられちゃあかなわない。そこで何をするか、です。奥さんは温和しいからじっとしていてくれる。でも、大事な人なんですから更に自分のもの、徹底的な占有欲を示してみたくありませんか」

「そりゃあ、もう」

「そこで、貴男は具体的にロープでそれを誇示するんです。相手が逃げ出さないように、逃げられては堪らんと思いつながら、足の自由を奪うこと……お人形じゃないんですから場合によっては奥さんだって『貴男は嫌い』って逃げ出しますよ」

私が口数多くなるということとは、采配癖が昂じて来た証拠。つまり、じれったくなってきたことを示している。

その"状況作り"……設定の示唆に、私に関心が湧いたとい

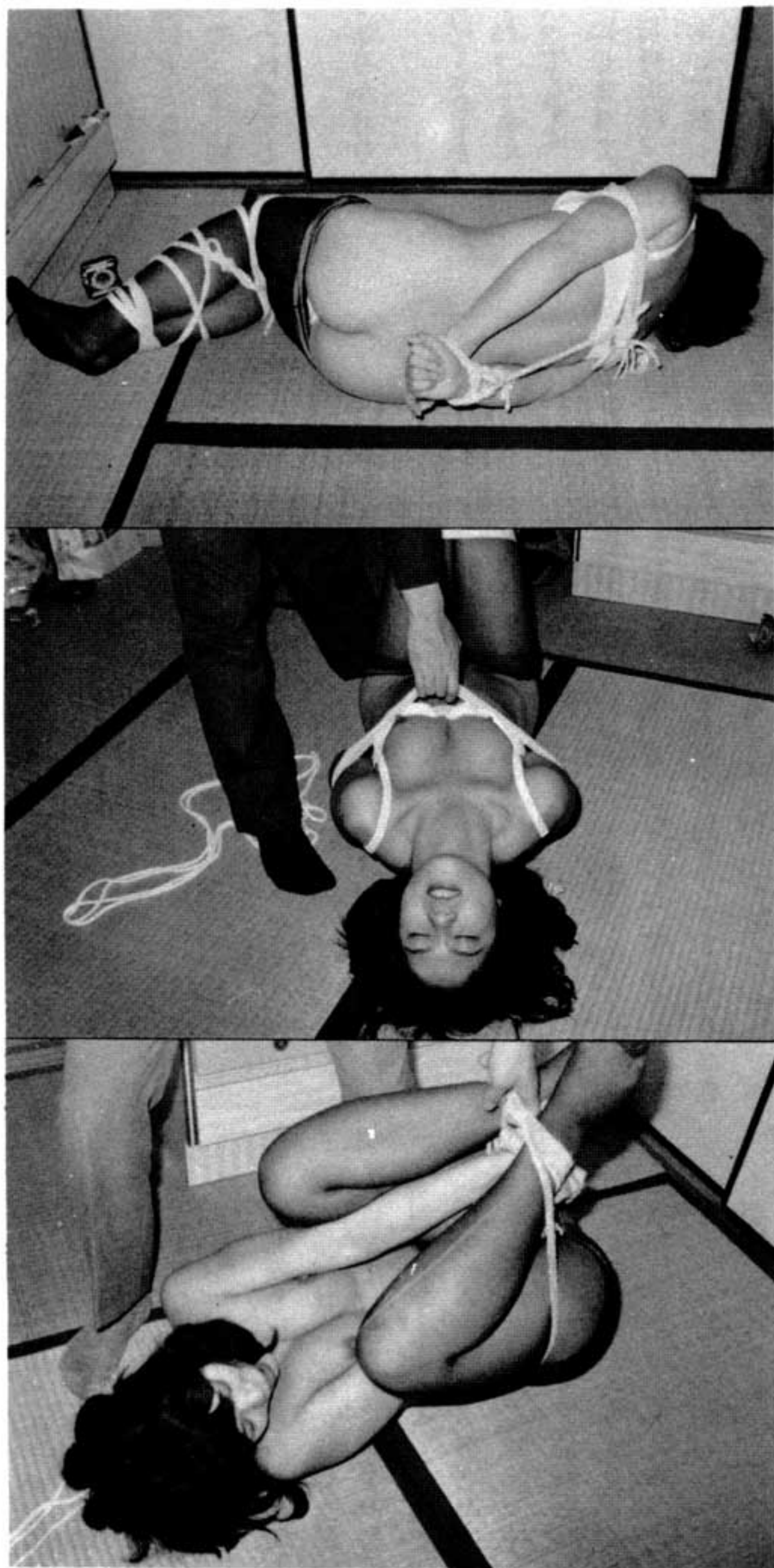
う夫人の方が、悪戯っぽく瞳を輝して反応した。彼女はごろりと横になり、両足を投げだしたのだ。

「もう飽きたわ」と云っているようであり、（とっととしてよ）と歯痒く思っているか、（もっと愉しませてよ）とせがんでい

るように見える、夫への挑戦ポーズなのだ。
なにかのはずみで走ったらしいパンストの伝染が一条、足の内側を太腿まで突き貫き、ただならぬ色気を見せていた。

「奥さんを一日借り出して、私ならこういう緊縛写真を撮る、
というような『責めのスタイルブック』を作ってみたいナ……
顔の表情までバッチリといったところは出来ないと、それまで頼むことは出来ないから、特長のあ
る目だけの表情に期待して、全
頭マスクで何処の誰れかは判ら
ないように工夫して……」

「そんなもの、あるんですか」
「ありますよ」
私はすかさずバッグから、前野夫妻の住むマンションの東方の位置にある「奴隷市場」を訪ねて手に入れたカタログをとり出し、全頭マスクなる見本写真の頁を開いて、夫人の頭上に差



し出した。

「ま、本当、凄ごーい。……あとで見せていただく」

「これなら俳優が厚いドーラン化粧をするのと同じで、全く別人のようにポーズがとれるでしょう」

「さあ。まだ、どうなるか分かりませんわ」

夫人は私の誘惑をはぐらかせた。ようやく度胸がすわってきたのか、わざと話に入ってこずに、うっすらと額に汗をにじませて両脚拘束を完成した前野氏は、このポーズで撮っておいて欲しいといったげに身を引いた。

「奥さんをくすぐってみたら……足の裏でも小脇でも……」

「いやいや、くすぐらないで……」

悶えちゃう……駄目よ、貴方」

夫人の「駄目よ、貴方」の語感、どんな修飾語、形容詞をもつてしても文字では読者に伝わるまい。甘え・拒絶・媚態など、女性の内に秘めたすべての、



男にとってはたじろぎともなる要素が、その慣用表現にある。一步退り二歩前進を促す、蟲惑コトバの妙調なのだ。

言句が欣求であるなら男にとって至福なのだが、彼も私も断じかねていた。いや、と云われると余計したくなる子供っぽい悪戯精神が旺盛な者ほど、日本の風土で伝播されつつあるSMプレイの加虐者ではないだろうか。くすぐりで攻略しやすくなる

夫人だと判って、直接手を下さずとも十分サジステイックな感興を楽しむことが出来ると、結論めいたことを思いながら、私は北叟笑みをかくしてカメラを向けていった。

「この先き、どうしましょう」

「奥さんをキイキイ云わせましょう。首すじ……うなじ……内腿のあたりをソフト・タッチでくすぐったがらせて」

示唆役に回わって嗜虐を味わ

おうとする私に、スーッと真顔になって云った夫人の言葉は意外なものであった。たった一言にすぎないものだが、夫人自身の弱点を要約して余りある……若し仮りに痴漢に襲われでもしたら、其奴が私の表現を鵜呑みにしていたら、変質者の豹変が目に見えて来ようというものだ。

「私の知り合いに、奥さんのウエストを極端に細く締めつけて、この世界の言葉だと蜂胴とか云って、ヒップを大きく見せて楽しむわけですが……奥さんの方もキューツとウエスト・ニッパが締めつけてないと気持ち悪いというように馴らされた人がいますよ。つまり奥さんも馴らされて欣んでいるわけです」

私は静かに話題転換を図った。そしてそのまま次ぎのポーズへと移行する。

「虐められて喜ぶような人って、本当にいます？」

加虐効果を狙った拘束がSMPプレイの理想!

「さあ、加虐・被虐の程度問蔵にもよりますが、夫なら好きじ

やあないけど愉しませてあげてもいいっていう忍耐で、かなり

ハードな加虐行為について行てもいいっていう忍耐で、かな

りハードな加虐行為について行ける婦人はいますね。でも、そのあとの慰めを期待しているんですよ。いたぶられ通しでエクスタシーに沈むという本物さんは知らないし、特訓されたいと名乗り出てくれる人も私にはいないし」

夫人を安心させた方がいいの

か、刺激して負けん気を起こさせた方が良くないのか分らないままに、「いる、と云ってくれ」と私の話の方向に期待している前野氏を裏切って回想談を打ち切った。

私の体験不足、見聞不足はとうに前野氏は嘘偽りなく話して聞かせてあった。ここへ来て都合よく紛飾することは私にはできないし、短兵急に前野夫人をマゾ馴致出来るものとも思っていない私は、視覚興味を満たさせる緊縛にいつしか手を貸してロープ尻を括りかくした。

引き立て用の縄尻が下っているのはいいが緊縛寸法を見取り違えて、無意味にだれた扱いになっているのでは不様である。

「これで出来上り、ですわね」

と私が云った時、前野氏は乳房を押しかくしたような腕あしらいが不満のような顔をした。

どうやら緊縛は、後手高手小手の一般方式が正しいとも記録



価値があるとも思い込んでいるらしいのだ。

「芳子を……ヒイヒイ云わすことが出来ますか……？」

「キイキイ」が「ヒイヒイ」に変わって反発しているような夫の前で、「御免なさい、さわりますよ」と断りながら、姐上の夫人を三転四転する度に様々な角度の“視姦”を教え、既存するSM雑誌のグラビア写真の影響を是正させるようにする。

それでは、SMプレイを夫婦の秘悦に直結させることを前提にした快樂希求の一典型の筈なのだ。

「縛りの変化だけを記録しておこうと思うなら別ですよ。だが、初めはいやがる相手を手なづけて行く野心があれば、あれも出来る、こうもされるなという加虐効果を狙った拘束が、SMプレイでは理想です」

夫人は、体の向きによっては骨身にこたえると云ったが、な

にかされそうな不安が絶えずあって、「ちょっとばかり変な気持ち」と告白した。

「くすぐり責めを加えるとしたら、ブラッシがいいかな、ペンのような羽根がいいかな……筆の穂先きでも絵筆と毛筆用では違うし……」

実際に悶え狂わせようとしたわけではない。前野夫人に好感がもたれて、次回には私が率先者となって、緊縛のパターンからSMチックな陶酔の渦へと記録の達成が叶えられたら嬉しいものだとの夢の言葉なのだ。

「全頭マスクを冠ぶせて、ですの？」

「だとしたら『やってみてもいい』……のかしら」

「フフフ……」

夫人から、ふくみ笑いが返ったところで小休止を宣言した。

前野氏には私の手土産を、それとなく期待している風情があり、冷えたコーヒーをすすするた



め、コタツに足を入れる時の「よっこらしょ」の掛け声が、婉曲な妻へのいたわりにも思えて、タイミングとして適切であった。「ここへは、SM関係のお客様は、初めてですよ」

「それは光栄です」

夫人は自分で口にした「SM」の言葉に首をすくめた。一旦露

わにした素肌は慎重にガウンで仕舞い込まれ、夫の側に寄り添って私が部屋に置いたままでも来た“奴隷市場”のカタログを忘れずに持って来て眺めだす。一頁一頁を丹念に見て行く物静かな仕種なのだ。

第三者が加わった撮影の気分はどうなのだろうか、問いた



だしてみると、

「お父さんに見られているみたいだった……」

と顔を上げずに云って、クックと笑った。上品な、恰幅のいい壮年者でなくて、ヘゴウなシバ天頭の小父さんで、済まなかったねえと笑って返えすと、

「あらっ……土佐の方」

と、夫人は私を見、夫の顔を覗き込んだ。

同郷人だとしたら、「困るウ」のだそうである……物部川でシバ天振りを発揮していたという幼時の話が、そのあと淀みなく語られて、南国育ちの健康な肢体がスッと目の前から消えた。お酒を飲みたくなって、キッチンに立ったというのだから、さすが土佐っ娘である。

しかし、そのあと、ガソリンを入れたテスト車は、SMテストコースを快調に走り出す結果となって現われた。

M化馴致を目指すと言ってい

た前野氏の、着実に歩み続けた調教は、土佐鶴か司牡丹の芳香をかぐわせて、それを裏付ける化身となって私の目の前にあった。「機嫌がすこぶるいいと、『好きにしていいいわ』といってくれます」

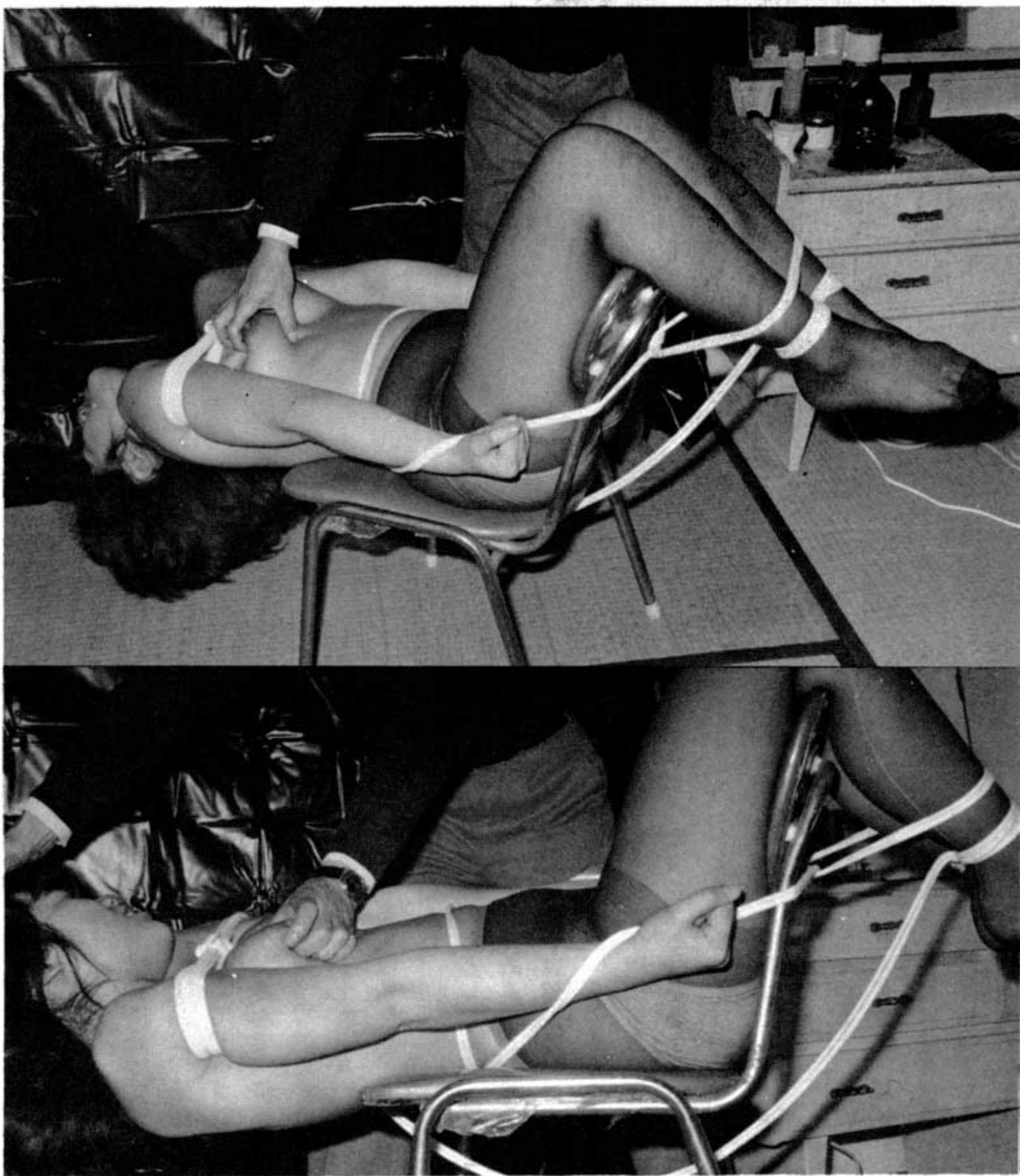
とは鼻下長族酋長の悦に入った前野氏の言である。

「それに、近々生理が始まるらしいです。そういう時の芳子は、自分じゃあ気がついていないのかもしれないませんが、赤々と夕日に映えて……山鳥さえ止まれないう細枝の先きに残された熟柿のようなものです」

夫の観察は恐らく的を射たものであろう。表現もさることながら、屈託のない睦しい若夫婦の生活を垣間見て、見掛けだけしなマンションに住むことだけが殊更気の毒に思えてきた。

「どうですか、これからアバンチュールしませんか……」

別人の手にかかって、一段と



夫人の緊縛美を引き出し記録に残しませんか、との誘いかけが、すらすらと厚かましくも私の口をついて出た。

「でも急に云われても……」

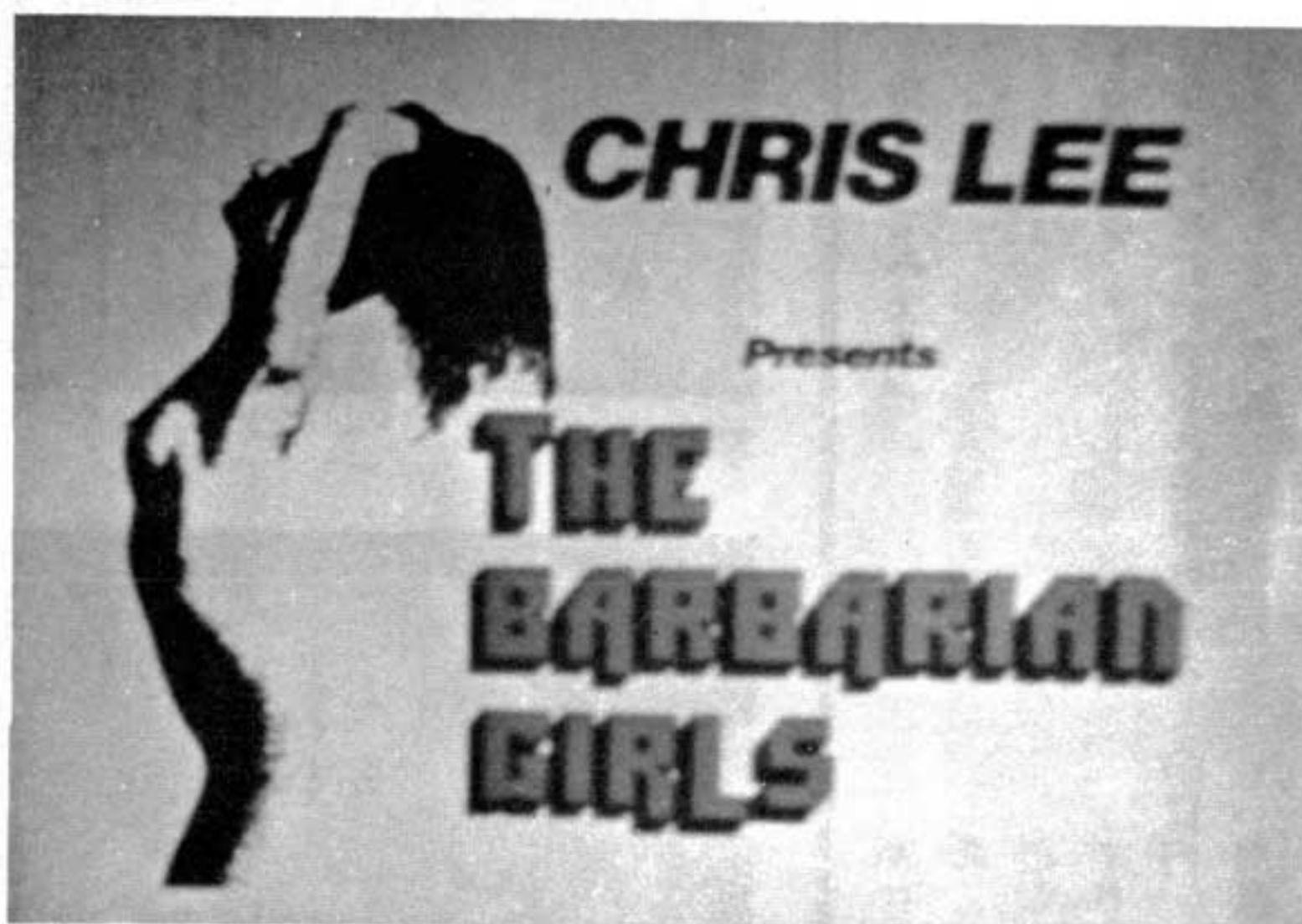
「手配はつきますよ、今からでも」

夫妻の顔を交互に見較べて、辞退の意志のないこと、否、かなり好奇心関心をのぞかせていることを悟って、私は一気に懐柔策を巡らせ、家をあげさせることに成功した。

カラカラ天気を程よい雨量で喰い止めた日の続行撮影の次第は、その夜、私からバトンタッチした六本木氏が次号で語り続けることになるう。

私からの連絡で、「ホイキタ、サッサ」と快諾した氏は、愛用の車で器材をしたま運び込み、予定通告の時刻を大幅に回って私たちが到着したにも拘わらず、レンズキャップを外して前野夫人の深夜撮影に打ち込んで行った。

● ポルノ 8 ミリホームムービー紹介 ●



バーバリアン ガールズ

「スナッフ」をしのぐ残酷映画！

子宮をえぐり出す
実に凄惨なシーン

バーバリズム／変行／に語源があるとみられるバーバリアンは、野蛮好みというのであろうか……実に凄惨な光景を展開する。しかし、極く最近の一般映画館で観ることができ、ポルノのセンサーショナルな点を探り入れている（年代的にみて、どちらが先行したか判定できないが）興味ある長篇作品だ。

色彩・画像とも鮮明で、それが驚異のストリーを一層真迫なものにしている。ただし無性交もの……その点だけは失望する人もいるかもしれない。レズ・ラブの愛形で物語が終始するからである。

本作品を秘蔵する方は市井の蒐集家で、この道の隠れた著名人ではなく、SM世界には余り関心を持たれない方である。ご当人は女性の同性愛ものと思ひ入手されたそうであるが余りの目を覆いたくなるシーンを見て以来二度とご自分では映写したくなかったといわれる。今回は特別なご厚意によって貸与して下さった。

以下、シナリオ風の採録によって、そのあ

らましを誌上紹介してみよう。

○タイトル

○突然出現する高級車

その車のかげに真紅のドレスを着た二人

連れの女性が見える 写真①

○疾走して去って行く車

○草原

路傍の草むらに、車に跳ねられた女が倒れ、介抱する連れがいる。写真②



写真①



写真②



写真③



写真④

倒れた女は口から血を流し、人事不省である。赤毛のガリーヘアの女性が抱き起こし、農家の納屋風の建物の中へ引きずり込んで行く

○屋内

異様な部屋。普段から同性愛者がS Mプレイに使用している場所らしく、石で固めた梯子状の拷問具が立っている。

赤毛は金髪女性をその下に寝かせる。口から垂れ流れる血が赤毛の異常さを刺激

○金髪の女

したようである。写真③

外傷はないが気を失ったまま。彼女を看護するどころか、赤毛は着衣をはぎ、赤い服を脱がすや否や気がつくように手荒く頬の左右を連打する。苦痛から我に還える女。だが起き上がることは出来ない

○赤毛の女

赤毛は、今度は金髪からショーツまで取り去って、彼女を後手に縛り上げて行く

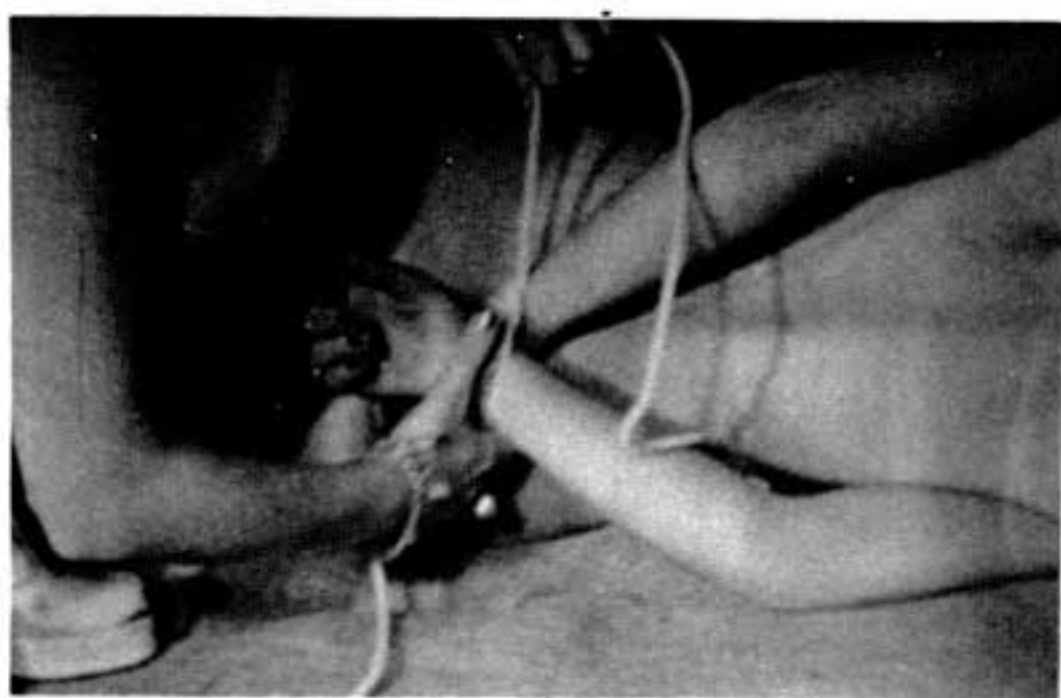
写真④

○金髪の女

手の自由を奪われた上、乳房を激しく揉みしごかれ、次第に与えられる快感に事故の苦痛を薄れさせて行く。写真⑤

○赤毛の女

乳房を荒撫していた手が、鋭敏な個所を愛撫する方へ代って、ラピアをおし開き欲情の昂進を查察する。多少逆らっても金髪はなすがまゝになっている。



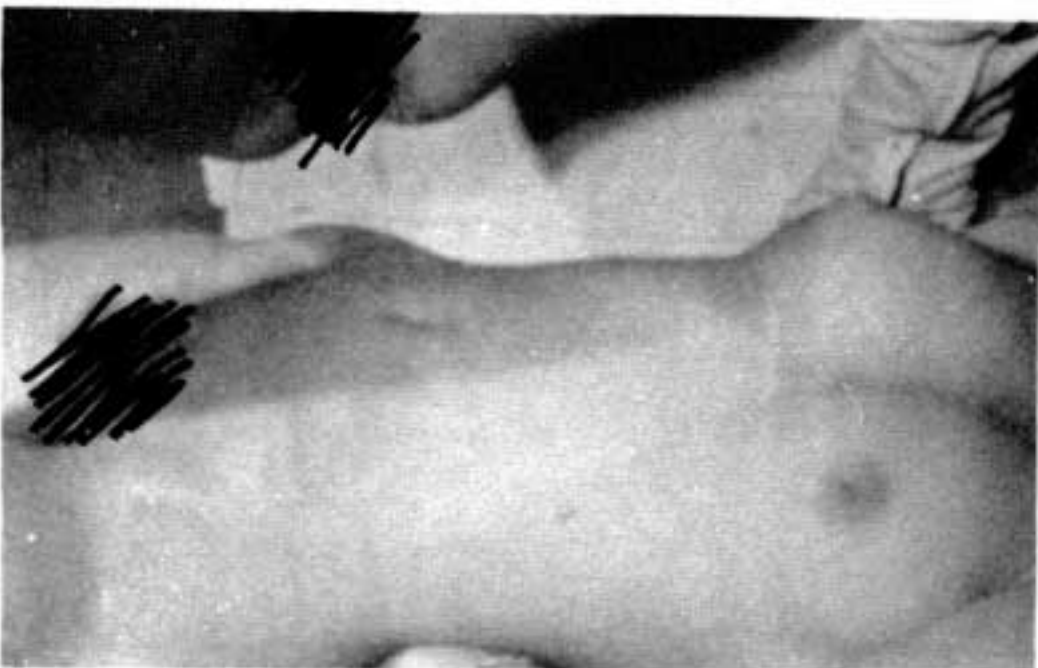
写真⑤



写真⑥



写真⑦



写真⑧

赤毛の女は立ち上がり、自分も薄いショーツを脱いで全裸になる。写真⑥

○金髪の女

快楽に酔い、その放心状態でいる体の上に、赤毛の排尿を浴びせかけられる。

放射される温水は腹部を激しく打ち濡らす。

○梯子型拷問台

赤毛は相手を吊り上げて行く。力まかせに綱を曳き、無理矢理、拷問台に添えて立たせてしまう。写真⑦

九尾の鞭で、いやがうえにも被虐快楽を

強めるように、赤毛は相手を強弱こども打ち据えて行く。腹部といわず胸部、

秘丘にも鞭は飛び赤条が無数に刻み込まれて行く。写真⑧

向きを変えさせて背面にも鞭を乱打する赤毛。金髪の女は絶叫や呻吟を繰り返えし涕泣する。

鞭打が止まり、拷問台に両足を広いて括りつけられた女は、再び查察の指で秘肉



写真⑨



写真⑩



写真⑪



写真⑫

をかきわけられる。その完熟した部分が赤毛にとって嫉妬の炎を燃え上がらせるのだろうか……彼女は長反身のナイフをとり、金髪の女の秘奥目標に突き刺して行く。写真⑨

○金髪の女

この世の終わりであるような絶叫。写真

⑩ その悲愴な叫喚も消えがちになる。

○えぐるナイフ

長い刃はすっかり秘谷に埋没し、えぐる

ように柄を握る手が動く。

○金髪の女

再び叫喚する女の顔 写真⑪ □からも

新らたな血すじが流れ落ちる。

○えぐるナイフ

えぐり方は次第に烈しいものとなり、剥

離した粘膜が刀身に巻きついて見え出し

てくる。写真⑫

○金髪の女

苦痛極限の悲鳴

○赤毛の女

えぐる手を休めず、恍惚となって行く。

○したたり落ちる血

金髪の女から落ちる血を足にあびて

写真⑬

○赤毛の女

その惨忍さは上昇の一途である。

○金髪の女

狂わんばかりの苦悶。

○赤毛の女の手



写真 ⑬



写真 ⑭



写真 ⑮



写真 ⑯

体内から離落して来た子宮からナイフを抜き、血の流れを盛んにして自分の肌につれ流させる。指先きは臓物化した子宮の中をまさぐりつづけている。

○赤毛の女

血を浴びて前よりも強く陶醉している。

○えぐられた秘肉

腹筋から切り離されて、引き出された肉塊。

○赤毛の女

位置を変え、変えると同時に胸や肩にも

血を浴び、なぜつける。更にナイフで子宮を切り開く。血の奔流を自分の乳房で受け、異様な肉塊を嘔めながら我が身を愛撫する。

○梯子型拷問台

虫の息の金髪の女を拷問台から解き、床に寝かせつける。

○赤毛の女

再三度手にしたナイフで、金髪の女の腹部を狙い、刺す。

○金髪の女

激痛のあがき

○その腹部

ナイフの柄が腹部に刺し込まれ、赤毛の女の手が動く。傷口からはみ出してくる

腸管

写真 ⑭

○赤毛の女

腹部をもえぐりながら恍惚無上の表情

○金髪の女

視点定まらぬ空虚な目。だが苦悶の表情

はなく、激しい欲情のあとに快楽を享受して安らぎを得た女の顔である。

○赤毛の女

恍惚放心 相手の忍び寄る死の影にも
気づかず、腹部をえぐり続けている。

了

「スナッフ」以上 の異常な映画!!

鞭やナイフはペニスを象徴するといわれますが、西欧流の異常分析ながら血生臭く終始それらの加虐でうずめつくされた一篇でした。トリックを巧みに使っているに違いないのですが、マフィアが製作にかんでいたともいわれる殺人映画「スナッフ」の公開後のこ

ともあって、あるいは実際にやったかも、の
疑念さえおこさせます。

血は日本の演芸で使う血ノリではなく、肌
に流れて乾いて行く様にも動物性のもので使
っている。作りものらしからぬ工夫のあとが
見られて感心した次第です。そうした感心で
も持たなければ後味の悪い思いをしたと思う
映画でした。



写真 ⑰



写真 ⑱

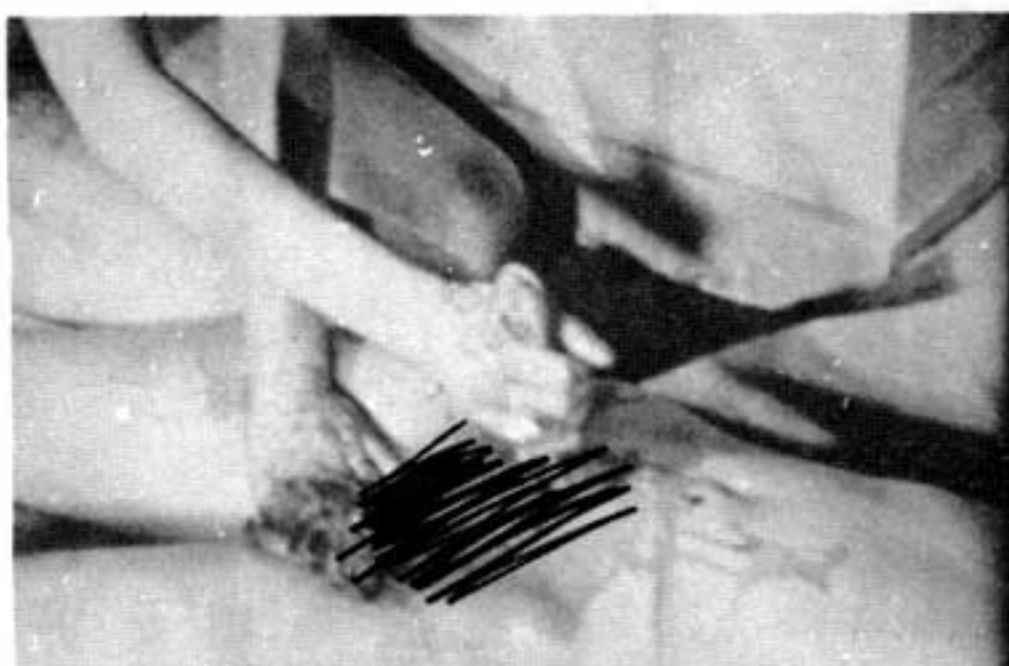


写真 ⑲



写真 ⑳

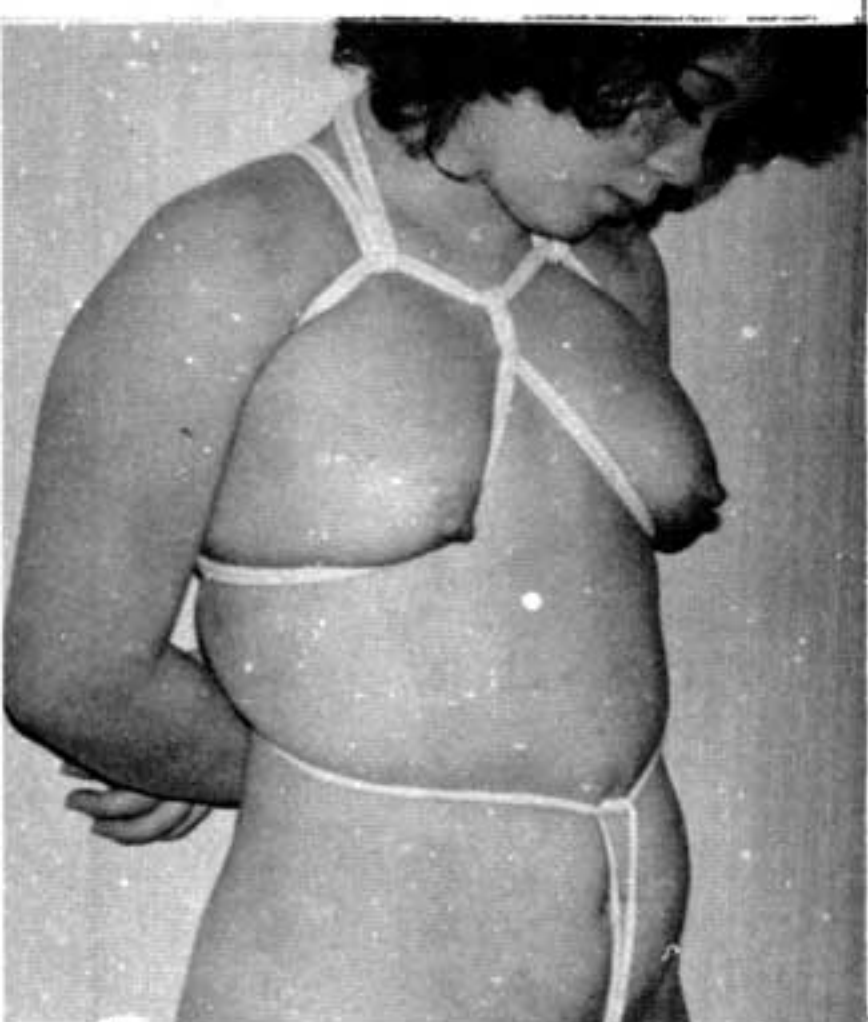
縛り方教室(後手Aの型)

六本木 薫

力を抜かせ、手を後にさせる。両の手を後ろで交互させると、腰の上あたりに設置する。そこへ十字形に縄を巻きつけられればでき上りになる。

ただし、かなり強く縛っても、縛られた両手を上下にゆすっていると、縄目がゆるんでくる。さらにゆすりを続けると、もう縛りの役目を果さなくなってしまう。

そのため、縄尻を腰に巻きつけてしまうと、上下運動はできなくなってしまうので、このよ



うな縛り方では、腰縛を施すべ
である。

SMプレイの場合には、縛り
方が男性、被縛者が女性が多い
から、できたら、縄尻をとっ
て股間に通した腰縄にするとよ
い。

少くとも、縛られた手首を上
に挙げようとする、鋭い圧迫
が連動する縄に沿って股間の鋭
感な個所を襲うので、どうする
こともできないはずである。
だいいち見た目にも楽しい眺
めである。

着衣の場合など、適度にスカ
ートが捲くれあがり、白い太腿
の間を通る眺めなど、限らない
エロティズムを感じさせる。
チラリズムは結情なものだ。
相手も、そうされた場合の着恥
感は強いと聞いている。

縛り方教室(縄編)

六本木 薫

普通、縛るといえば、まず主
体になるものは縄である。細縄、
中縄、太縄とあるが、この際太
縄は除くことにする。なぜなら
は、太すぎると縄のかけ方が不
自由であり、どうにもこうにも
手に負えないからである。

まずは細いの中からだが、細い
縄は非常に使いやすい。極端に
いえば糸でもいい。ただし肌を
痛めることがあるから注意が希
ましい。

うんと簡単な縛り方でも、肌
に喰いこむ痛さで被縛者自身が
心理的に被縛感を味わう。だが、
見た目には大して面白くないし、
緊縛感はゼロに等しい。

さて中縄では、これは使
いやさ、被縛感、視覚面、共
にグッドである。場合によつて
は二本引きにして使うと、ぐっ
と緊縛感も強まる感がある。
縄コブを作って強調したい時

でも、細いのでは、まるで見え
ないから意味がない。その点、
中縄だとかなり迫力が出てくる。
ましてや、二本引きにすると違
った魅力が出てくる場合が多い。
使いこんだ縄だと、適度に柔
らかみを帯びているのでよいが、
買ったたとゴツゴツし、とも
すると肌を痛めるので、できた
らば、一度煮てしまうと硬さが
とれると聞く。



「なんの用事なの、早くいってちょうだい」
「……………」

マスマは二十才、素晴らしく発達した姿態を持った娘だ。身長は一六〇センチはあるだろう。バストの張りも、ウエストのくびれもトップの型も申し分ない。

難といえば、少々小生意気なことだった。あ、そうそう忘れていた……私は、ここキャバレー「バッカス」のフロアー主任、二十五才。

都内のある某所にある大きな社交場。ボーイから始めて三年キ

ャバレーとなると従業員の移動も激しい。あっという間に仲間の大部分はほかへ変ってゆき、先輩連中も昇格した数人を除いては、みんなは辞めていった。

さいわい経営者にも信用されていた私は、先輩連中を追い越して主任の任務を与えられていた。

夜の社交場の悩みは、売れる女性の確保にあった。入れかわりが激しくって、ちょっとよい娘だと他店にすぐ引き抜かれたり、自分から売りこんで辞めて行ってしまう。

そうすると、女の子についてお客さんも移

動をする。これではたまらない。ある程度の保証のアップで引き留められるのならいいが大巾に違ったギャラで誘いをかけられていたのでは、どうすることもできない。

ある日私は経営者に呼びつけられ、引き抜き防止策を考えろといわれた。どんな事でもいい、ともかく引き留めろという。引き留めにリストアップしている女は数名、中でもマスマは絶対に確保しろ、ある程度までならギ

りになっていて、普段は全然使っていない。

「ちょっと用事があるんだけど……………」

そういつて連れてきたのだが、場所が場所なので、マスマは警戒しはじめたらしい。

さり気ない調子でいた筈だが、女というものは、なにか本能的に気づくらしい。

（早いとこ料理しちまおう……………」

私はやにわに近づくと、いきなりマスマの左手を握るとねじりあげた。

「あッ／＼なにをするのよ！」

甲高い悲鳴を挙げてもがいたが、いくら大声を挙げてても営業中の騒

ぎの中では聞えるはずがない。

ズボンのポケットから、丸めて

あった縄束を取り出すと、素早く

ねじりあげた手首に巻きつける。

肩の関節が鳴り、痛みを柔らげるために、マ

スマは嫌応なく私に背を向けていた。

「いやッ／＼やめて…………やめてよ、なにすんのよ…………いやだあ…………いやよう」

段々と泣き声になってゆくのに、多少の抵抗はあったが、やり始めたからにはやめるわけにはゆかない。

暴れるマスマの右手を捕えて、左手に重ね

て縛りつけると、私は一息ついた。余りの縄

妻との過去

告白手記

田代正志

チャの方もあるとのことであった。

散々考えあぐねたが、ふと妙案を思いつい

た私は、独自の方法を実行することにきめた。

もし、失敗したら現在の地位も危ないかもしれ

れない。その代り…………と経営者はいつてあ

とは濁してしまったが、うまく行った場合に

は、かなり私の待遇も変るはずであった。

キャバレー「バッカス」の地下室は倉庫代

で胸の上下に縛りつけ、結ぶと、もうマスマの両手は完全に動きがとれなくなっていた。

私もそうだったが、予期せぬ私の行動にマスマは色を失っていた。動悸が激しく、肩で荒い息を洩らしている。

ブラジャーをしているのだろうが、マスマの胸のふくらみは、見事としかいいようがない。荒い息遣いのために微妙な動きを見せるバストに、思わず目がいつてしまう。

人間というのは、足があれば逃げられるかといえば、そうではないそうで、バランスというものがあり、この様に両手を縛られてしまつと、重心をとるのが仲々むずかしいそうで、マスマはと見ると、逃げる意志を失ってしまっているようだった。

気の強い娘らしく、しきりと泣きじゃくっていたが、私をにらみ据えてはいたが、哀願をする気配はない。

次に私のすることは、あらかじめ隠してあったポラロイドカメラを持ってくることであった。

いちおう縄の余りをそばの柱に結びつけておいて、部屋の隅から持ってきたカメラにフ

ラッシュ・チューブを差しこんで持ってくる、いきなり彼女の姿に向けてシャッターを切った。

「あっ／＼……」

突然の閃光に戸迷った風を見せたが、かまわず二、三枚続けざまに写した。逃げようと

させ直すと、思いきってスカートを捲くってやる。

「いやあ……」

胸についているブローチをとって、捲くたスカートを留めてしまう。息がつまりそうな腰の線が露れになる。黒いパンティストッキングがはち切れそうに見える。

「よっしゃ／＼」

ようしやなく私の手が、パンティストッキングと、その下にはいるパンティにかかる、素早く下に引いた。

「あっ、あっ／＼……」

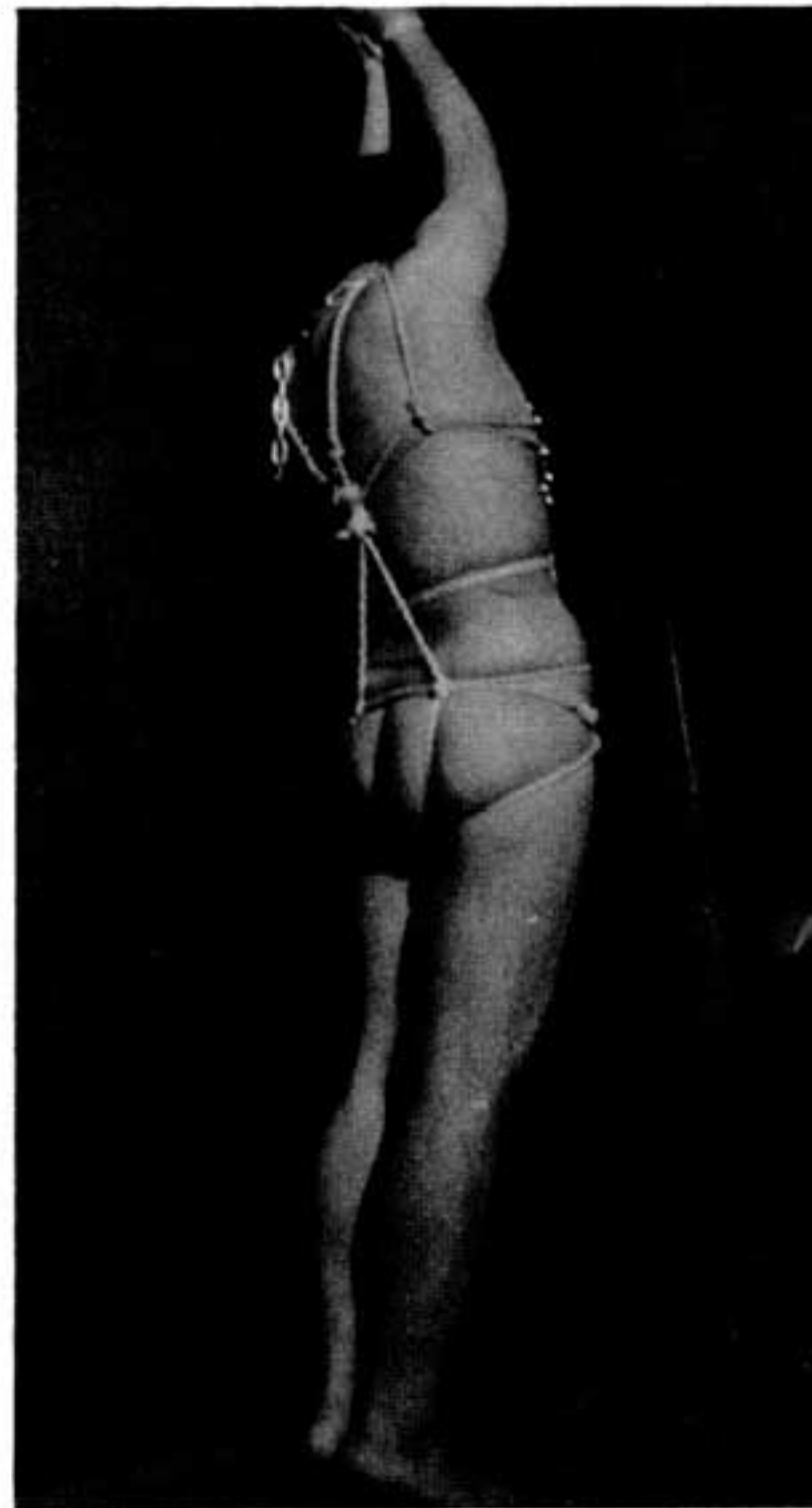
そうさせまいとしても、両手の自由は全くないので、喘ぐことしかできない。

「うむ……」

思わずうなった。素肌の白さ、きめの細かい肌のまろやかさ……茂みの黒さ……

じっと見つめていた誘惑を押えると、カメラを装作してフィルムを消費させる。太腿の美しさは抜群だった。ウエストからデルタにかけての線の素晴らしさ……

単なるヌードと違って、迫力のあることおびただしい。



閃光用のフラッシュチューブが残り少なくなつたのに気付き、最後の仕上げにとりかかることにした。

もう二本縄を取り出すと、私の手はマスマの左右の膝の上にそれを巻きつける。そうしておいて、縄をまとめて天井にある鉄パイプに投げつける。

うまい具合に縄は左右別々にパイプを越えて落ちてきた。適当な間かくに調整しておいて、二本の縄を手元でひとつにまとめると、力一杯引いた。

「痛あい……いたいッ、やめて、やめてえ」マスマは所かまわず悲鳴を挙げた。外に聞こえはしないかと迷ったが、そんなはずはないと思ひ直して、近くの柱に結びつける。

なんと表現したらいいのか……ともかく凄惨な眺めであった。柱に嚴重に上半身を固定された上で両肢を左右に拡げられた恰好、地獄図絵であった。

秘部は余すところなく私の前に露呈されていた。すべてが……である。

気がついた時は、フラッシュチューブはゼロになっていた。

それらのポロライド写真がモノをいって、

マスマは他店からはいくら誘いを受けてもやめなかった。一種の脅迫であった。

むろん、私としては、この写真を利用してマスマから甘い汁を吸う気はないし、この秘密は彼女と私だけのものとしていた。

他店のスカウトマンは、やがて引き抜きをあきらめていた。

マスマ自身も、相棒の面倒はよく見たし、引き抜き防止にも協力を惜しまなかった。

キャバレー「バックス」は、ますます隆盛し、チェーン店も何個所にも拡げていった。

仲間連中も、なぜマスマを引き留めることができるのかいぶかった。

経営者も、その防止の方法を知ろうとやっきになったが、これだけは絶対に喋らず、ありきたりの事しかいわない。

納得したのかしないのか、わかったような素振りをしたのは、結局のところ、本筋には関係のないことだからだろう……。

私自身の待遇がよくなったのも当然のことであった。二ヶ月後、営業部長に抜擢されたけれども、仲間からのねたまはまるでなかった。

自身では気がつかなかったが、私には営業センスがあったのだらう。それとも偶然なの

かしらないが、店の対客政策はことごとく当って、磐石の基盤の上に私は立っていた。

えっ、それからどうしたって……？

現在私がこの告白文を書いているそばで、甲斐甲斐しくお茶をいれてくれている女房、それがマスマです。

正確にいうなら、田代真澄。

あの当時の写真は、破り棄てることなくまだ手元にあります。

(二人の結びつきの記念すべき写真……)

女房がそういうのですから、私だって異存ありません。

いゝえ、他の人には絶対に見せません。この写真は、私達どちらかが死んだ時、燃やしてしまう約束になっていますから。

あ、そうそう、忘れましたが、私のいるキャバレーにも時々足を向けて下さい。

もっとも店名は違いますけど……



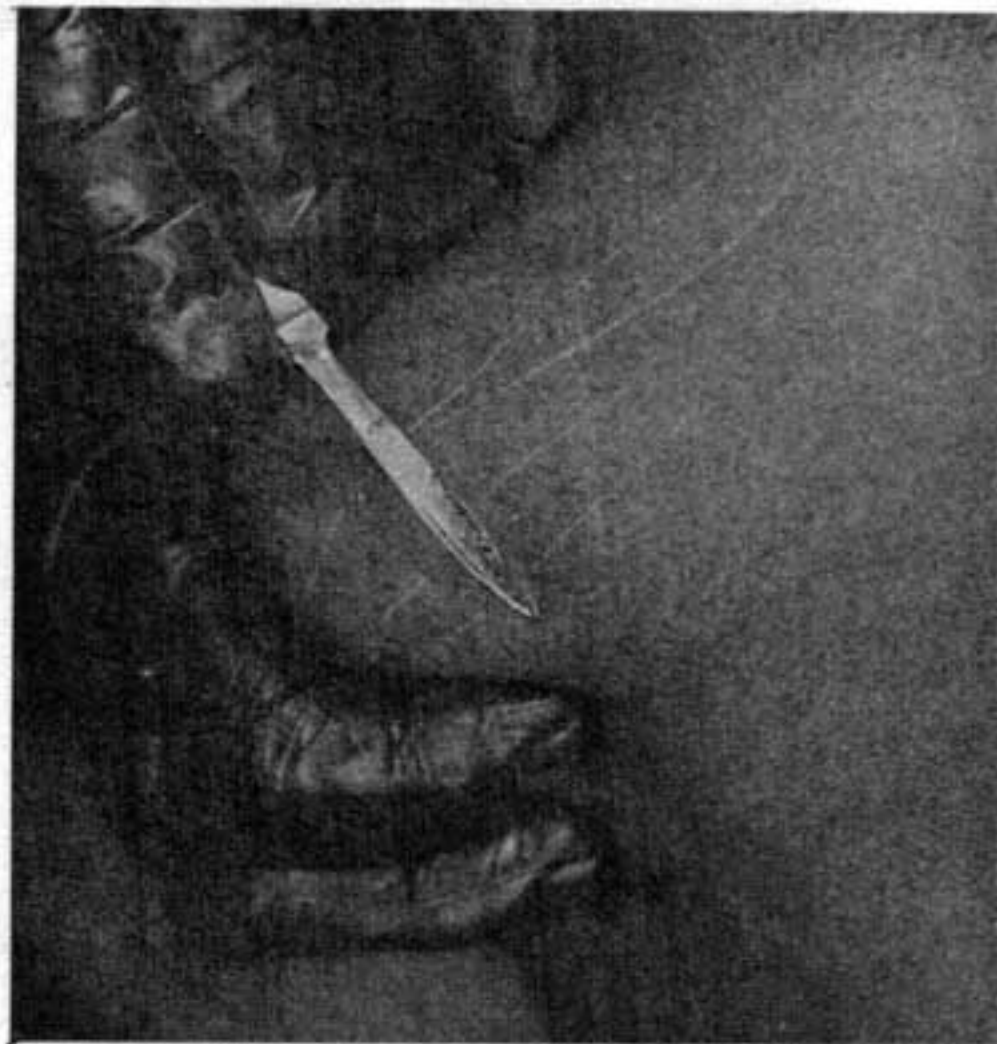
海外SMフォト紹介①

ここに紹介するのは、黒人女性をサディスティンにしたためずしいSMフォトである。多くは黒人は責められる対象とはなっても、このようにサディスティンになるのはまれである。



海外S Mフォト紹介

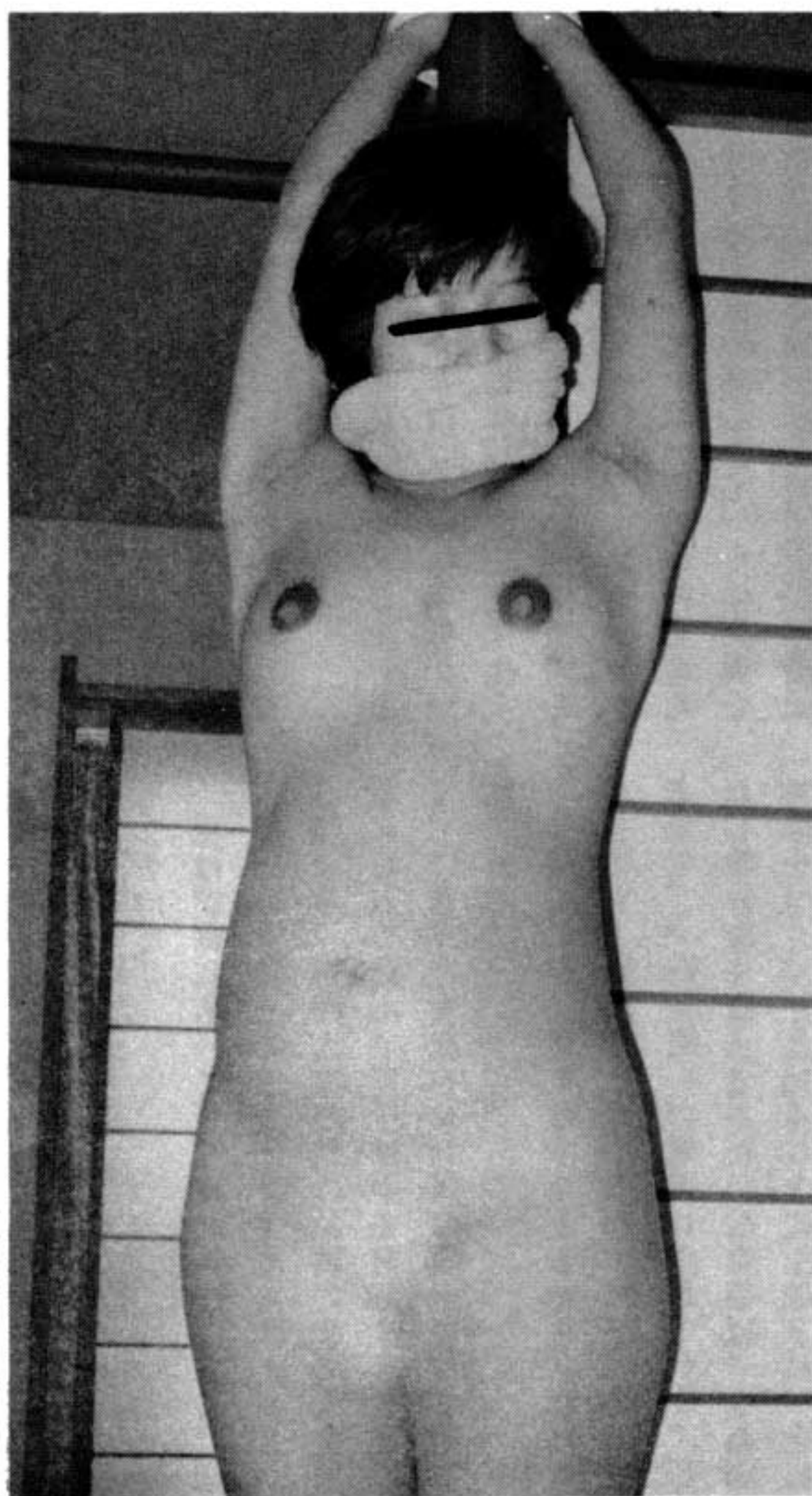
ここに紹介するのは『BIZARRE』誌の一部である。本書はS M専門のフォト誌でこの号は第3で、ここでは黒人女性は責められる対象になっている。



念願の妊婦M訓致の興奮ルポ

中宮さかえ

念願してやまなかつた妊婦緊縛のチャンスが舞い込んだその日、私は興奮と期待で足も地につかなかつたくらいである。これはその興奮のルポである。



妊婦緊縛のチャンスが舞い込んだ!!

月日の経つのは疾く、某氏から「あの頃」といわれて、それが十年も前の事だったとは自分では思えない。いわれてはじめて、「うーむ、そうなるか」と呻くようにつぶやくだけで、ひと昔前の実感はない。

中京に住むその人は、私が「奇譚クラブ」誌に「夜の徒然草」を寄稿していた時知った渉猟家で、「あの頃の約束ごとが今実現するかもしれない」と、夜間の長距離電話で語って聞かせるのだ。

「順調に話が進んだら即通告しますから、その時は万障繰り合わせて飛んできてくださいよ。チャンスを逃がすと、それっきり立消えてしまうことになりがちですから」

と、かつては私が「カメラ・ハント」の極意を説いた言葉と同じことを喋って切った。

妊婦緊縛

「吉報」の内容は妊婦緊縛の夢が叶いそうだと期待の湧くものであった。

私はいたずら者で、SM写真まがいの物はかなり撮ってきたが、妊娠している女性を被写体することまで手が伸ばしきれずにいた。いわば高嶺の花であった。それだけに順調に話が進むも進まないも、お前の口説き次第だぞ、と逆にハッパをかけたくなる気持ちでひたすら次ぎなる彼からの一報を待ちこがれていた。

私に、妊婦を縛った写真記録を残したいと願望させるようにしたのは、矢張り「奇ク」誌のせいであろう。凄惨な残酷美を映像化する、とかなんとかもっともらしい理由表明をしてから動き出すのではなく、「俺もヤッタ」と喝采し、持っていない記録分野を埋めたいと希求する程度の関心から、その実現を

狙っていた。単純な対抗意識なのである。

「妊孕美」というものを認めるか認めないかの命題に対しては、「認める」方であるが但し書きが私の場合には付く。妊婦狂崇症ではないから、身ごもったことを喜んでいような婦人でないと、かえって醜悪に見えてきてしまうのだ。

私は家庭にあっても写真記録狂である。妻となった女性との恋愛の芽生えもスナップから始まり、男性入室厳禁の結婚衣裳の支度部屋にも入り込んで着付け中を撮影するなどして、いまだに女房をレンズの餌食にしている私である。

当然、私が父親になることを知らされた時から後も、記録されているわけだが、狂癖のお蔭で、「妊孕美」の鑑賞は満たされた。しかし孕み腹を責めるみたいな真似は、生命の神秘をつくづくと知ることによって圧倒されて果し得なかった。そのことの無念さは今も湧かない。

全裸で立縛りで客を迎える妊婦の姿

旬日後、知人は「電報」という手段で、私の積極性を試めす魂胆を秘め、西下を促してきた。



「奥さんの手前、あなたが家をあげやすくなるように取り計らったんですよ」

私を出迎えてくれた彼は電報にした理由を話し、エヘへと配慮のほどを自慢した。私は彼に感謝と実現に漕ぎつけてくれた努力を賞賛する言葉で挨拶ぬきの、SM愛好者に変りし、押しつけられたヘルメットに目をパチクリした。出迎えはオートバイなのである。





東海道在来線のT駅は新幹線と離れていて
こだま号停車駅のT駅から引き返さなければ
ならない。二人を乗せた大量排気の自動二輪
車は渋滞気味の国道を車を縫って進み、いき
なり旅荘の玄関ぎわまで侵入した。

「着きました。ここです。」

胸を張って案内者は私に告げ、宙を駆けて
きたような気分の私が土の上に立つのを見計
らって手押しでオートバイを駐車場へ運んで
行った。爆音は聞えていたはずなのに玄関に
立つ人影はなく、案内者も直ぐには戻って来
なかった。おいてきぼりを喰ったような奇妙
な焦慮感が、どたん場になっておじけづいた
夫人の拒絶に合い実現不能になるのではない
かと危惧するものへと変化しだして間もなく
「用意万端整いました」といったげなニコや
かな顔をして、案内者が建物の中から現われ

た。

「旦那が、あなたにいいところお見せしよう
として……手間取りました。済みません」

彼は、自分も手を貸して縛って来たところ
だと手つきで補足し、得意満面、手で空に孕
み腹の曲線まで描いて見せた。おそろくどん
な縛り方をしたにしても、彼自身妊婦初縛り
の感動は私より強かったに違いない。旅荘経
営者夫妻との交際は三年といていたが、も
っぱらSM談義に明け暮れて、人妻の肌を直
接見る機会も緊縛写真も手にしたことはない
と語っていただけに、一躍妊婦緊縛に至った
彼の夢心地たるや、容易に想像できる。

案内された部屋に入ると、私がまず挨拶し
なければならぬ相手の姿はなく、一部屋を
談話室と寝室に区切る障子衝立ての柱に、妊
娠八カ月を過ぎた当主の夫人が立ち縛り姿を
曝していた。

「見事ですすねえ……ところで御主人は？」

「ええ、あのう……帰る客があって、さあ、
始めて下さい……」

遠慮気がねなく好材を処理するには、この
方がいいでしょう、との目配せで、すかさず
私もフィルム装填済みのカメラを構えた。

まったく心憎いほど行き届いた配慮である。

うじうじと多弁を弄して撮影に引き込むので
はなく、そこにある対象を出会い頭から記録
の一ト駒に印して行ける爽快さは、今までに
味わったことがなかった。

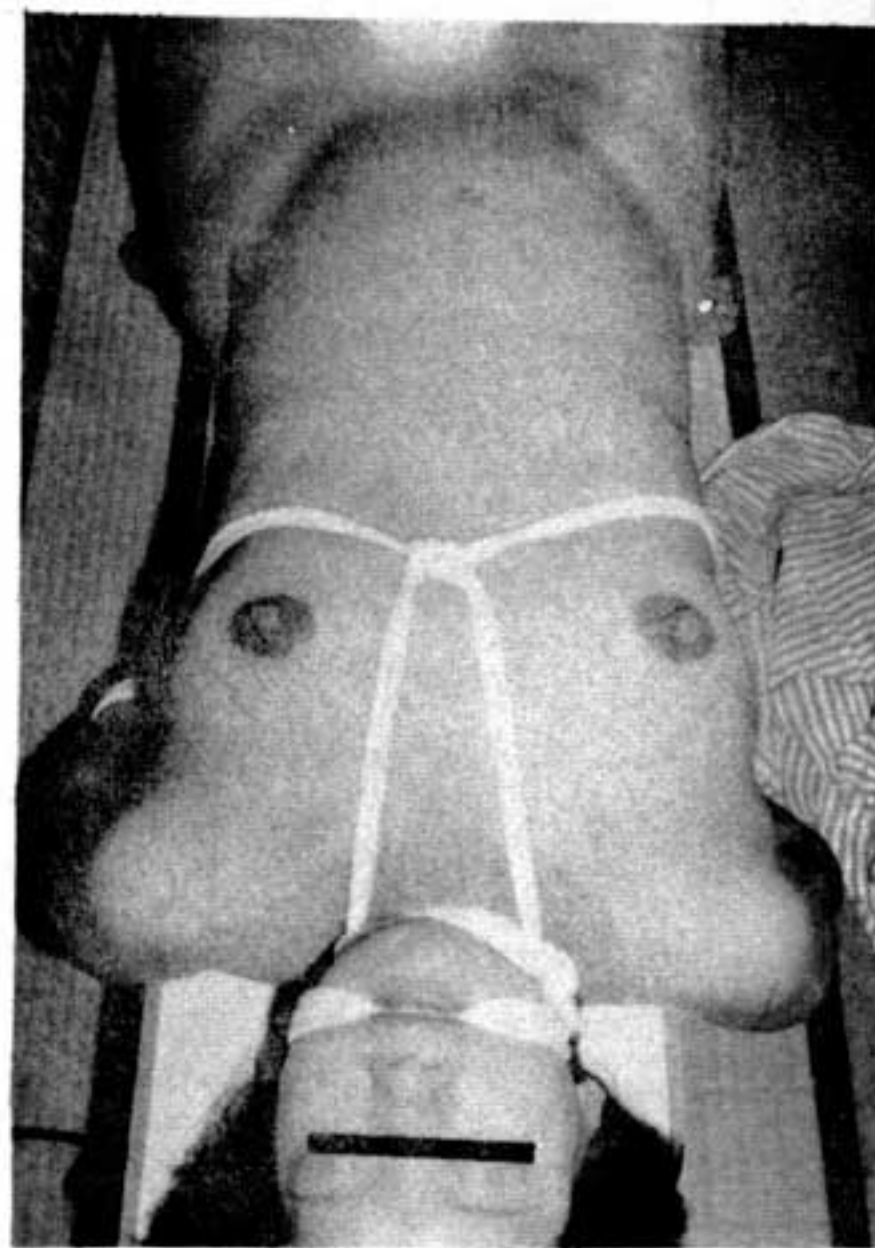
「まずこれが（妊娠しているという）確かな
ところをお目にかかるというセレモニーで……
あとは中宮さんの御随意で、と平山君がい
ってましたから」

トイレシーンをも 強引に撮すわたし

お手並拝見とばかり、世話人役が好奇の目
を輝いていられては、御随意にもなにもあつ
たものではなく、私は自分のペースをつかむ
のに難渋した。私のための「据膳」ではあつ
ても、いかに旨そうにむさぼり喰うか、と箸
をつけた瞬間から口許を覗き見られているよ
うなもので、萎縮してしまう気分が強い。

「それじゃあ、ひと息入れてから」

と、立ち曝しの縄を解き、若夫人を一旦自由
にする。手足の拘束は単純なものでも、孕み
腹をせり出し垂直に立つ柱に、体の線を反り



気味に寄せて吐く息が荒い平山夫人にも、それが救いであったようだ。

形式的に見えた猿轡は、布を取ってみると口腔に詰め物をした本格的なもので、唾液を吸い濡れ雑巾のようになったガーゼハンカチを羞かしげにたぐり出して、挨拶もそこそこ手洗いへ行こうとした。間隔の近い妊婦特有の生理現象なのだが、

「一寸待って……ついでの事に後手縛りのトイレのシーンを撮らしてもらっておこう」

とっさに出た言葉と同時の、相手の困惑を無視した機敏な行動で、平山夫人は抗らうことができないまま、排尿逼迫して便器を股いだ。

無遠慮な行為に出た後は、他人行儀をかなぐり捨てて動きやすくなる。トイレから浴室に直行し、下腹部を清めるつつしみ深い若夫人を強引にスナップした後、さて、これから

が私のカメラハントの本番だと区切るつもりで浴衣を着てもらい、胸高に回したロープで後手に縛った。

胎教のあることを信じ、さまざまな影響を恐れて自分の妻の妊娠時には果し得なかった「妊婦緊縛」が今現実のものとなった感激が胸中に煮えたぎり、傍観者の存在は苦にならなくなっていく。意識してよい記録を残したいと考え、その撮影記録は平山夫妻にとっても貴重な「夫婦の歩みの思い出」に役立つものにして上げたいと思うのであった。

「御主人……気が気じゃないでしょうねえ。早く戻ってきて、奥さんの緊縛姿と一緒に見て楽しめばいいのに……」

もう浴衣姿はいいとロープを解きかかる私の側に、すいと傍観者だった彼が寄ってきて手を貸しながら、

「どんどん先へ進みましょう。中宮さんならではの縛りができたら、平山君を連れて来ますから」

と歯痒そうに囁き、寝室の方をアゴでしゃくってみせた。

「やりましょう。この家の奥さんなら時間ばかり気にして思ったような記録ができなかったと悔むことにはならないし、ひょっとして

早産なんかで、これっきり孕み腹を撮らせてもらう機会がなくなってしまうことも考えられますからね」

私は分娩間際まで密着して記録したいところだが、口にした危惧は予測の事態として考えておかなければならない事柄なのだ。

「本格的な縛りへ入る前に、妊婦裸像を撮らせてもらいたいな。奥さんもそれならつらくないだろうし、それもいわばM女飼育の一環になることです」

フィルムの交換時期であり、二本目は縄のないもので終始させようと思った私は、けしたてる彼には抑えを、夫人には安堵をと図って言葉を選ぶ。憧れの若夫人の裸身を目の当りにしているだけで悦楽を感じている彼は、殊更不満は示さず坐り込んだ。

好色な男達に開股 縛り姿を晒す

寝室には和風のサイドボードのような置き飾り家具があり、それに乗って貰ったり、股坐して貰う擬似責めポーズのヌード撮影はス

ムーズに運んだ。なるべく無理にならないように注文する言葉のやりとりから、夫人の緊張だほぐれて、夫婦の愛情生活の一端を語り出すようになった。

「この方、本当は私達の仲人さんなんです。」
「えッ？ 悪い人が仲人だ」

私は思わず彼をかえり見て笑い出した。自分が世話した嫁さんだということを、秘密にしておきたかったらしい彼は、夫人から多少恨みがあったニュアンスで暴露された上、私にも「悪い人」とからかわれて、目のやり場を失った。

「初夜権まで主張したのかな」

「とんでもない。単なる助言者ですよ」

「それが怪しい。でも、よい助言者だったらいいことはわかります、今日という日があるんですからね」

二度目のトイレ通いは見送るだけにして、夫人の立ち去った寝室で男二人が部屋の模様変えをする。といっても重い和式ベッドを僅かに中央から移動する程度にとどまった。

「子供を産んで、一旦母親の責任を果たした女性、そのあとなら案外自分の方から快楽を求めるようになりますよ。それからでもマゾ馴致は遅くないと思います。貴男の手腕を発

揮する日がやってきますよ……」

妙な慰めをいい、彼に希望の灯を焚きつける。その間、私は緊縛構想を巡らせていた。

「僕がいちゃあ、中宮さんはやりにくそうだ……一寸席を外しますから……よろしく」

彼の言葉に痴妬じみた響きを感じた私は、苦笑して頷いた。あの、爽快な気分が始まった撮影は、彼がべったりと居据り続けていることで大分翳りがさしてきていた。手を貸し



てくれることはあっても、有難迷惑であることが多い。私は彼の「よろしく」をストレートに彼の期待だと考え、彼と平山氏の好奇心を堪能させてやれ、と方針を決めた。

途中、ヌード撮影したことが、ワンカットでも多く変化した緊縛写真を手に入れたと思うっている者にとっては興ざめとなったようである。ここ一番、好材提供者たちにとって

の楽しみを与えることに時間をさき、遊ばせてやろうと考え、ヌード撮影のモデル台にした家具へ夫人を仰向けにして括りつける。

「お腹がつっぱって、苦しいかな」

「すぐ済みますでしょう……少しなら我慢できます。」

「いや、貴女のハズを楽ませてあげようと思っただけ。旦那がもういいと満足するまでこのままだ」

「イワグニさんも一緒に……ですか」

「彼も舌なめずりして、まさぐり出すでしょうな、きつと。非常識なことは御主人の手前しないでしようよ……貴女も好色な男たちの目にさらされる、被虐の愉しみを味わってみなさい」

もうお喋りはヤメ、と打ち切るように口唇を割って白布を縛ると、夫人の肌が一瞬のうちに総身鳥肌立った。

緊縛姿の妻に感動 する夫を後にする

私は彼女が一度腕を通した浴衣をその上に

かけ、後退して“台上固縛”のシーンを撮ると、その足で部屋を出た。

女中らしい人もおらず、夫婦で働いている小じんまりした旅荘では、なるほど旦那は忙しいと感じさせられる客案内の姿を目撃して私は、悪漢仲人を探しに帳場の方を見当つて歩き出した。とはいえ階下まで降りることなく、客室から忍び足で抜け出して来る彼と出会い、距離をおき手招きする事で済んだ。「ここへ遊びにくると、ソノ方の楽しみもあるわけですね」

彼のバツの悪そうな風情で、他人の真昼間からの情事を隣室から盗聴していたことを推察した私が囁くと、

「僕はねえ、今まで本当のよがり声を聞いたことがないですよ、どうもみんな嘘みたいだ。ウチのワイフも呻かないしねえ……どうなんだろう」

と、はぐらかすような感想をもらし、その口の下で、縛りが完成したのか、と尋ねる身振りをした。私も頷いて答え、

「ここ、留守番になるような従業員はいないんですかねえ……」

と、暗に平山氏を呼び寄せてやる提唱と可否をこめて聞く。



「いや、一寸前、通いのおばさんが来ましたから、今度は来ますよ」

彼はフト、自分が先きに実見し、それから平山氏を呼びに行こうと思ったのか、迷いの行動を見せてから階段を二段づつ踏んで降りて行った。

「平山君が……感動してました」

「感動は大袈裟だな」

「いや、浴衣がけをはぐとですね、それを無意識なんですよ、袖だたみするところは商売のなれですよ。それを抱えたままポーンとつつ立ったままなんです。普段見馴れていて変り映えしない家具が拷問台になっている……そう見えたのと違いますか」

一緒になって狂乱するのかと思っていた彼が若い二人に遠慮して出てきたからには、私も物見高く闖入することはない……吸殻の始末のついでに対座を構えた。

「……震える手が伸びて、静かにペッティングしはじめ、彼は片手でズボンを脱いだんです……。ブリーフは断崖にテントを張ったようになっちゃったワ。僕はね、察しがいい方だから、彼女の口枷だけほいてやったんだが、口で夫を含んでやる覚悟はできてましたなあ……」

彼は感慨深げに煙草を垂直に立て、火を眺めながら、わずかな時間のうちに起きた事柄を語ってきかせる。

その日、私が記録した写真はフィルム本数からいっても少ない。若い夫婦に歓喜の道を開いてやったことになれば満足と、写欲の方はセーブした結果なのだが、それでよかったと思っていた。

事実、後日になって、産み月が近づき実家へ戻る平山夫人が、単身私の前に現われた。二回目の“妊娠緊縛”の撮影が果されたのである。それが本誌のグラビアを飾る“妊孕美”の写真なのだ。

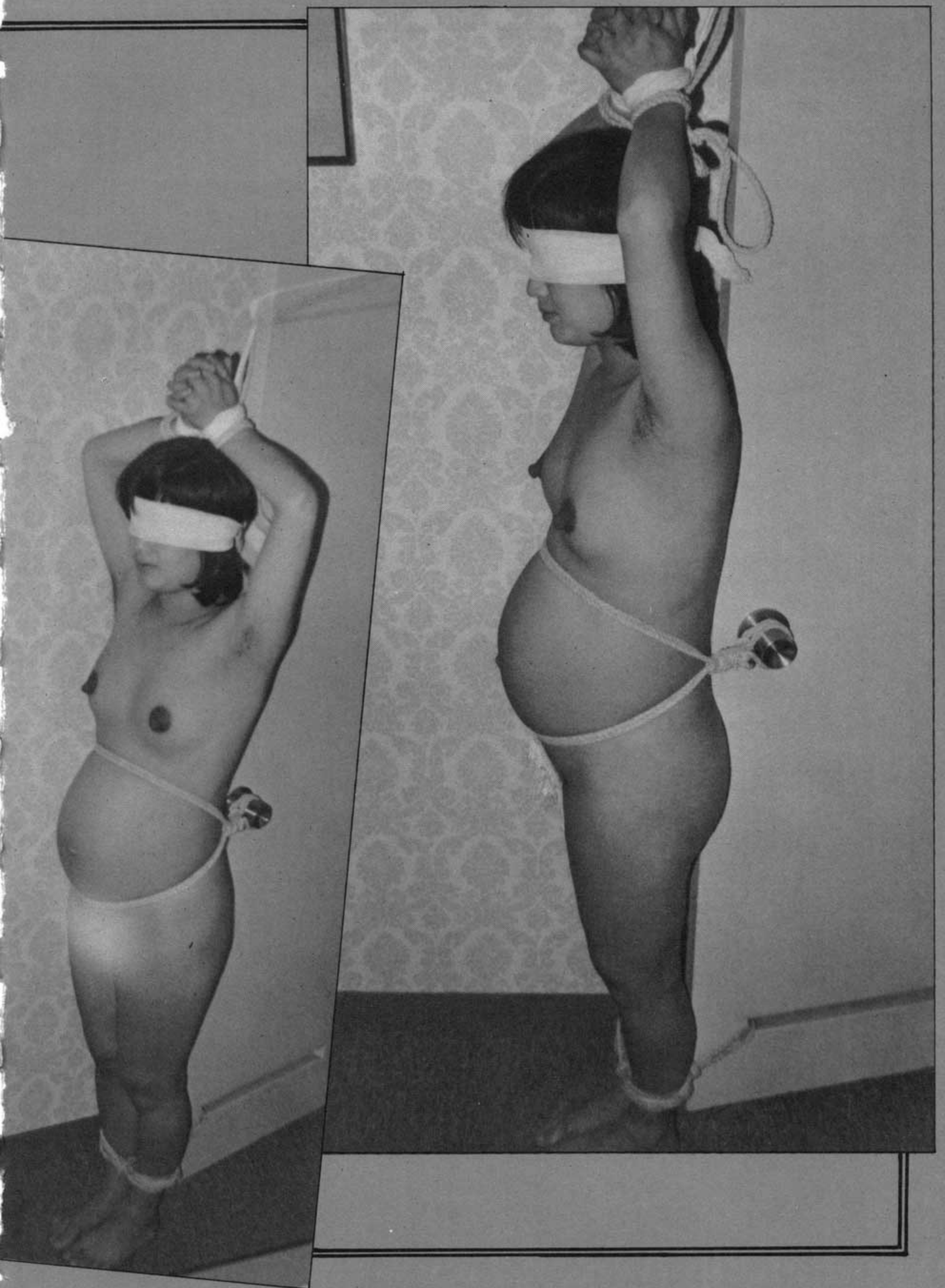




妊孕美

妊娠10ヶ月、彼女は再びカメラの
前に立ってくれた。
撮影中宮さかえ。









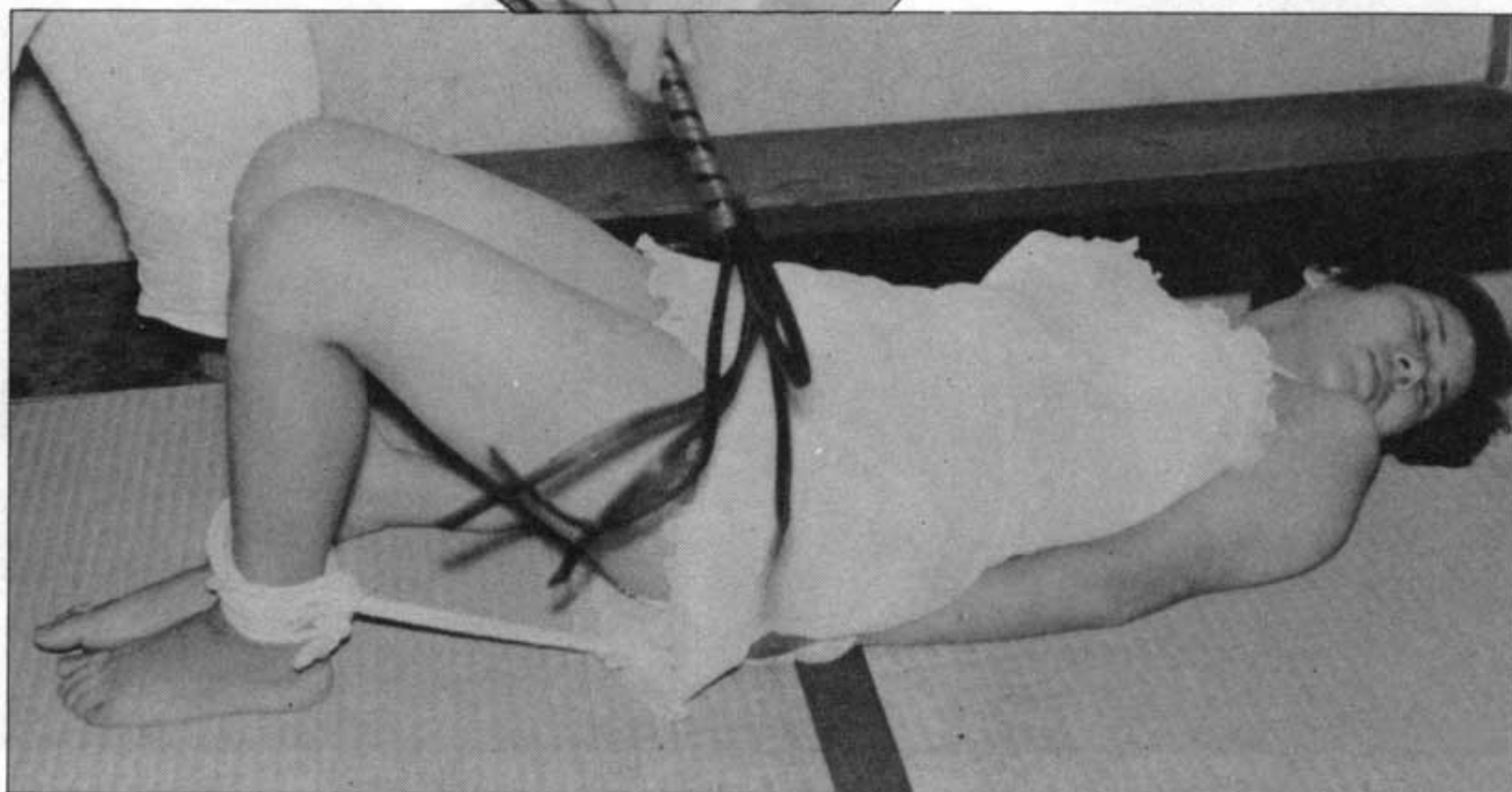
女奴隷

東京都下<Y Y 生>氏／作品

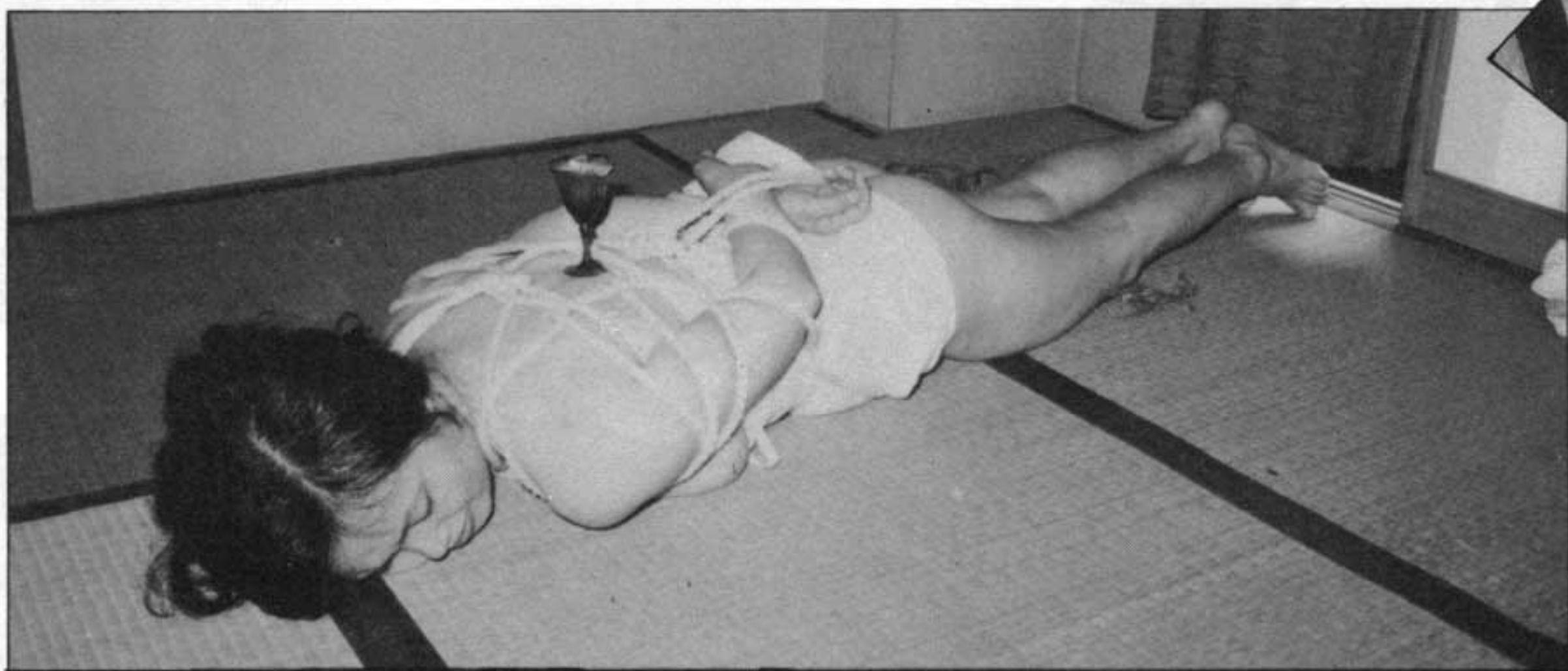


秘蔵フォト紹介

愛虐を待つ M女



ささくられた荒縄が、柔肌を蛇のよ
うに這いまわる――。
屈辱と苦痛こそ、愛を感じる。女
の中に秘めた、加虐性がぶつぶつと
湧き上ってくる――。







●緊縛フォト●

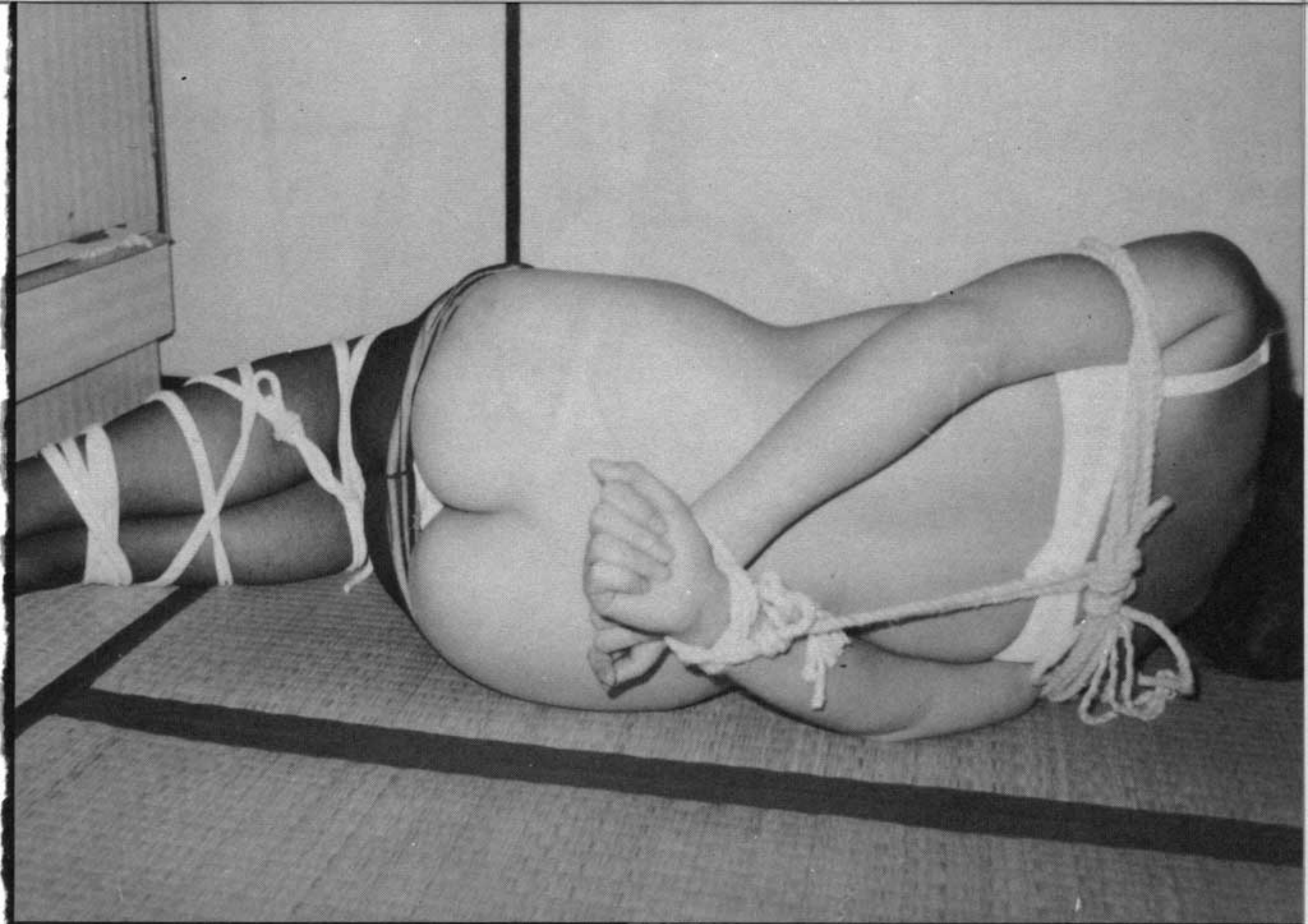
悪魔に魅せられたように、ロープは柔肌をしめつける。身動きするたびに、襲う苦痛と羞恥の交錯に、若妻はいっしか異様な世界へと導かれて行く……。



若妻M化馴致







拘束衣の縄人形

写真提供 東京 N氏

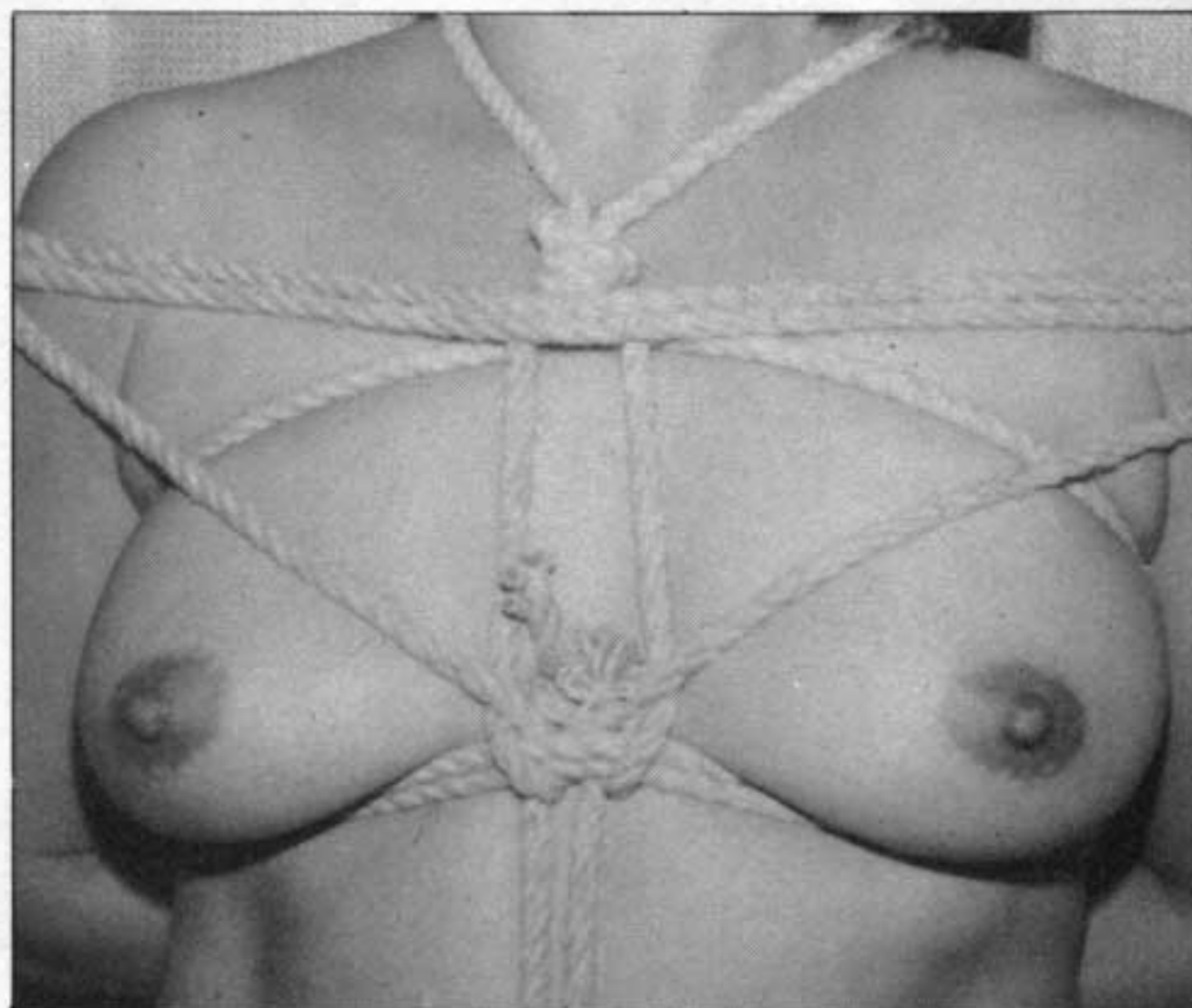


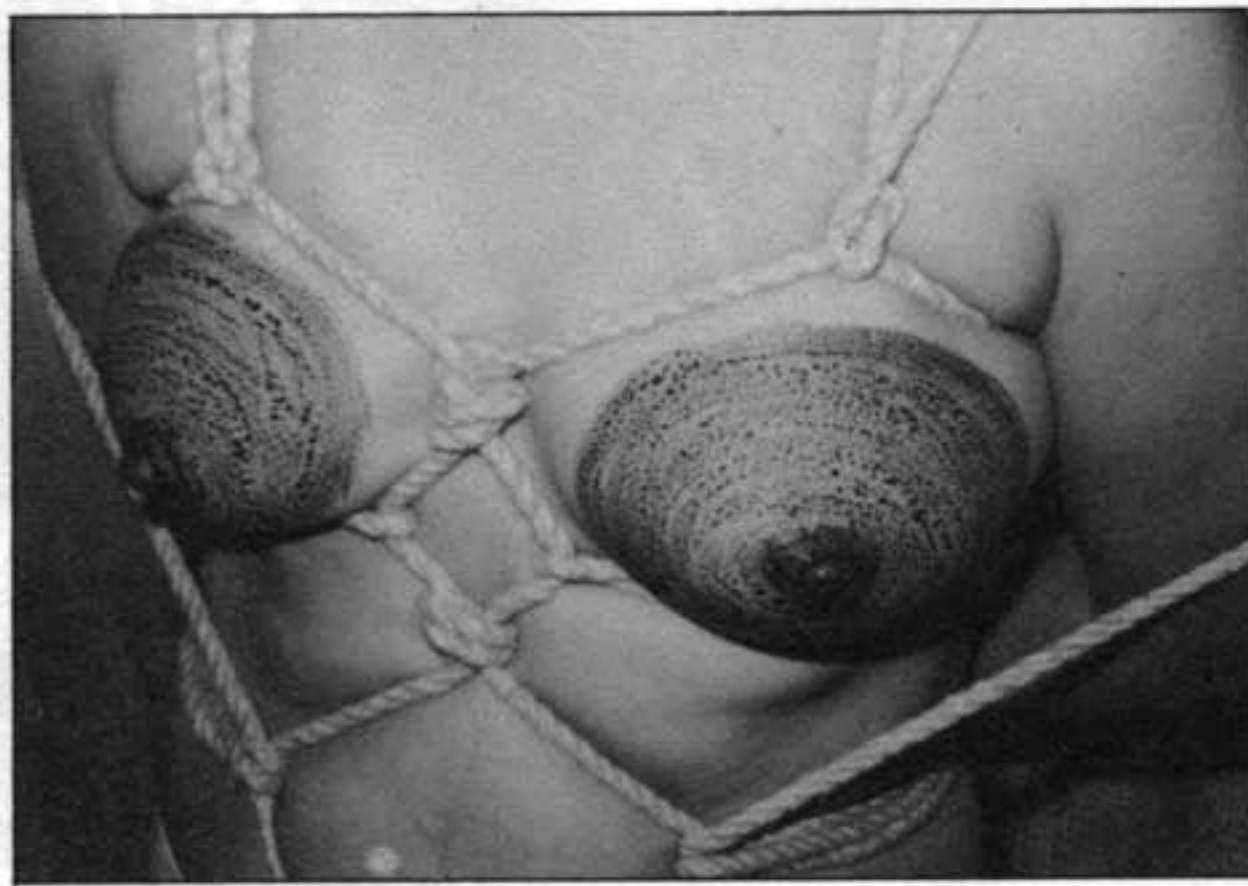
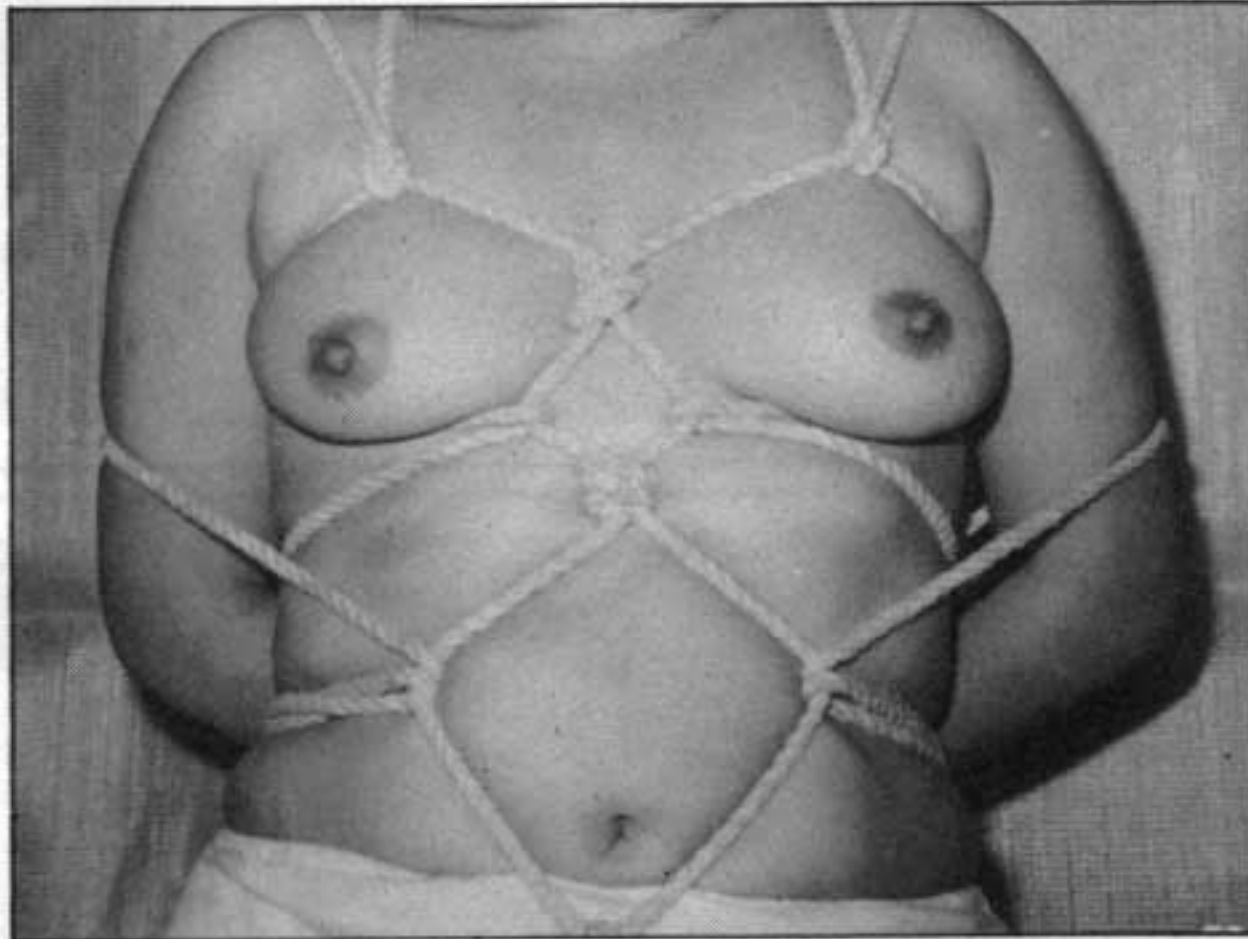
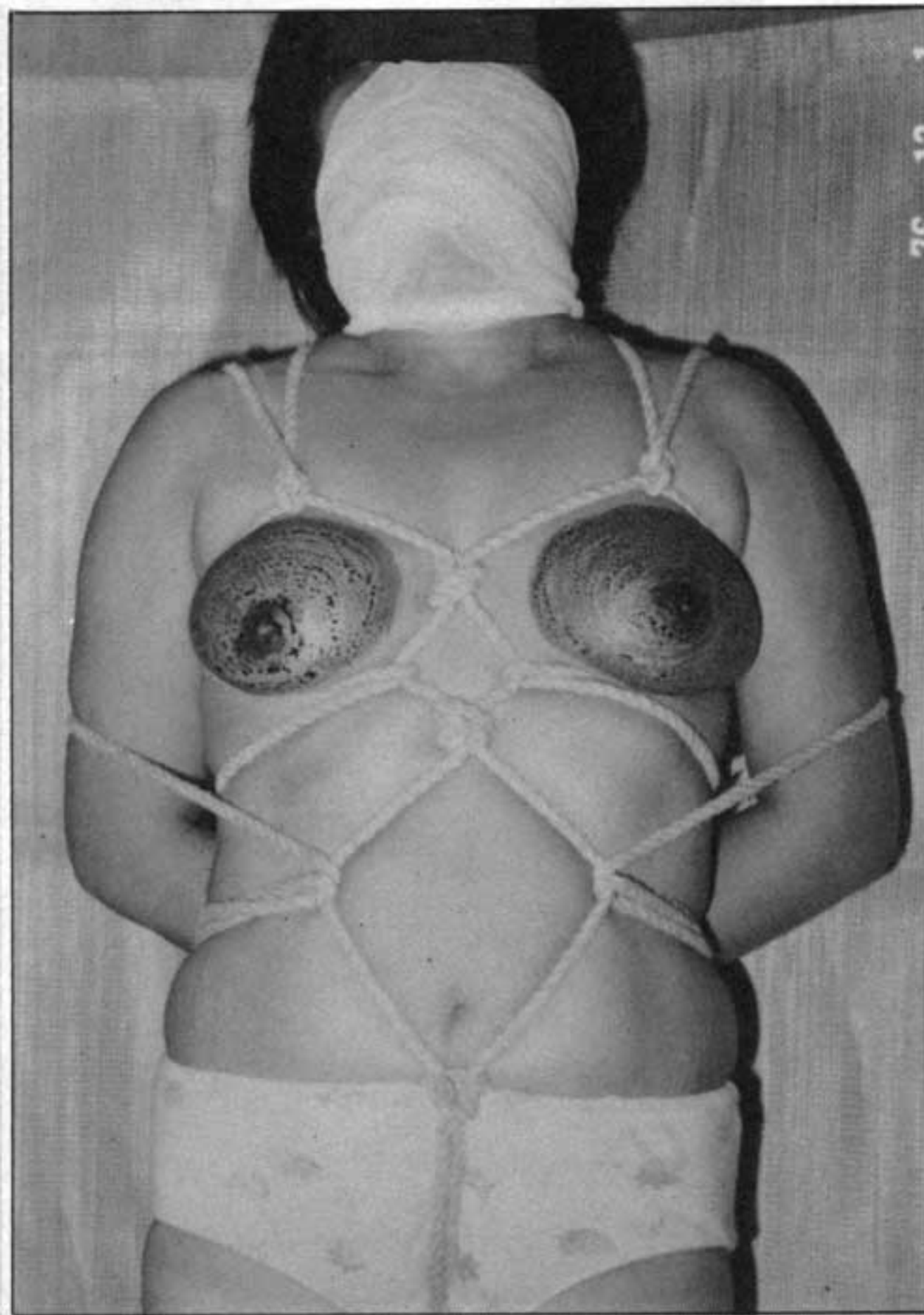
無防備の乳房にバイブがうなる……!!



豊満女体緊縛図絵

写真提供
室蘭〈村井氏〉

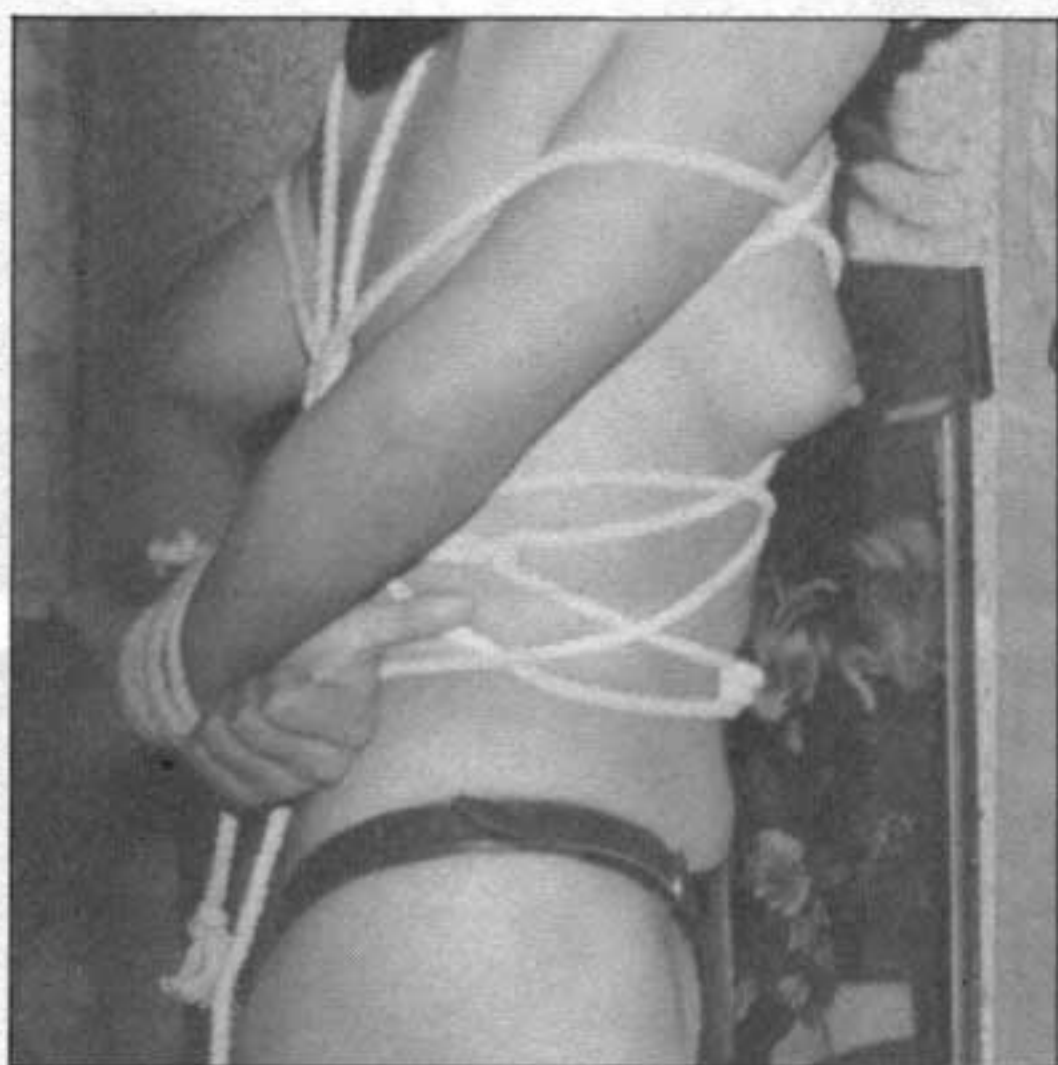






緊縛奴隷飼育秘蔵フォトより

被縛の奴隷



写真提供

川崎 R氏



女軀燭台

写真提供
東京 U氏



十年前、寮長に 誘われるまま：

遠い昔のこと、私がまだ田舎の高校を卒業して、ある繊維会社就職した十八才の頃のことです。豊橋市郊外の女子独身寮で平凡な日々を過していました。そんなある日のこと、突然に寮長さんから声がかかり、夕食後に寮長さんの部屋に来るようにいわれました。友人もいない私には非常な喜びで「はい、すぐまいります」と即答しました。急ぎ夕食をすませて寮長室に行くと、そこには寮長の和田



さんが一人、ゆっくりとタバコをくゆらせて座っていました。

スラックス姿に太いベルトをしめ、どこなくボーイッシュな感じの姿勢のよい、髪の短い人でした。ふだんは遠くからあなたの方が寮長さんね、とただなめる程度のことです、直接に話したのは初めて

のことです。

「篠崎さん、そこへお座りなさい」

と言われるまで私は入口に立っていました。

「タバコはいかが？」

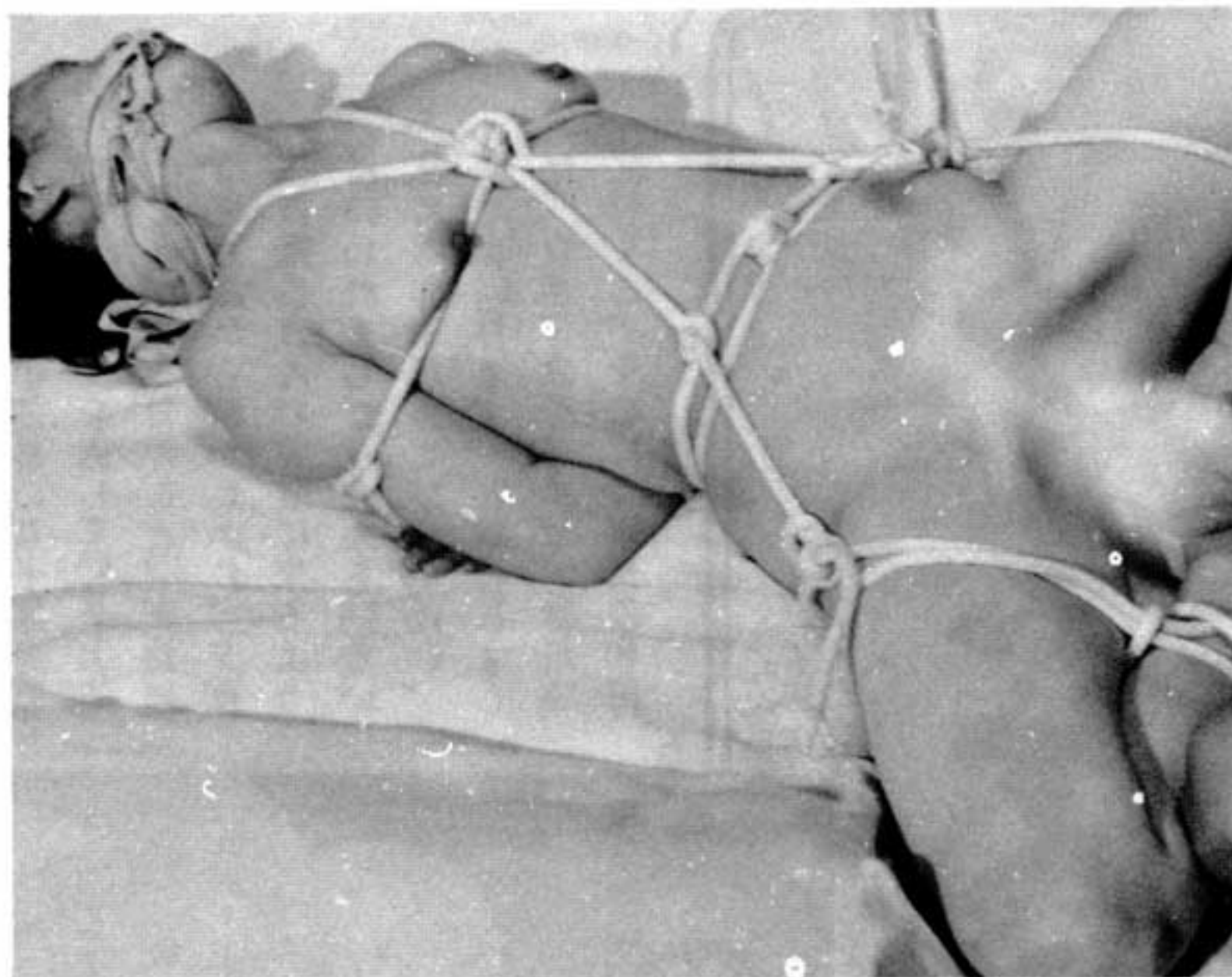
「そう、まだですの」

それではお酒なら少しはいいのでしょうか、と私は今まで飲んだことのないブランデーをすめられるままに口に移しました。どの位時間がたったのでしょうか、私の体は次第に酔いがまわっていました。

暑い夏の夜も次第に深まり、それまでに私の幼い頃や田舎のことなどいろいろと話していた

篠崎敬子(32歳)主婦

マゾ女性への傾斜



のでしよう。もうそろそろ自分の部屋に帰らなければ、と思いながらも、いつもゆっくりと自分のことを話せる相手のいない私には非常に楽しいひとときに思われ、ついつい話に誘われて

のです。私は初めてのことでなんだかわからなくなり、早くこの部屋から出ようという意志が無意識のうちに強くはたらいたのでしよう。酔いながらも「今夜は帰ります。おやすみ

いました。でも思い切って、

「私帰ります。あまりおそくなるといけませんので」

と和田さんに申し上げました。そして立ち上ろうとした瞬間、和田さんの強い手が私の両腕をつかんで、

「篠崎さん帰らないでね」

というんです。すごくやさしい声ですが、どことなく変な声な

なさい」

といいながら彼女の手を振り離そうとこころみていました。

そしてようやく振りほどいてドアの取手に手を近ずけたとき、突然私の背中に衝撃が走りました。そして同時に鋭い声で、

「帰ってはだめ！」

私はびっくりしました。そしてやがて背中に非常な痛みを感じました。すごく痛いんです。そのままの状態でひざまずかずにいられないほど痛いんです。

しばしの静寂が続き、やがて私が和田さんの方を振り返ったとき、そこには背の高い堂々とした寮長さんが、自分につけていた太いベルトを右手に持って私の方を見下ろしながら、興奮のあまり震えて立っているのです。私はどうしていいかわかりません。痛くてつらいのです。ただじっと動かず黙ってうつ向いていました。動けばふたたびベルトのムチが飛んでくるような

恐怖を感じながら、ただじっとしていました。

ずい分と時間がたったと思います。和田さんが、

「敬子こちらにいらっしゃい」と鋭い声でいわれるままに私は素直にうなずいて和田さんのもとに行きました。このときは私の頭の中はほとんど自覚のない状態になっていました。

「敬子、身につけているものをみんな取りなさい」

といわれるままに従っていました。夏です。薄いブラウス一枚の軽装です。それでも私はパンティだけは脱げませんでした。

「パンティもよ」

と、ベルトのムチがおしりをねらって打ち下ろされる恐れを感じながら、私は涙を流し抵抗をしました。

しかし、寮長さんの迫力にはかなわないまま、ついに全裸の状態で隅のフツンの上に横たえられてしまいました。

マゾへの体験を 深め育てたい

私は東北育ちのせいかな、肌が非常に白くなめらかなのです。寮でお風呂に入ったのを皆が目撃して「篠崎さんの身体はきれいなね」とひそかにウワサをされていたことをずっーとあとに知りました。

同じ女性からもういつもずい分とうらやましがられました。そんなウワサを寮長さんは聞いて私に興味をいだかれたのでしょうか。

その夜は寮長さんの部屋に泊まってしまいました。

全裸のままかすかに明けてくる気配を感じながら、ただうっとり和田さんの枕を共にして天井をながめていました。

あとでみると背中に一ヶ所のミミズばれのほかに、おしりに三ヶ所のミミズばれも残ってい

ました。そのほかに身体のいたるところに充血した跡がありました。

そして、夜中和田さんに抱れて寝ているとき、突然下半身の痛みを感じましたが、なにか異物を私自身の中に挿入したのでしょう。かすかな赤いものがシートに数ヶ所残っていました。

この夜になにかも和田さんに与えてしまったのです。天井を眺めながらなにか空虚な気持ちが私を支配しました。

でも不思議なことがありました。和田さんに対するいきどおりが無いのです。あんな衝撃を与えた彼女に対し

て、なにか親しみすら感じてしまっている自分が不思議でなりませんでした。

一体全体私はどうなってしまったのでしょうか。その後、当然のごとく寮長さんとは一段と親しみを増し、「京子」「敬子」とお互いに呼び合う仲が続き、

週に最低一度は京子さんのお部屋を訪れました。

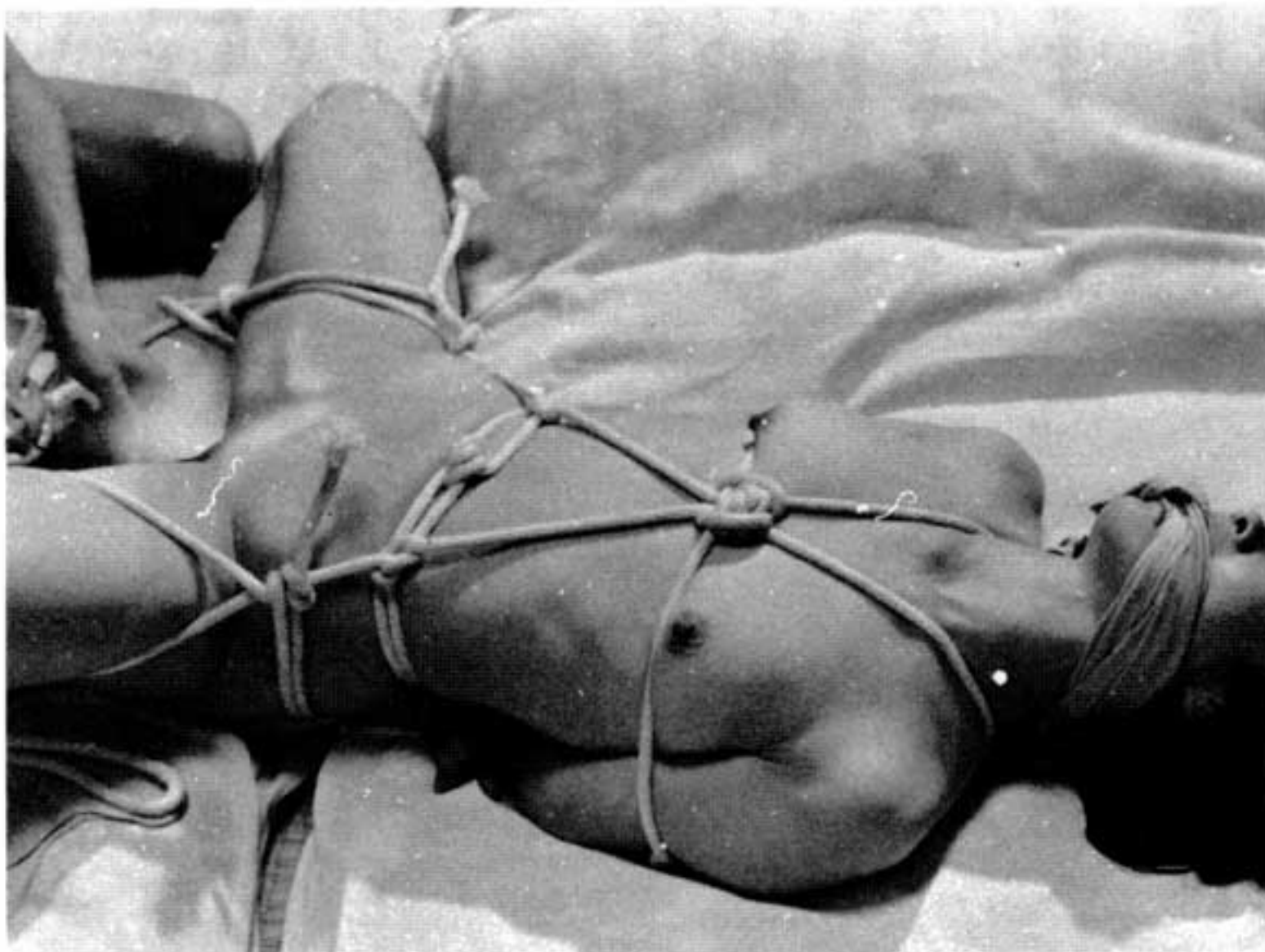
ある事情が生じてその後私は東京に移りましたが、その後十年以上も経た今日、時々和田京子さんとはデートを重ねています。お互いに主人を持つ身でありながら今日まで交際が続いているのです。最近、彼女から来た便りを紹介します。

〈京子から 敬子への手紙〉

敬子さん

急に冬が近くなってきたのかと思う程朝晩は冷え込みますが、こうして床の中であの頃の夜のことを想い出すだけで、身体中が力と熱くなってきたのはどうしたことでしょう。

手を下に伸ばせば、すぐに熱くなったボクのものに触れます。熱くなって、ビクビク脈打っているボク自身を想像してみてください。



全裸にして後手に縛り、髪をつかんでボク自身に、思い出してごらんない、ホラ、ボク自身が近づいて敬子の口の前面に迫って。

ボクは敬子の上に乗って、ボクの口で、舌で、敬子を愛撫します。ボクの手が敬子の脚をつかんで顔の上に乗せます。

そして、両手でマタを拡げて、突き出した舌で、グッシヨリ濡れた敬子自身……いかが、そろそろ濡れて来まして……？

両手を後で縛り、両脚を拡げてベッドの端にくくりつけ、指を敬子に入れて、入れたり出したり、また入れたり、だんだん濡れてきましたでしょう。手を下にやって触ってごらんない。さ、早く。

指で敬子自身の下の方、敬子の一番大事な一番感じ

やすいアソコを触ってごらんない。気持ちいいでしょ。ホラ、早く、早く。

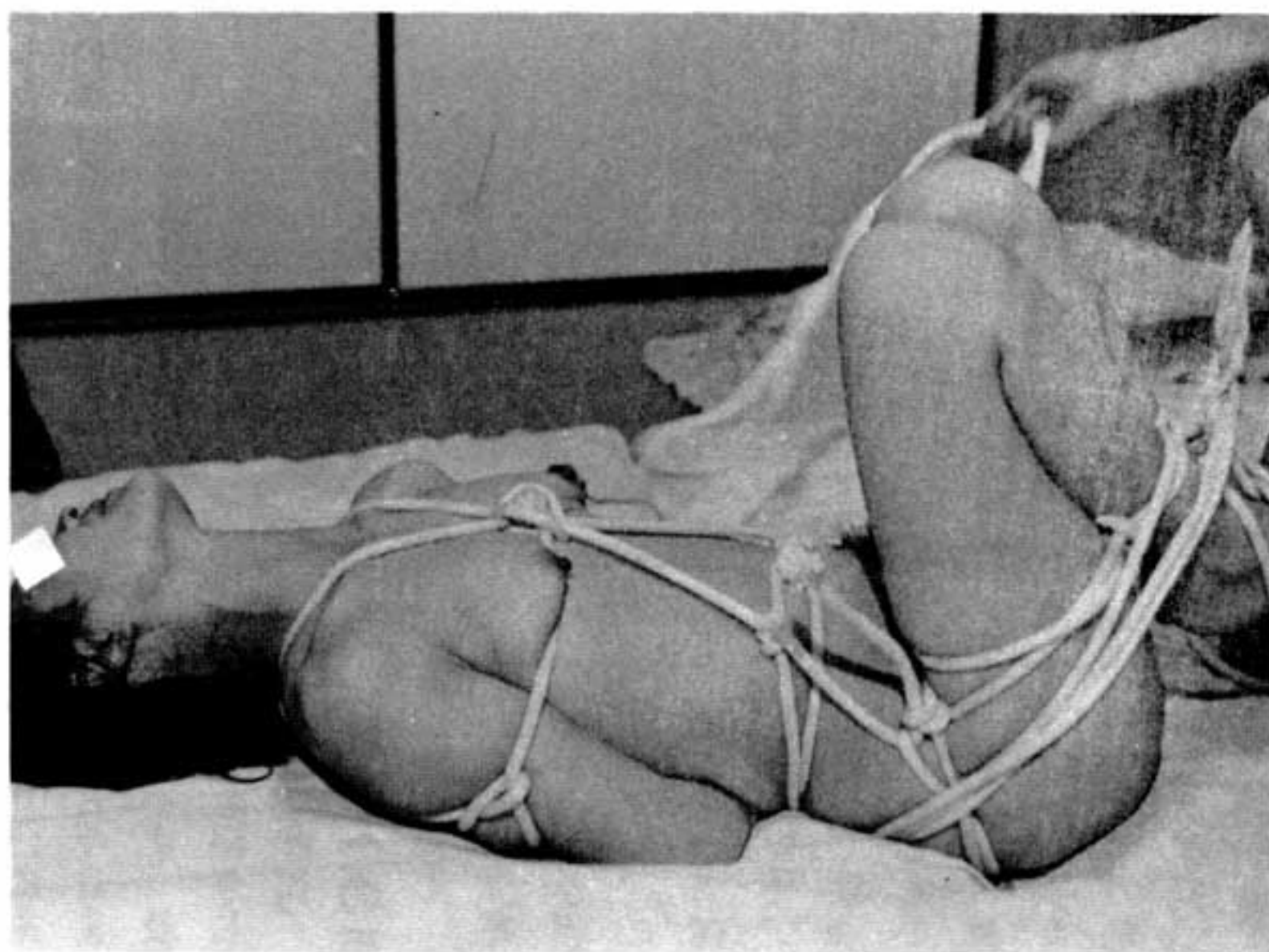
そう、そうしたらその指を動かして、よくなって来たでしょう。

ようし、今度はボクの上に乗って脚を開いて、もっと、今、ボクの指が敬子自身を触っています。待って、今入れてあげますから、ホラ、腰を上げて、入れるから、入った？

入ったら腰を使って、もっともっと、ホラ、もっと動かして、気持ちよくなりますから……。今、ボクの手が敬子の尻をつかんでいます。

ボクも腰を動かしています。下へ……上へ……下へ。さあ敬子もボクに合わせて下へ……上へ。

今度は後を向いてお尻を高く上げて下さい。高く。あの写真を見てごらんない

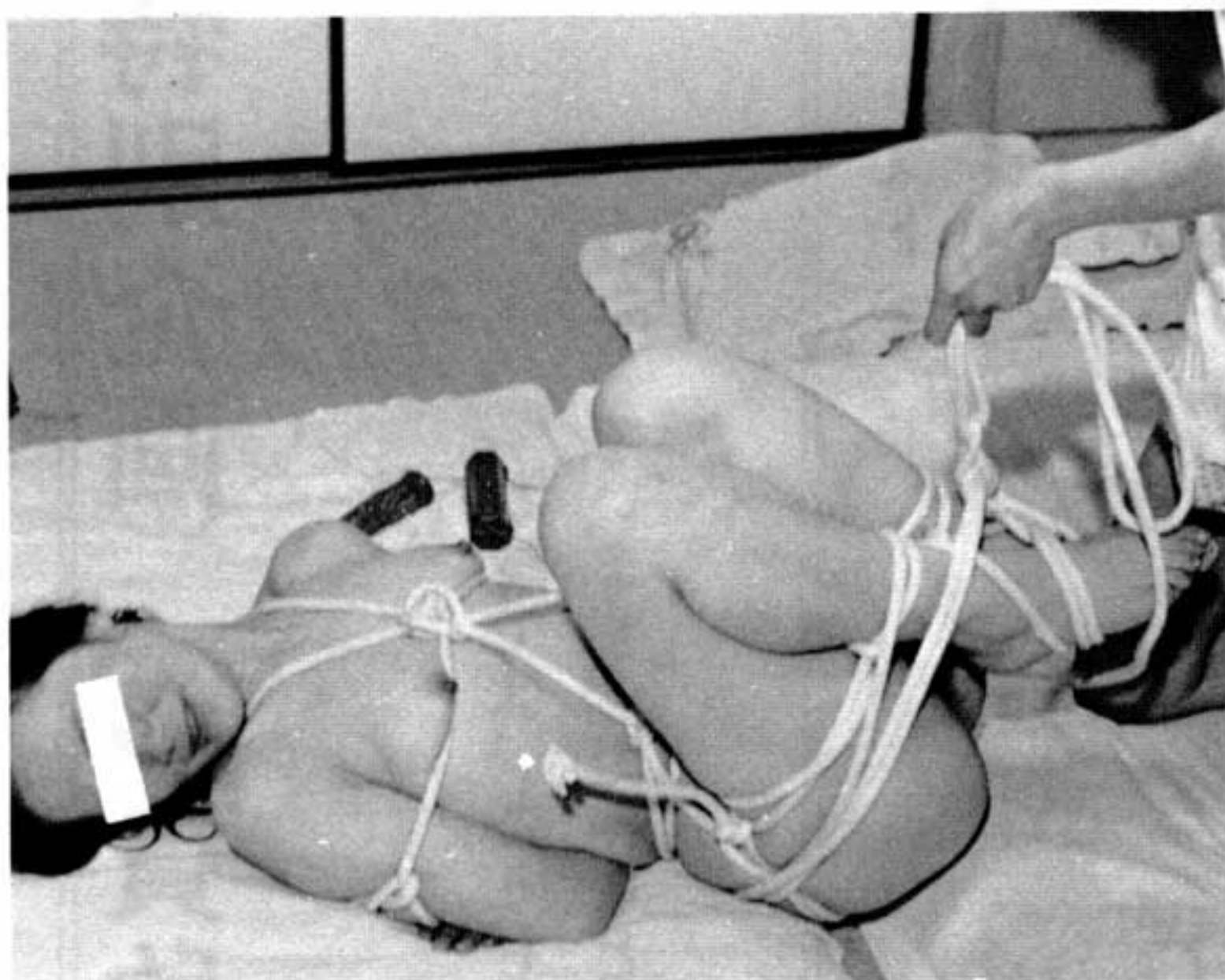


い。高く。あの写真を見てごらんない。後から敬子自身が写っている……。

さあ同じようにして、そうしたら脚を開いて、今、ボクの手が敬子自身に触っ

ている。写真を見て、想像しなさい。ボクは敬子の中にあの時のものを……入った？……写真を見なさい、入ったでしょう。腰を引いて……上げて……引いて……もっと、もっと……上げて、気持ちよくて敬子？、気持ちいい？。我慢できなくなって来ましてでしょ。

よ。そうしたら……写真を見ながら、いつかボクの前でやって見せたように自分でやってみなさい。そして、どうしても一人



で駄目なら今度の日曜日にいつもの所へいらっしゃいますかね。京子のムチで思い切り責めてさし上げます。おやすみ。
私の敬子さま。

皆様の中にも私のような経験を持たれた方がいると思います。たとえ世間がなんと申しましょうと私は私の経験を大切に保ちまたこれからもマゾへの体験を深め、育てていきたいと思っています。

これまで申し上げたお話は私の十代の淡い体験ですが、その後東京に来て知った男性との体験については、いつかまたお話しをしたいと思います。います。

東京の山の手の生活で、あるSM誌の文通欄を通じて知り合った佐藤さんに、渋谷のホテルにて縛られ犯された体験、このとき処女を失



＜イラスト・多貫 欣＞

ないましたが、いまは消息不明の佐藤さんをなつかしく感じています。

その後、会社に慰安旅行で房総半島を訪れたとき、一人旅の男性に夜の海岸で縛られて犯された体験、このときの岩の背への快よい痛みの記憶、この時の男性が現在の主人です。そして、その後に再びSM誌

で知り合った田中さんには、それ以来久しい交際をいただき、徐々に本格的な調教を教えられて今日まで続いています。

田中さんから電話を受けると私の全身はゾクゾクと期待に満ち、主人には秘密にして、いつもの鶯谷のホテルに向かうのです。

特別企画 多貫欣作品集

本誌では、こうしたSMイラストを募集しています。力作をどしどし編集部宛お送り下さい。

イラスト①



イラスト④



イラスト③



イラスト②





イラスト ⑧



イラスト ⑤



イラスト ⑨



イラスト ⑥



イラスト ⑩



イラスト ⑦

高価で入手まま ならぬ竹材

アイデアもののイラストをS
M誌に持ち込んでいる私は自分
でも「竹」を素材にしたSMプ
レイの補助具(責め小道具)を
描くことは少ない。プレイ・マ
ニア達が、自慢のフォートを提
供し、技を経験を披露しあって
いる「投稿写真集」の頁にして
も「特撮」ものの写真頁を眺め
てみても、竹は凄みを湧かせな
い物なのか、円筒状で扱いにく
いせい、うまく活用した作品
に触れることは滅多にない。ま
た画家も竹の描写を嫌うのだろ
うかと思うほど、挿絵でお目
にかかることは稀れである。
その不運な「竹」にスポット

ライトを当てて、嗜虐の友に引
き立ててやろうとするのが、本
篇のテーマである。

私自身はありふれた素材だとい
う理由で見過ぎていたわけでは
ない。七夕の笹にしても物干
竿も、都会生活者にはたやすく
手に入れることが難しい時勢で
あり、竹をプレイ用具として取
り揃えることは高価な遊びとな
ってしまうのを気にして、プラ
シンの対象から意識的に外してい
ただけである。もし私が、山野
に自生する竹を伐りだしても
「こらッ、盗っ人」と追いか
けられずに済む土地の住人であ
たら、アイデアを工夫する以前
にプレイの中で竹材を駆使して
いたことであろうし、秘悦の責
め写真集作りもその記録で埋め
られていたことと思う。

日本的SMプレ イにより調和し

切り刻み、タチ割り、穴をあ
ければ、太い細いの竹筒の組み
合わせから面白い責め小道具が
生れてくる筈である。しかも
「縄」による緊縛好みの日本的
SMプレイによく調和して、視
覚的に楽しめるものとなり、竹
の利用が見直されるのではある
まいか。

「アンヨを開いて、ハイ、ポ
ーズ」だけの、開股強要の支持
物に限られている「竹」の不遇
を哀れんで、アイデア発表の場
を与えられた本誌上では、本格
的な責め具に使ってみようと思
いたった。

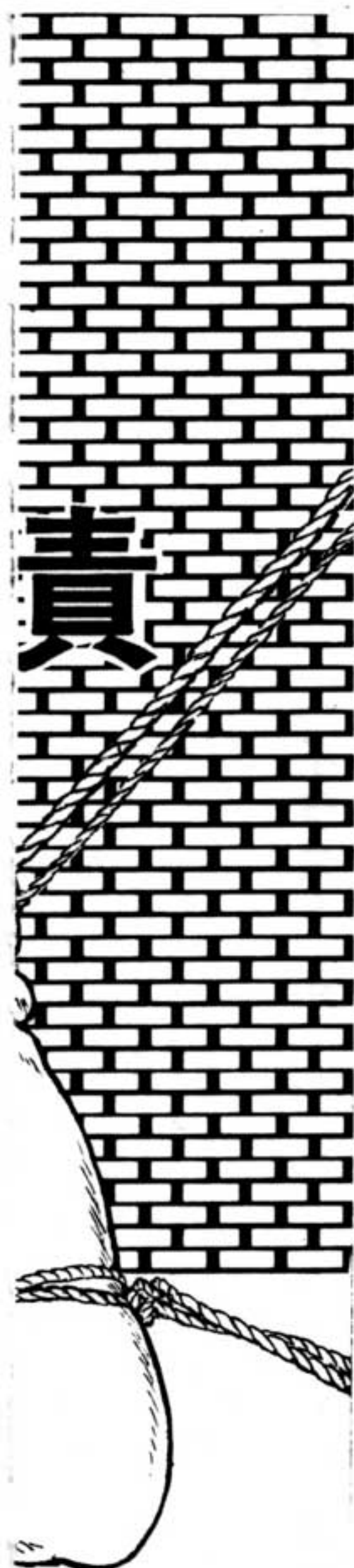
以下、各図と対比しながらタ

ヌキ説法をご吟味あれ。

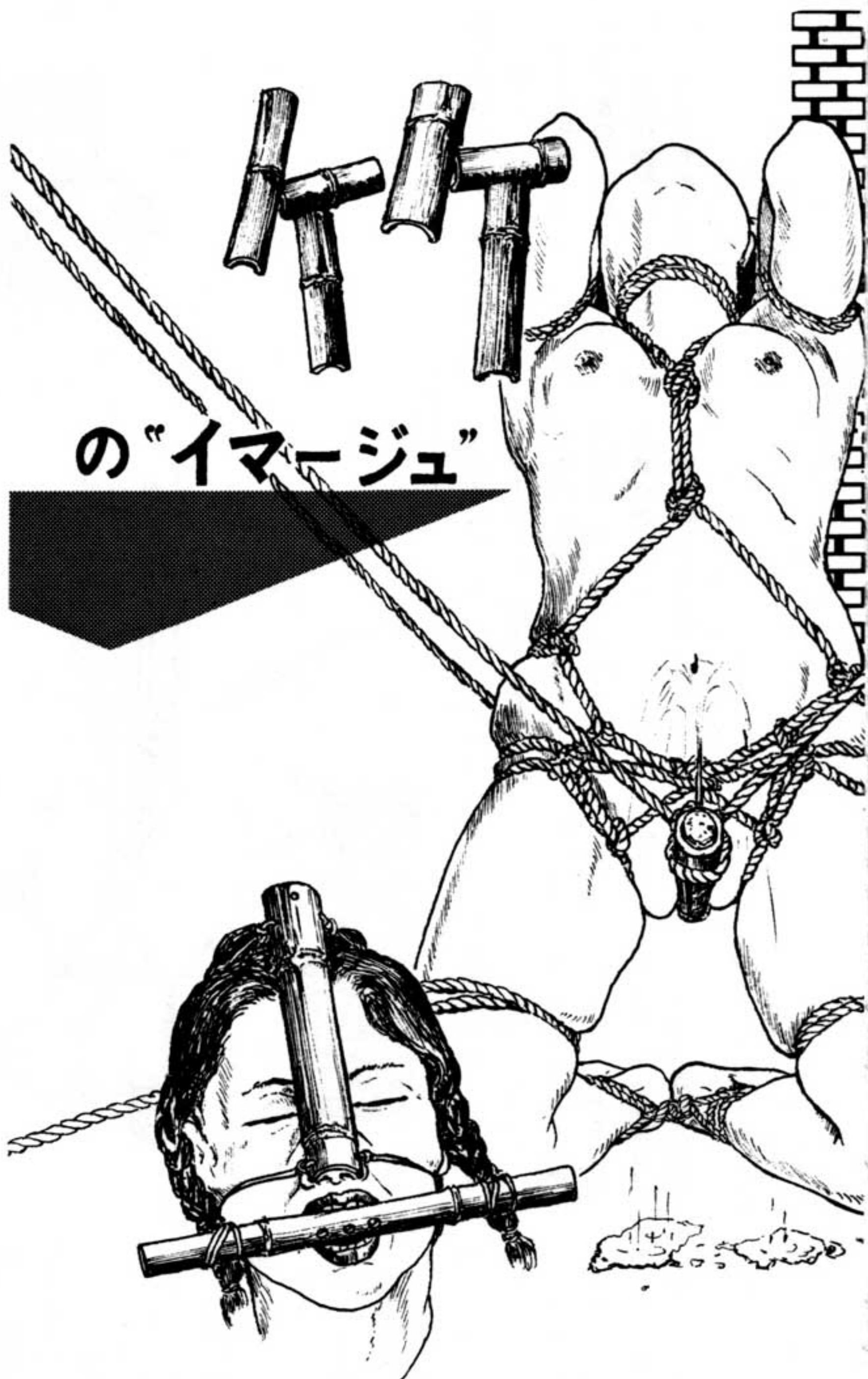
表題カットの全身像は、やや
判断しにくいかもしれないが、
緊縛後の被虐者に対して長尺の
青竹を股通しし四方へ縄で吊る
してある。遊動円木風の股間吊
りと説明すれば納得されるであ
ろう。但し、それだけでは変哲
もないので、縦縄を避けた股間
縛りの花卉部が当る節間を舟底
形に削り前方の節を筒中で打ち
抜いた上、隣接の節の近くに錐
穴をあけておくのである。その
小さな穴から噴水があがるのを
目撃でき、小水排泄の羞恥責め
が果されるようにする。

左下カットの顔面弄りは鼻責
めと細竹轡の併用。

美貌をわざと損ねるか、醜女
を逆に被虐美で輝かせるかの手
法である。



欣



の“イマージュ”

多貫

イマージュ① 弓矢責め

背後へ両脚を束ねて吊られることはつらい芸当であるが、それを更に“矢”にあたるつつかえの竹で腹部をせり出させるようにするのであるが、先端を円内に示すような形状にしておく。

責めの効果はあがる。

イマージュ② つるべ責め

①同様“竹材”加工にとりたてて難しいものはない。一部に「割り」を入れ挟むだけである。この「つるべ責め」では脚が重りの役をし、下げておけば熱い

蟬涙から逃れられることが分っ

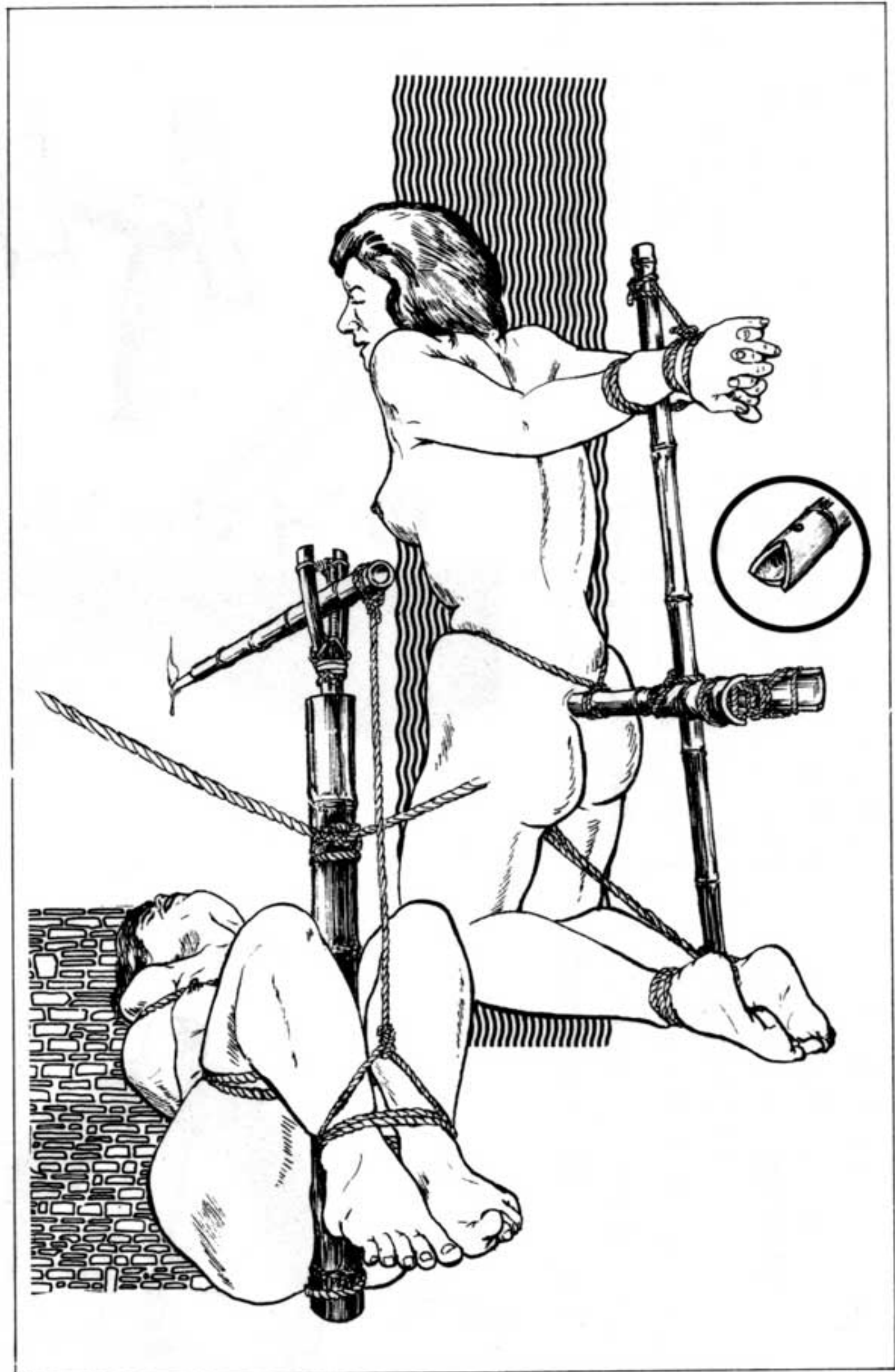
ていながら疲れて上げてしまい、タラタラと顔面に浴びてしまうことになるのが狙い。

イマージュ③ おどり責め

海老の活作り、又は日舞の毛振りを連想して欲しい。

腿、膝、踵の三点を固定して

足がくの字に曲がるのを防いだ上で、上体を前のめり状態にさせるようにすると、極めて不安定な姿勢になる。左右の竹を互い違いになるように動かしたり、前後を揺すり動かしてもいいが、



臀部を眺めながら鞭打するとい
いと思う。ひねりを加えてウィ
ップするには二人掛りが必要だ
がただ桶の中の里芋を洗うよう
に“ひねり操作”する時は頭部
の方へ回ってイラマチオさせる

ことにすれば楽しみであろう。
イメージ④ 逆さ鳥居責め
太竹に等間隔の細竹差し込み
穴を作っておき、開股の開きを
加減できるようにしておく。そ
の立てた二本の竹に首を挟むよ

うにして首枷を兼ねさせながら
の拘束にするわけである。
神社の鳥居に逆さ吊りするの
ではなく、竹の組み合わせた恰
好が、鳥居を逆さにした形状に
なるところから呼ぶ責め方式で、

こごみ込んだ姿勢のM女に、乾
いた穂先きの筆や水筆で撫ぜく
りまわすなどの攻略手段を加え
てみることで、一段と悦楽感が
盛り上がるだろう。

絵では③の場合、両足首も連
結してあるが、これは主として
立たせておく場合であり結びを
解いて機械人形のようにギコチ
ない歩行を命じてもいいのであ
る。④の場合は横置き太竹に、
もうひと回り太い竹を輪切りに
してはめておいて、前進・後退
の不自由な動きも責めの要素に
加えてみるのもよいと思う。
次ぎの二点は小道具としての
扱いになる物である。

⑤は乳枷、⑥は貞操帯といえ
よう。但し、⑤の場合は乳房の
焙り責めも加味される。太さの
異なる竹を輪切りにして尖塔状
にし、先端部に針金でローソク
立てを作り、がん燈提燈の光源
のそのように吊るのである。
胸を反らしている限りでは焰

の熱は外に流れるが、油断すると熱気は乳首を焙るように流れ込む。

⑥は大部分を割竹のすだれ綴りで構成する股間帯で、表裏なく使えるものにする。また、多少、ソロバンの珠のように、すだれ状の竹をずらすことができ

る。為に便宜が与えられることになる。

附属品としての手枷、股枷については特にその使用法などに説明は要らないと思うし作るにしても簡単である。ただ、竹筒を横に貫く穴をあけておくと何かにつけて便利であり、そこへ縄を通すことで緊縛、又は責め

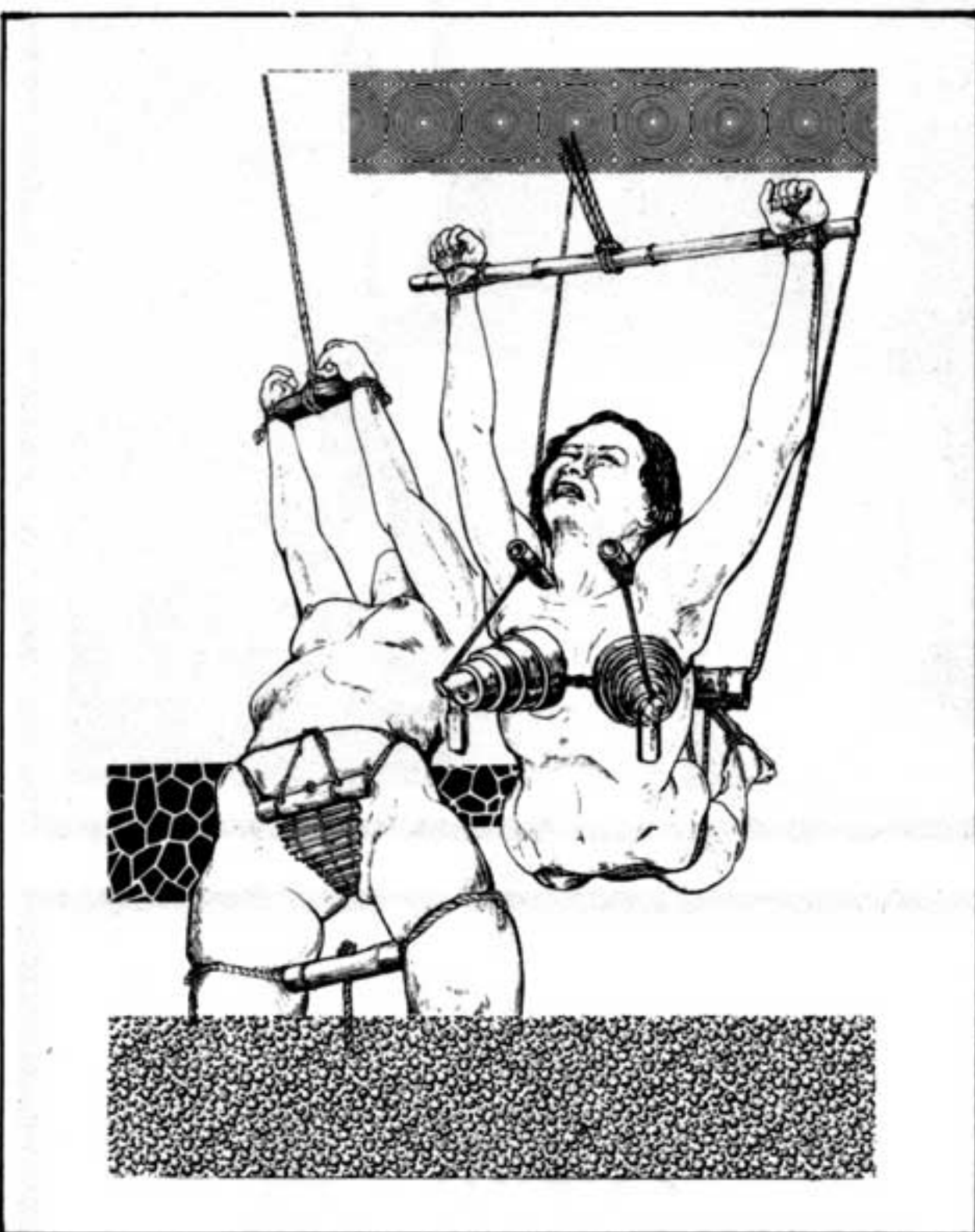
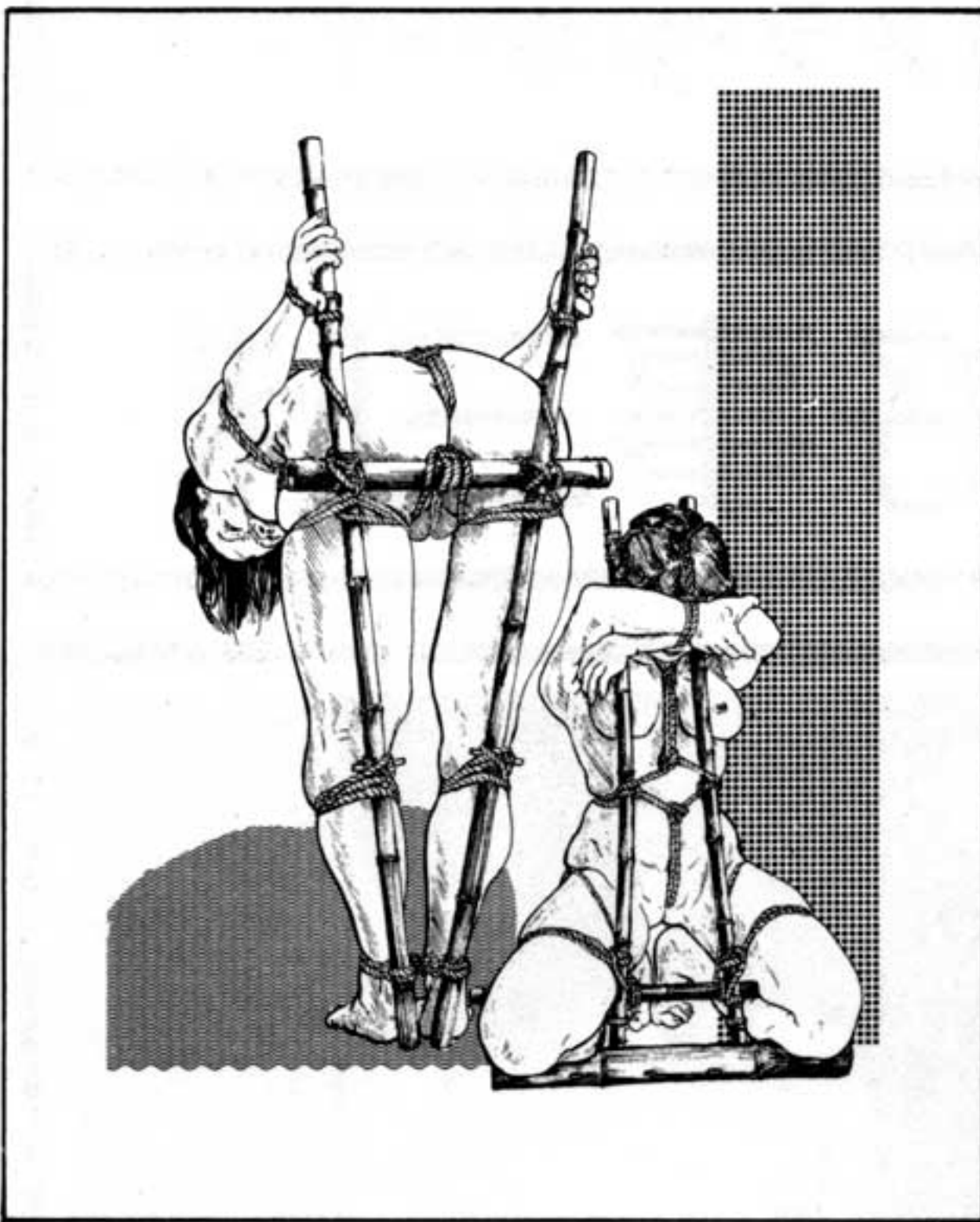
手段も変化が生まれてくるものである。

× × ×

ともかく、都会生活者には竹は入手しにくい物となっているが、よい環境にある地方在住の方でこの一篇からヒントを得られ、自作しそれを使ったプレイを楽しまれたなら、是非御報告

いただきたい。

次回も、今回同様紙幅の関係上、細部にわたる説明までゆき届かないアイデア発表になると思うが、絵にはできる限り理解されるような描き方をして行くつもりなので、よろしく御判断賜りたい。



カメラ・レポート

好事三昧



六本木 薫

カメラハンターである私は、本誌のカメラレポートを飾るべく、編集長と二人いろいろとプランを練り、モデル、撮影場所まで決定していたのだが、いろいろな理由で予定が変更となり、本日は予定

外のカメラレポートとなってしまうた。しかし、救いの神はいるもので、今回『奴隷市場』のM氏である。もし、彼の

みじめなことになりかねなかっただろう。まずは、カメラハントの詳しい状況をご報告するが、読者のご高邁なご意見をおきかせいただければ幸甚である。

「予定外のカメラハント」

編集長と私と、モデルの女性と三人で、ひっそりと車中で坐っていた。かすかにエンジンの響きが身体に伝わり、ルームヒーターを動作させるファンの音が鳴っている。

奴隷市場と言われる所で、これから行われる撮影に待期しているところである。もっぱら、私と編集長は誌面を飾る写真についての打合せを行ない、モデル女性は一ひっそりと押し黙ったままだった。

前日に行われる筈だった誌面用の撮影が、モデル嬢の都合のため急に中止になり、今日はすべてが予定外の撮影行であった。

確保してあった撮影場所も駄目になり困っていたところ、かねてから編集長と知己であった「奴隷市場」の社長のM氏の好意で、M氏の店内が借りられることになった。

それ行け、とばかり勢こんで来た私だったが、よく考えてみるとスケジュールはすべてダメであった。何事にも綿密な編集長は、あらかじめ提供者S氏の、家の間取りを書き、それぞれのポーズ、進行を書き連ねていたの

で、私はたゞ緊縛師として行動すればよかったのだが、今日の場合は行き当りばったり、どうなるのか見当がつかない。それもまた楽しからずやである……

「もう、そろそろ時間ですね？」

後手錠開股縛り

奴隷市場の社長M氏——私の想像では、脂ぎった五十男か、さもなくば眼付きの鋭い陰質な感じの男だと思っていたが、実際には、まだ若い三十前の人であった。

細面で爪実顔の、美男子と言ったらM氏におこられるかもしれないが、そうとしか言いようのない顔立ちで、物静かで柔らかな言葉遣いの紳士である。

もっとも、紳士然とした背広姿ではなくラフそのものの姿であったが、若くして一国一城の主になった自然の風格がにじみ出ているが如き人である。

「……あ、そうですね」

適当に暖まった室内で、アポイント（約束）タイム十分前であったのに気付く慌て、編集長に告げると、編集長はすぐにギアを入れ、発進させた。

行き着く場所は「奴隷市場」レザー製品、拘束具、責具の製造工場である。

三人三様の思いを乗せて、車は夕闇の中を走り始める。

ぶったところがない——とよく言われるがM氏がそうで、話し振りの中に誇張が全く感じられない。

（これは人物だ……）



編集長の紹介の言葉を訊きながら、それとなくM氏を観察する。

彼と同じぐらいの年令の若者の中には、矢鱈と社会改革をはのめかし、破壊作業に走る者がいるし、遊び廻っている者も居る。その



中で、独自にコツコツと自分を築いて行く若者……意外な気がして仕様がなない。

好感の持てる人である。年令の差を感じるのは、彼と私の服装並びに格好の差だけのよ

うな気がする。私は短髪、M氏は超ロングヘアであった。……

店内せましとばかり皮製品が飾られ、マネキン人形に装着された拘束具は、妙に生々しく目に写る。



表示がしてある。決して安いものではないがM氏の工夫が随所に生かされ、彼の風貌からは想像することも出来ない凄まじい責具が立ち並ぶ。モデル女性は、おびえたようにこれから繰り上げられる作業に戸迷っていた。

「何から始められますか？」

「……えゝと……」

物珍らし気に製品を眺めていた私は、M氏の言葉に一瞬我に戻る。

「そうですね……」

急に変更したために、私にはどうやってい



いか完全に打ち合せが済んでいない。ただ、M氏の好意で場所確保が出来たのだから、儀礼上皮製品を使おう、といった打ち合せだったから、私が戸迷ったのも無理はないが。
「えゝと……それではですね、こちらの製品を使わせていただいで、始めましょう」

編集長が素早く言い出して、早速GOになることになった。

「どんなのがよろしいでしょう？」

とM氏。

「よく判りませんので、ひとつおまかせしたいんですが……」

「……そうですね、では、これから使ってみましょう」

M氏は製品棚の中からビニール包みになっている皮製品を取り出した。

「あのう……私どうしたらいいですか？」

今まで駄っていたモデル女性が、やっと廻ってきた出番について訊く。

「あ、いけない、忘れてた。着衣のまじゃ装着は出来ないものね。失礼……それじゃあ、全部脱いで下さい」

「……全部ですか？」

覚悟は出来ているものの、三人の異性の前では羞恥がよぎるのだろう。

それには答えず、編集長は私に目ませをする。ツーと言えはカーである。私は早速バックからカメラを出し、フィルムを装填してストロボを着けた。

ストリップの様から写すつもりであった。ストロボの充電具合を確かめて、シャッターを押し始める。

「えーと、これはどうしたらいいでしょう？」

始めて手にした製品は、さすがに編集長もその扱いが判らないらしかった。

「あのう……」

扱い方説明を始めようとする二人に、私は声をかける。振り向いた彼らに。

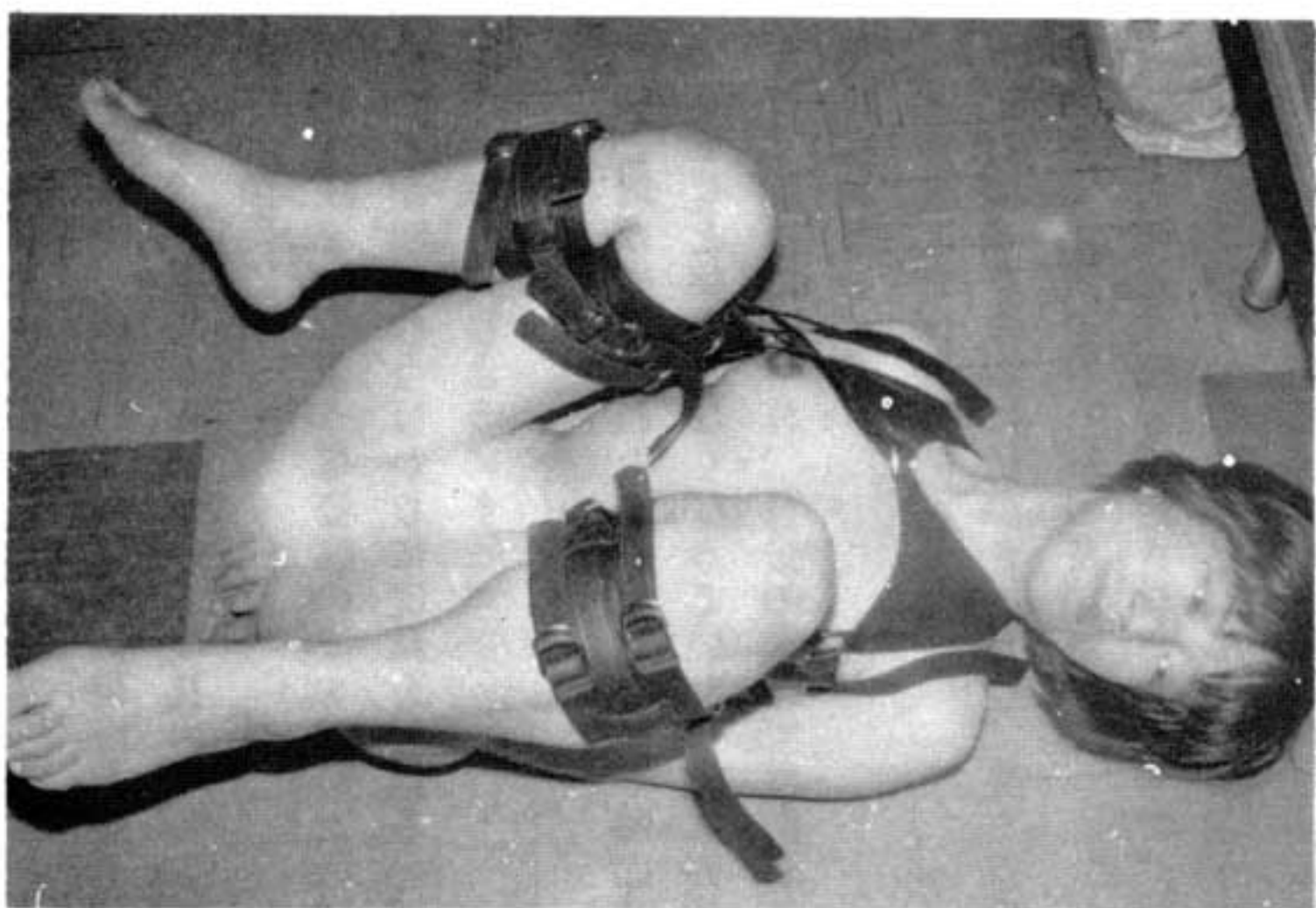
「どんなものでしょう。もしよろしかったらMさんに装着していただいたら……どうでし

よう？」

交互に二人に声をかけると、

「え、結構ですよ、私は……その方が説明するのより早いかもしれませんね」

気さくにそう言うと、厚かましいこちらの申し出を気にする風もなく、モデルのそばに近寄る。



「よろしいですか？こんな事までお願いしてしまつて……」

恐縮する編集長に、

「いえいえ、大丈夫です。……では始めましょうか」

開く股間

手なれた手付きで製品を拵げ、

「別に痛くはない筈ですけど、苦しかったり痛かったりしたら言つて下さい。すぐにゆるめますから……」

「……」

自分で創意工夫し作り出したそうである。

製品のひとつひとつが目を瞶つていても平気なのだろう。またたく間に、上半身にまとわりつく皮は、留め具を縦横に装作するごとに肌にフィットしてゆく。

まずは組写真で見て下さい。

「手を後に廻して……そうです。」

皮手錠が装備されると、彼女の上半身の自由は全く失われてしまう。不安そうにきょろきょろとまばたきする彼女、肉体のあらゆる部分が三人の異性の前に、隠すところなく露

呈されてしまっている。

しかも、……後手錠を施されてしまつては何をされても如何ともしがたい。

どちらかと言えば色白の方ではなく、浅黒いとは言え、しなやかな皮の黒味がかった色とのコントラストは見事であつた。

(こんな物静かな男が……)

と感心するほど、変った仕掛けが施されている。場合に依つては、悪魔的な道具と言えるかもしれない。

身長一五五／六センチの彼女は、決して良



いプロポーションとは言えない。バストはまあまあとして、ウェストからヒップにかけての線は貧弱と言えた。

然し、どうだろう。皮の拘束衣で締めつけられた姿態は、特に緊縛美といえる。黒と白との対比……決して絵画的な美しさとは言えない。だが、完全拘束の型は見る者をして

妖しいSの世界に引きずりこまれる。

「坐つて下さいませんか、あ、いゝえ、足を投げ出すようにして……」

言われるまゝに坐りこむ彼女のかたわらにしゃがみこむと、M氏は、

「こういう風にしますと、開股縛りになるんです」

「……」

じっと見つめている編集長に視線を走らせながら、太腿にかかつている皮具のベルトを肩口の金具に引いてゆく。

立て膝をしたような姿態のまゝ、彼女の膝と肩とが触れ合うばかりに皮具を締めると、もう片方も同じようにする。

「……」

膝と肩が固定された彼女は、もはや膝頭を合せることが出来なくなっていた。肩巾の分だけ下肢は広げられ、自分の意志では閉じる事が出来ない。

「出来ました！」

むろん、その間に私のカメラは、次々と移りゆくポーズを写し続けている。

一番力の入る膝が固定されてしまつて、彼女は完全に動けなくなっていた。顔からうなじにかけて、見る見る赤味が広がってゆく

が、羞恥の極限にたたされた彼女の心の動きを示しているかのようなであった。

………神秘的丘は我々の目前に露らさまでにさ

れていた。茂みは小さきぎみにゆれ動いていた。下腹も波うっている。

息を吞んでいるヒマはない。次々にポーズを求めては動き廻る。忙がしいことこの上な

い有様である。

普通の撮影であれば、こちらの指示通りモデルを自由に動かせる事が出来るのだが、この手のものに限って、それは不可能である。

〔M女掌編告白〕

被虐の悦びを

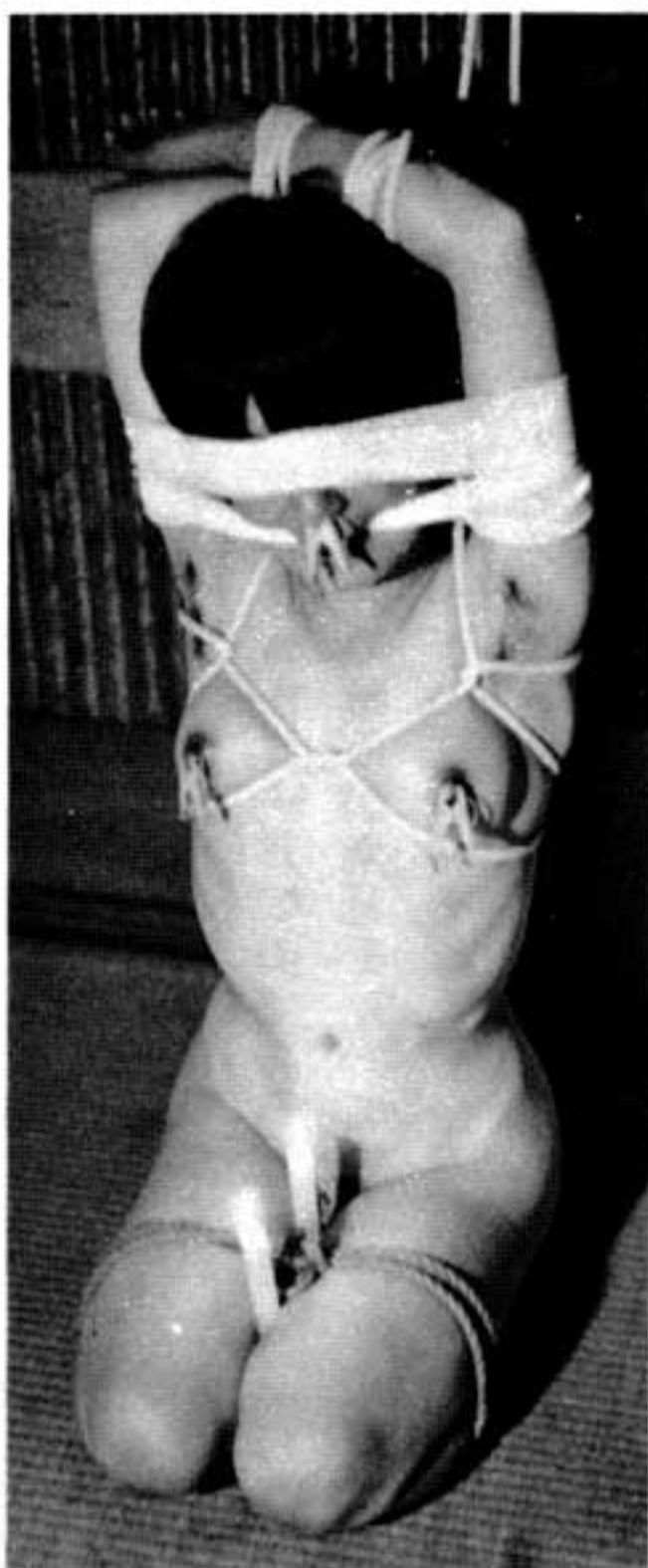
求めて

私が初めて縛られ、縛り方にもいろいろあるものだとも興味を持ち、声をかけられるとほとんど約束を破らずモデルとしてお仕事をしようになった。今年で十年です。でも私ってマゾヒズムな女なのかしらと思うようになったのは、ずっとあとの事で、四年くらい前からです。結婚した夫はセックスには淡泊で、身悶える日の方が多く、悪癖だからやめよう、結婚したら自然に忘れるだろうと思っていた自慰は昼でも夜でも、ますますはげしくなってしまうのです。

その頃から私の方から「お仕事でございますか」とモデルにしてくださいるようお願いするようになりました。マネキンを縛って縄のかけかたを研究するようなものじゃなく、責めてみ

しいような感じになっていたのです。

ある時、雑誌のモデルになつてみないか、と今まで個人的に続いていた仕事以外のお話があった、思いきって他所でモデル



るぞ、というお話にも喜んで出かけるようになり、実際に鞭で叩かれ熱いローソクの焰で焙られるような目にあっても、苦痛が体の中に浸みわたることが嬉

になることもしたのですが、急に私は大胆になりました。よろこびに変わる苦痛と、それほどつらくはなく時間がたてば「ご苦労さんでしたね」といたわ

られて、しかも家計のたすけになる収入があるのですから、なんて私は幸せだろうとさえ思われるのです。

周囲の方がハラハラし、そんなことやめておこうよ、と責めの計画をたてた方についておられるのを聞くと、かえって私から「やりましょう」とけしたてるように「試練」をたのしむようになったのです。でも、私は自分の容姿には自信がなく、そのせいか心では当てにしているお仕事は多く巡ってきません。豚のように肉付きよく肥える飼育を試してみてくださいる方はおられないものかしら、そうすればもっと私は変わらなう昨今なのです。

何と言ったって、完全拘束をしてあるのだから、モデルの方の意志ではどうにもならないいちいちカメラを置いては、移動を行なうのであるから大変である。

今日の場合は、編集長とM氏とが私の指示のもとに、様々に姿態を移動させてくれるので、大いに助かるのであるが……。

役得とばかり編集長の手が、奇妙な動きを見せるのが気になるが、この際仕方ない。

あとから聞いた話であるが、彼女すでに結婚して数年の主婦だとのことで、軽いアルバイトのつもりなのだそうである。主婦売春が

盛んなこのごろ、かなりさばけてきたものである。

勿論、この撮影はあくまでも「緊縛」シーンの撮影であって売春ではない。その点、多少の羞恥さえ覚悟すれば、パートタイムのかせぎよりよい筈であるから、彼女割り切っているのだろう。

小荷物のように、あちらこちらに転がされる度に、羞恥は高まる一方なのであろう。室内の暖かさ以外の赤みが全身を走っていた。多分に汗っかきの私は、それこそ全身汗だらけでアングルをきめる。

猿ぐつわに皮頭巾

フィルムは次々と使用済となり、バッグに

投げこまれていた。目にしみこむ汗を振りのけながら、私は幾度もフィルムをつめ代えていた。

小休止のとき、

「どうでしょう、このままで猿轡を試みたいのですが、適当なものがありますでしょうか？」

編集長のきおった調子に、M氏は棚から何

かを持ち出すと、

「え、あります。これですけど……」



「ほう……これは？……」

手にとって珍らし気に見ながら、編集長は視線でM氏に説明を求めている。

「やってみましょう」

優美な手つきでそれを持ち、彼女に近寄ると、

「こうしましてね……」

言いながら装着を始めた。

皮紐が縦横に走っている、一見変わった袋と言った感じの物である。すっぽりと頭からかぶせられるように出来ている。しかも口に当る所には、ゴルフボール位の大きさの球が付着してある。

「息苦しくならないように、工夫してあります。中が空洞になっていましたね。でも、口の中におさめますと舌を押えてしまいますので言葉は喋ることが出来ません」



彼女に口を開かすと、ぽこんと押しこみ皮ベルトを結ぶと出来上りであった。

「何か喋ってごらん」

と、編集長に言われ、

「あ、あ、わわわ……」

舌を圧えられているので、一切の言葉が出てこない。

「……………」

やゝ得意気にM氏は編集長を見る。

「成程……………」

興味深気に見据えている編集長をよそに、私は機械のようにシャッターを押し続ける。

異様な姿であった。以前「鉄仮面」という小説があったが、ふと、それを思い出す。

頭全体を包む皮のかせ、口は一杯に拡がり口におさめられたプラスチックのものは、呼吸は自由に出来るが、言葉を喋れないし、大声をあげようにも球のために声を出しても声がしゃ断されてしまう。

やがて

「あ、わわわ……………」

「どうしたの……………」

編集長が寄って行って訊いたが、仲々判読出来ない。

「何？なんだろう？」

唇の型を見ようにも、ゴルフボール状のものが口中一杯に入っているために、動きが判らない。

「あ、そうか……………」

一人でうなづく、編集長は私に向って、「六本木さん、ひとつ迫力のあるやつを撮って下さいよ。彼女、舌が動かせないのですよ。だれが出るって言ってるらしいんですよ。ほら、

ごらん下さい！」

見ると、閉じられない口元から、透明な液体が流れ出している。

「……………」

うなずくと、私はカメラを接近させてピントを合わせる。嫌々をするように顔を動かして、屈辱のシーンに狙いをつける私をさけようとしたが、かまわずシャッターを切る。

「出来ましたね。迫力があるやつが出来上るかな……………」

嬉しそうに編集長は笑みを浮かべた。M氏も傍観者の立場から、Sシーンの極致に見入っている。

「ポーズを変えましょうか？」

カメラの手を止めた私に、編集長は間を置かずに関にかける。

「お願いします」

私が答えると、M氏と編集長はあたかも荷物のように彼女の移動を始める。されるがままの彼女の眸に、ふと、とがめる光があったが、私は完全に無視することにした。熱気が狭い室内にたちこめている。

造形深い創作器具

フムフムとうなづきながら、編集長はマネキン人形に装着されている製品に魅入っている。物珍らしさもあることながら、元来SMについて興味深々たる彼は、あらゆる責め具に関しての知識が大であった。

コリ性である彼は、文献あさりに古本屋めぐりに丸一日をついやしてしまう事が多々あるそうである。

古典の拘束具や責め具については、ほとんど言っていないくらい文献があるらしいが、こうしたプレイ用の拘束具や責め具に関しては、全く無知識だそうで、それだけにこれらの製品に人いちばいの興味を示すらしい。



「とにかく創刊号ですから……」

と言う編集長は、従来のSM誌の、縄主体のものから離れたものを……というわけで単身奴隷市場を訪れ、社長のM氏に協力を頼んだのだそうです。



若いけれども、M氏は編集長の要求？を心よく受け入れてくれた太っ腹な男であった。約一時間の話し合いの後、アドバイザーまで引き受けてくれ、おまけに装着まで手伝ってくれてしまっている。

「済みませんね、ごめんどうなお願いをしてしまって……」

大いに恐縮する私達に、「いえいえ、どうかお気になさらずに……」

M氏は一向に迷惑そうな顔をしていない。本当に人のよい方である。

さる大学在学中、心理学の中でサディズム、マゾヒズムの部分があって、ふと興味を覚えたのがこの仕事に入るキッカケになったそうである。絵画をよくするというM氏は、デザインも設計もお手のものであったらしい。

思いつくと、すぐさま製作に取りかかるそうで、そういえば、室内の片隅に裁断しかけのレザーが沢山置かれている。



抱引責め

「次はどういったシーンにしましょう？」

「そうですね……」

一瞬目を瞑って考えていたが、

「えーと、それではこうしていただきますしうか……別の製品を作っていたくとして、そうそう……出来ましたらマスクがありましたらそれを着けていただいて、あとは拘引するシーンにしたいと思いますが」

「かしこまりました」

気軽に棚に手を延ばすと、二、三の品物を取りあげる。

「チャンピオン・ベルトみたいですね」

私が思わず洩らした製品は、ウェストを主体にした拘束具であった。但し、チャンピオンベルトと違うところは、矢鱈と奇妙な金具が穿まっている点である。

「サイズが合わないかなア……」

M氏は小首をかしげながら、彼女の腰に巻きつけていたが、

「これは外国人用に造ったものなんです。ですからあちら用として太目になっているんで

……矢張り少しゆるめですね」

「結構です……」

編集長は出来上りを前後から眺めながら言った。

「皮のコルセット……ですね。こいつあ素晴らしい。外人のプレイの場合、これを好む人が多いんですか？」

「そうですね。これですと、手を前にでも後にも拘束がききますし、丈夫でしょう、好んで使う人が意外と多いらしいです」

「ははあ、これならば……」

言いながらベルトに付着している金具をいじりまわして、

「吊るような場合便利ですね。胴吊りにしても大して痛くない」

他人事みたいに言う編集長に、彼女は恐しそうに身体をすくませている。



「あ、そうそう、マスクでしたね。忘れてました。じゃあこれを……」

薄い布状のものだったが、よく見るとレザ―であった。まとめてしまうと手の中に隠れてしまいそうな薄地の皮で、袋のようになっている、アクセサリのように細紐がみあげ式になっている。

「これをかぶって下さい。少うしきゅうくつですが誰にでも入りますから」

頭巾である。平均的な頭の型にしてあるらしく、買いたてのセーターを着るように、ギリコチない仕草で彼女はかぶった。

「おや、まあプロレスのデストロイヤーみたいだ」

思わず編集長はつぶやく。私としては快傑黒頭巾を連想していた。

眼に当る処が空けられ、あとはスッポリと覆いかくれてしまっている。こうなると男だか女だか訳が判らなくなる。しかし、これみよがしに隆起する乳房が、女である話りを示していた。

珍妙な恰好であった。頭と腰のみを覆い、あとはすべてむきだしの女体……グロテスクとは言い難い。エロティックな面も多分にある。強いて表現するならば妖美的とも言っ



たらよいのかもしれないが……。

そのプロセスは、すべてカメラにおさめられていた。張り出した乳房も、神秘の丘陵地帯も余す処なくフィルムに残っている。

なだらかな女性特有の曲線と対比して、ゴツゴツしたレザーの部分は、ただ眺めているだけでも妖しい気分になってしまう。

両の手首に皮ベルトをはめると、彼女の両手は半拘束になっていた。両脇に固定されているために、さほどの拘束感を感じられないけれども、実際的には自分で拘束をゆるめる事は出来ないし、両手の動きは留められたと同然であった。

「もう少し囚人的になるといいんですが」

編集長が言うと、もうすぐM氏はかたわらの、クサリ付きの器具を持ち出していた。

「足枷です。洋風ですが……」

「うん。これはいゝなあ、早速穿めましょうか……」

左足がM氏、右足が編集長、共にしゃがんで取りつけに熱中している。

「どう、疲れましたか？」

「いいえ、よく寝ましたから大丈夫です」

カメラを休めた私と、なすがままの彼女は、立ったままでいた。皮にさえぎられた声はくぐもって聞える。

ふと腕時計を見ると、開始してから二時間ばかり経過していた。

「フフフ……」

思わずふくみ笑いを洩らすと、

「何ですか、変な笑い方をして、おかしい方……」

表情はマスクに陰れて見えないが、彼女もつられて笑ったようであった。

「いやあ、自分の好きな事をやっていると、時間のたつのが早いなあって思ったんですよ。嫌いな事だと仲々時間はたたない」



「まあ、勝手な言いぶん」

「仕事とは言え、こうして全裸の女性のすべてを見ることが出来る。ましてこうした姿だったら何でも出来るし、例えば……」

「いやあ……」

嬌声を挙げて彼女は身もだえた。私の手が素早く延びて乳房を握ったからである。

骨のないまろやかなふくらみは、私の手の中で弾んでいる。

「ほらね。ボクがこんなことをしても、君はどうすることも出来ない。……」

「嫌あね……」

第三者が見たら何と思うだろう。若い女性を全裸にして拘束している男達、非常に犯罪的なシーンにも拘らず、拘束されている女性も、相手をとがめたり助けを求めたり大声を挙げる訳ではない。むしろ談笑している風景

は、あつ気にとられる図が考えられる。

編集長もM氏も、少からず疲労を感じてい
るはずであった。一切の力仕事？は彼ら、そ

して私は撮影オンリー、それなのに私は全身
に疲労が廻ってくるのを実感として覚えてい
たからだ。

鎖に引かれる囚人姿

「六本木さん、ひとつ、こゝで連続写真を撮
っていたぎましましょう。一応廊下に出て這い
まわる姿を撮りたいのです」
「かしこまりました」

暖かいと言うより、灼熱地獄のごとき室
内は、人いきれと石油ストープとで目が廻り
そうだったので、扉を開くと室内と違った空
気が人心地をおぼえさせてくれた。



「大丈夫です。ここは
事務所ばかりですから
誰も居りませんから、
安心して下さい。それ
でも念のために……」
M氏の手が動くと、
パチンと音がして、外
へ通ずるドアに内錠が
かかっていた。
「あつ、電車ですね……」
廊下の下あたりが国
鉄線のレールがある。
響音を流して電車が通

りすぎてゆく。硝子ひとつへだてたこちら側
には、彼女の囚人姿があった。

「……………」

思わず硬直したように身をすくませる彼女
に、

「大丈夫ですよ。凄いスピードで走ってるん
です。見えはしませんよ」

愉快そうに笑いながら編集長は言った。

「さあ……始めますか………それでは廊下の
つき当りへ行つて下さい。」

チャラチャラと鳴るクサリの音は静かな廊
下に木魂し、歩きづらそうに一歩々々歩いて
ゆく彼女の姿は、芝居とはいえ、ガックリと
肩をおとして重い足を引きづって……知らず
知らずのうちに変な気になってしまふ。

「こつちを向いて……………」

ファインダーの中には、廊下のつき当りにあ
る二〇Wの蛍光灯のために、逆光になったシ





ルエットしか見えない。

トリミングを考えて、ファインダーに姿を入れると、レンズの紋りを締って写真深度を見定めてシャッターを切る。

一瞬の閃光がほと走るが、すぐさまシルエットだけになってしまう。どんなものが撮れたのか私にも判らない。

(ままよ……)

こういったピントを合せない撮影は初めてである。丁と出るか半と出るか

「こっちを向いて！」

「しゃがんで！」

「横を向いて！」

「足を広げて！」

「手を床の上に置いて、こっちを見る」

次々と命令をする私、次々と記録される屈辱のシーン。

「六本木さん……」

「……はい」

いささかエキサイトしていた私に、編集長が呼びかけたが、私は間の抜けた返事をする。「今度は、私が彼女を引きずりますから、あらゆる角度から写して下さい」

「……」

皮紐を持って彼女に近づくと、素早く手に結びつけ、

「ようし、いきますよ！ようしっ！」

かけ声もろ共皮紐を引っ張る。生々しい場面であるはずだが、私にはシルエットしか見えない。ストロボの充電具合を確かめる間もあらばこそ、私はシャッターを押し続ける。

「ほれ！もっと早く這うんだ！」

「尻を立てればいいんだ！早く……」

金属の鈍い音と編集長の叱たに近い声が交互してゆく。エキサイトしているのは私だけではなさそうだった。

はあはあと荒い息遣いが聞えてくる。彼女も興奪と疲労とが交じりあい、それに相まってM的な錯覚を覚えているらしい。



「一寸待って下さい」

フィルムを入れ代える。もう六・七本のフィルムが転がっていた。よくこそ写したものである。

室内の暖房しすぎの部屋に加えて、廊下は冷んやりとした空気が漂っていた。それにもかかわらず私は汗が留まることを忘れているかのようであった。

ファインダーが曇り勝ちになる。ともすればアングルを見失いそうになる。必死であった。

唯々疲労感

興奮のひとときが過ぎて、我々は忙然として煙草をくゆらせていた。口をきくのもおっくうな程疲労が身体をはばんでいた。

膝頭がすれたのか、彼女はしきりと手でその個所をもんでいる。

「さあ、おしまいにしましょう」

編集長の言葉で、彼女は着がえを始めた。私は、フィルムを整理し製品である拘束具をまとめ、ストロボ・カメラを仕舞う作業を始めた。

外に出ると、十二月の空の下はさすがに寒い。ビルの並木の中にも北風が襲いかかって



くる。コートをはおりバッグを下げて、私と編集長、彼女は行先の方が同じだとのこととでM氏と、夫々の車に乗りこむ。

「今日は色々ありがとうございました」

「いやあ……恐縮です。大してお役にたたな



かったのではないかと……」

「とんでもない！」

「それでは……」

小気味の良いエンジンの音を残して、M氏は走り去ってゆく……



私達二人の車は反対方向……編集長のハンドルをとる手さばきは軽々としている。仕事を終えたあとの一服は旨かった。

次号では同じモデルで、これらの拘束具を使用して逆さ吊りを挙行。ハイライトシーンはグラビアで見えていただくこととして、その詳しい撮影行は次号に掲載する予定です。御期待下さい。

柱とわたし達

浦賀美恵子

結婚三年目です。わたしは銀行のオフィス・レディ。主人はお得意先の建築会社の経理マン。恋愛結婚でした。子供はまだです。結婚して一年後わたしは銀行をやめました。予定の行動でした。

わたしの退職金と貯金。それに主人の貯金をはたいて、新築の建売住宅を買いました。主人の会社で売り出された住宅なので、社員である主人は普通よりは良い条件で入れたみたいです。

「けどなあ、社員の弱みで、普通のお客のように、これもつけて、ここもこうして、っていいないだろう。仕方ない、おいおいお金をためてからやろうね」

やさしい主人の言葉に、ただ私はうなづくだけでした。……でも、おかしいんです。当然つくべきドアがないんです。

「このところ……」

「ああ、仕様がないうんだ。大ぶん安くして貰ったからなあ」

それでおしまい。わたしだって若いし、知識だってありません。

こんなものかなあ……って軽い疑念が湧くだけでおしまい。

でもおかしいの、だって、ダイニングキッチンへの入り口がふたつあるみたい。洗面ルームへの入り口にも、キッチンへの入り口にもドアがないの。

だからキッチンへの入り口の前に、なんの変哲もない三寸（一〇センチ）柱が、ぽつんと立ってるんです。

「おかしいわ……」

「まあ、いいじゃないか。そのうちにドアを入れればいいんだから、柱だけにしておいてもなにかと役にたつさ」

口惜しいけど仕方がない。お金が足りないんだから、ってあきらめてました。

×

×

×

入居して一ヶ月ばかりたった日でした。珍しくほろ酔い気分で帰ってきた夫は、着がえもしないでダイニングキッチンに姿を見せて、「美恵子、ちょっとこっちへ来てごらん」

いわれた通りにすると、

「この柱に寄りかかってごらん」

「あら、どうして？」

「うん、身長を計ってやろうと思ってね」

「なによ。あたしお食事の仕たくの最中よ」

「いいからいわれた通りにしなさい」

「……………??」

柱に背を向けて足のかかとをしっかりとつけたの。すると夫はわたしの後ろ側に廻ると、わたしの手首をとりました。変なことをする。だって……身長を計るのに手を握る必要はないんだもの……。わたしたち新婚のやり直しみたいな気になっていました。だって、

そうでしょう。新婚時代ってそれはもう甘いものよ。なにか手を握られると、ついうっとりしてしまふの。

そのとたんでした。なんだか冷やっとした感触が手首に走ったんです。

「……………!？」

言葉を交わす間もなく、もう片一方の手首にも同じ感触がありました。なにをされたのかはわからなかったのですが、慌てて逃げようとしたのは本能のせいでしょうね。

「あ……………」

駄目なんです。動けないんです。いつの間にか、わたしは柱を背負う型で両手に手錠が穿められてあったのです。

手錠と手錠の間には、短かい鎖がつながっている様子です。ジャラジャラと音がして、わたしの抵抗するごとに、無情のきしめきが聞えます。

いくら暴れても鎖はおろか、手錠もはずれる気配がありません。すると、どうでしょう。ニタニタと笑いながら、夫は盛り上った乳房を指で突っつき始めたではありませんか。

「嫌よ、なにさ、やめて……………、なんでこんな真似するの……………とて……………やめてよ！」

後ろ手で柱をかかえているみたいな姿で、わたしは彼の手をさけるために、ぐるぐる廻ります。でも、逃げるっていったって、柱を中心に小さきぎみに廻るしかありません。



やがて、疲れてしまつて動けなくなったわたしは、恐怖と驚ろきで涙だらけの顔になってしまいました。すると、夫はわたしの手が動けないことを計算して、いきなりスカートを捲くりあげました。夫婦なんだから、こんな痴戯はよくやっていることなんですけど、不自由な身体でのゲームは異様な感情にわたしを導いてました。

「……………」

それでも無言のまま、腰をくねらせて夫の手を逃れようと性一杯頑張ったんですけど、あとで夫から聞いたんですけど、すぐくエロティックに見えるんですってね。

毛糸のズロースを見られるのが羞しかったんです。だって寒いでしょう。寝る前には脱いでしまふんですけど……………。

ズロースを脱がされ、肌をまもっている可愛らしい刺繍のついたパンティも、あつという間に足元にずり下げられていました。

冷んやりとした空気が下腹部を襲うより、こんなみじめな姿態を夫に見つめられるのがつらかったの。

×

×

×

それからどうしたかって……………。

柱はそのままよ。もちろんドアは付けないまんまでです。

わたし達の夫婦生活は、部屋というより家全体を奔放に使って楽しんでます。そうして、あの変哲のない柱が、わたし達にとってかけがえのないものになっていますの。

◎ 新年随想 ◎



よき素材の発掘 に邁進したい

河本隆治

新らしい期待の雑誌は新年になると出るのだそうで、僕は少し早いのですが、新らしい年になったつもりで今年こそはと思う意気込みで書いてみます。じつのところ、今夜の僕はまったくの素寒貧。出たばかりのポリーナスはあっという間に消えて、手もとには待望の新品カメラ、ニコマートだけが残りました。しかし、初撮りの結果も無残なものでした。フ

イルム現像の段階で、液温計が狂っていたのでしよう。フラットな仕上がりで、硬調印画紙を使っても画像はしまらず、地団駄ふんでくやしがつても後の祭り。ついていない年は早く去ってくれという祈りが、ペンを持つ手を震わせるのです。

読者投稿写真の

主たちが羨ましい

己歳を迎えて、僕は今年でふた回り生きてきたことになる。誕生日は三月だから、まだ二十四にはならない。

大学生時代の下宿で、ポケット版のSM雑誌を読み出してから六年目になる。緊縛の女性性が美しいカラーで巻頭を飾った雑誌を、俺はこういう固い本も読んでいるんだぞ、とレジーに思わせるため、他の新書版本と重ねて買ったものだった。

その頃から異性に対する見かた、好みが大

きく変ってきた。それまでの清纯派好みから少しは異性体験があつて、あまり理的ではない若い女性の方が性に合っている風に思い始めたのだ。

クラブ活動は「写真同好会」に加わつて、兄から取り上げたキャノンを主戦力に婦人科カメラマンの真似ごとで明け暮れていた。だから僕の周囲には「撮りたい女」が絶えずつきまといつていたし、大胆なポーズを要求して女体神秘を覗く好奇心も堪能できていた。

関西ストリップの凄いという噂で、バイトの報酬をそれ目当てに注ぎ込んでいる連中より遥かに恵まれていたといえるだろう。若い女性を撮りまくり、意識的に四十八手となるように組み合わせた。それぞれモデルが違うフィルムからの抜粋写真集は、新婚の兄を喜ばせたし、先輩が高値で買い取つてもくれ、いながら学費稼ぎになったこともある。

つまり、女ッ気には不自由しなかったわけで、悔いのない青春を謳歌してきたことになるだろう。だが、SM雑誌を手放せないでいたにもかかわらず、緊縛写真は一度も撮つたことがなかった。おそらく機会はあっただろうが、云い出せずにいて社会人になってからの楽しみに残していたようなものである。

心では鬱々としたものはあつた。見なれてくると新刊誌の緊縛写真は迫力がなくなつてわざとらしさが目についてくるばかりである。縄師が技巧をこらしても、金になる仕事だと割りきつたモデルでは、味わいがいのある写真にはならないのだ。

そこへゆくと、投稿写真の方は実際のプレイをスナップしたものだけに胸のときめきがある。見惚れてしまう光景描写が発見できて楽しいのだ。僕は、SM雑誌を買いなくなる理由をそこに見いだすのである。

SMを理解しあつた夫婦、または理解するまでには行っていないにしても、夫唱婦随のあらわれのようにマゾヒテックな肢体を撮影された女性の写真には感動することがある。

写真そのものは綺麗な仕上がりではなくても美しいものを見たという感銘が心に深く残るわけで、僕も恋愛からの男女の愛の姿を、デートの都度、記念写真のように写して残すのではなく、記録しておきたいと思うのだ。

ところが皮肉なことに、今の僕には女ッ気が全くない。職場恋愛のめばえになりそうな相手も機会もないのだ。しかも趣味はカメラと云うことは出来ても、なにを撮るのが楽しみかと聞き返えされたら、返答に困つてしま

う立場なのである。「女性を撮る」といっただけで、おそらく誤解曲解が渦巻いて、おかしい奴という烙印すら押されかねない。私生活まで監視されているような世界に閉じこめられていることもあり、心底、SM雑誌の読者投稿写真の主たちが羨しいのである。

北川まり子の

「心得帖」を読んで

僕が学生時代を送った下宿は、歌手の三波春夫の豪邸が近くにあって、通学途上石垣の下を通るたびに、「お客様は神様です」と流行語までになったお得意のヘッライ台詞を苦しく思い出したものである。

その下宿を出る時がきて、始末に困つたのがSM雑誌類であつた。捨てるのは惜しい。残しておきたい部分を切り取つて、あとの部分を焼き捨てるには焚火する場所がない。で思案投げ首の吐息ばかりをついていた。僕の部屋の後釜は、もう学生は危くしてせわしくてコリゴリだと云う家主の意向でサラリーマン夫婦が入居することに決つていた。その事を聞いた直後、珍案がひらめいた。二人のために雑誌を残しておいてやろうということだ。もっとも必要な個所（主にグラビア頁）を抜

いた残骸ではあるが。

家主の癖は、他の部屋の新旧交代の時みていて知っていたから、空き部屋をくまなく調べられる心配もなし、押入れの天井板をずらして天井裏に隠すことにした。段ボール箱に入れて押し上げておいたら、中味が分らず薄気味悪かろうと、わざと紙紐で結んだだけに、それとなく好奇心をそそるように仕向けたわけである。

部屋は借り手が好きのように掃除してくれと金儲け主義に徹している家主は、次期下宿人が学生ではなかつと、多分その態度は変わらないという推測に立って、僕は自分の発案に喜々として精を出し、作業を完了したのである。

その時、何故か完本のままで残した雑誌が一冊ある。それが奇しくも、それ以後書店から消えた「奇譚クラブ誌」一九七五年三月号だ。休刊か廃刊か、ともかくこれでこの雑誌は終焉したのだと後日になるに従い感慨深げに思うことが重なって完全な姿で残しておこうとしたのだと思うが、更めて眺め返してみると、後生大事にしていた原因が思い起されてきた。

僕は北川まりこ記述の「セックス・ドレイ

心得帖」を読んで、そこに男の野望をみたのである。云いかえると、僕が欲しいM女の理想が彼女の手記によって代弁されていたことになり、当時、読後感想を送ってみようとして下書きに熱中したことさえあったのを思い出した。そのため資料として完全保存しておこうとしたのであった。

北川まりこは実在の人物か、男がヒロインにして書いているのかどうかは判らない。K誌にセックス・ドレイ生活の写実録を寄稿したわけでもないから、他の飼育妻たちのように素顔を観ることもなく終った。それに記述内容が荒唐無稽に思われたせいか、反響は少なかったように思う。特に後年、挿絵寄稿家の一人と誌上交歓が始まると、妙にこだわりが出て誰一人賛美追従して、まりこの関心を己れの方に惹きつけようとする者がなくなった。

当時僕は写真道楽で、若いくせして艶福感に酔っていたから、当然年上の彼女に挿絵寄稿者ほど熱狂はしていなかった。頭に「眉唾だ」という考えがあったし、「セックス・ドレイ」という和洋混成語にも抵抗があつて、馴染めなかった。彼女の表現が、「スレイプ」となっていたら、奴隷はマゾか……などの疑

問も無視して関心を強めていったと思われる。僕も非常に物事にこだわり安い人間なのだと思う。

K誌が消滅したことで、僕の前稿書きも止まった。でも、まりこのような女性に巡り合いたいと思う気持ちと、女友達をいずればマゾ馴致して、スレイプに仕立てたいとの願望は、立ち消えず燃焼しつづけている。まりこ記述の「心得帖」は、そっくりそのまゝ僕自身が実践させたい（未来の奴隷妻に）教本ともいえるのである。

私を満喫させた

今はなき奇譚クラブ

入社の前から興信所が僕の生活を詮索し、今もなお上司のうるさい目が注がれる生活では、フラストレーションばかりが積りつづけて行く。その結果として、今夜は無礼講だの掛け声で、店長公認のはめはずしの酒宴があったのだが、僕は先輩同輩のように、同じ職場の中で働く女性たちとは口もききたくはないし、チャンスとばかり接近することもしなかった。

職場恋愛は法度という空気ではなく、むしろ、人物信用の上からいって推奨されるムー

ドなのだが、恋愛から結婚となると、きま
て仲人は、店長が受け持つのだ。

僕のように、未来に楽しみをかけている人
間にとっては、その慣習は誠に迷惑なこと
であり、当分は仕事一途を堅持し、そう思
わせておく方が得策なのである。

お節介な先輩が、僕に片想いしているテ
(窓口係)がいるぞと教えてくれ、本人と寄
り添わせようとした。好かれたという情報
は決して悪いものではないが、その女性
は僕好みではないし、到底まりこ「心得帖」
を押しつけて納得させられるタイプではな
かった。

多少、美人であることを鼻にかけ、目立
つことを望むような娘は瘦せぎすな女性
の共通した欠点を持っているように思
えてならない。「へ妻をめとらば才た
けて……」

蛮声があがり、そのかすような、冷
かすような歌声がこだまする中で、僕
はふと北川まりこが作った「芸者ワ
ルツ」の賛歌を思い出した。

(一)あなたに観られて 帯解く夜の
部屋の灯りの なやましき
生れたままの 裸に剥がれ
今夜のお仕置 どんなに辛い



(六)乳房に喰い込む
荒縄受けて
ハダにや無数の
ムチのあと

あたしの躰は
あなたのものよ
もっと虐めて

お好きなように
僕はこの賛歌を、大
学の写真同好会のコン
パの席で、Hプロから
来たモデルの余興で聴

いた。モデルが口でまかせに歌ったものと思
っていたから、スゴイ女だな、コイツは……
と感嘆したわけだが、後になって手に入れた
KK誌に歌詞が掲載されてあったのを知って
コンパの席で歌ったモデルはKK誌の読者で
あったのかと思ひ当たると、つり落した魚の
ように無念さが湧いた。

そのモデルは、僕の好みに合致していたし、
彼女も僕に天衣無縫な肢体をさらして含羞む
ところがあった、SM好奇心を告白してい
たら、彼女は今頃僕の飼育に甘んじて従って
いたかもしれないのである。

北川まりこの賛歌は、奇譚クラブ七二年度
五月号に所載されている。そして同号には僕
の好みを具体的に示すには都合のいい、鈴木
千鶴子というショーダンサーの緊縛記の写
真がある。

古い話はやめにしよう。今年こそは好運な
年であるようにと祈り、張り切っているの
から、その張り切りの狙いを語りたい。

がんにがらめの社会 の中で拡大する妄想

今の僕は、社宅暮らしである。建物は三階
建てのマンション風で、与えられた部屋は二

DK。早く身を固めて社のためにも腰を据えて働いてくれといわんばかりの厚遇なのだ。

独身者は僕一人で、居心地の方は極めて悪い。僕の考えでは、女友達が出来たといえる時がきたら、社宅は出て手狭でも民間アパートに転居しようと思う。そうでもしなければマゾ馴致から始まる恋人飼育、奴隷妻への調教は果し得ないと思うのだ。

僕の兄は見合い結婚をした。義姉は良家育ちで美人である。春になると二世誕生で、二人の仲睦じさは益々模範的に見えてくるであろう。そこへゆくと僕はダメ男で、お前の好きなようにするがいいといわんばかりに親は見合い話を持ってきてはくれない。年が若いせいもあるが、学生時代の早熟と思われるような言動がたたって、見放されているわけでもある。

僕は最終目標を「奴隷妻」に置いて、結婚相手をこの広い世の中、多くの女性の中から選び出すつもりだが、外観では全く妻の境遇は判らないようにしなければならぬと考えられている。義姉妹が並んだ時、僕の妻の方がみじめだったらしく見劣りがするようではいけないのである。むしろ、立居振舞い言動のすべてに優れているように仕立てたいのだ。

僕の母は旧制の女学校を出ると直ぐ見合いさせられ、一年間の婚約期間を置いて挙式した戦前型の名残りのような結婚方式だった。そうした母の口から、女子高校生の無軌道ぶりがマスコミの報道で伝わりと烈しく批判する言葉がきかれ、僕は「自分のことは棚に上げて性道德の退廃論は空々しい」と皮肉ったものである。

現在の女子高生が性的関心が強いと年配者が云うのはナンセンスである。母は結婚してから当然夫婦間の性結合はあり、それが正常だと云うつもりなのだが、年からいえば彼女らと何ら変りがない。

僕は意識的に母へ当てつけがましく高校在学中の女生徒を恋人選びの対象にするつもりなのだ。従って補足的な話になるが、職場では相手がいないと断言した意味と、片想いの女性に見向きしなかった理由も分っていただけだと思う。OLになって、自分の手にした給料から、服だ、化粧品だとショッピングする楽しみを味わった女性は、もう臺が立った女なのだ。

僕は服務規定で、アルバイトが禁じられていなかったら、女子高生お目当ての家庭教師をかけもちでしていることだろう。大学入試

で詰め込んだ学力は、まだまだ応用がきくしその希みがあるから、時折り書店で各種教材を眺めたり、時として参考書選びの高校生に言葉をかけることもある。

だが、残念なことには、容姿の点でこれらと思う女生徒には行き当たらないのだ。仮りにいたとしても襟に社章をつけていては、喫茶店へ連れて行くことも出来ない。

僕は一時、帰宅して着換えてから、ガール、トが目的で社宅を出たことがあった。驚いたことに、目的までは知らなかったが、夜歩きしたことが上司からの注意となってあらわれ社宅に住む連中のくちさがなさを悟った。つまり謹厳実直が強要され、私生活まで息を詰らせて過ぎねばならない組織構成なのだ。その中で益々僕の理想は拡大するばかりである。

願望と女性感が 具体的になった処で

僕は、北川まりこ自体に惚れているのではない。嘘か真か判らないが、その筆者は空想力が豊富であることには間違いないし、活字となったものに惹かれたのである。

真実、体験したことを書いているのである

なら、むしろ僕は奴隷所有者の人に手紙を送り、後学のため生活を参観させていただきたいと思う。

話は少しそれるが、KK誌には真面目な顔をして珍談妙案を話す人がいて面白かった。奴隷妻願望の笠井奈保子などは、僕がもっと説得力のある文章を綴ることができていたら



投稿して関心を引き寄せることが可能ではなかったかと思う相手の一人である。勿論これは今にして思う自惚れで、当時は「奴隷妻への憧れ」がクルリクルリと論旨を変えてしまいう気まぐれに苦笑して、ただ、北川まりこより写真が載って僕の夢を刺激してくれた度合いが多く、僕の近くにいてくれたらいいなと思った女だ。

二人とも僕より年上の人であり、やはり切実に手に入れた異性ではない。僕は父母の年の開きが、そのまま理想のように考えられるせいか、女性は五六年下の方がいいのだし、そう思うことでいつも見送り諦めることにしている。僕の周囲に順応していかなければならない生活が生んだ諦めの技法かもしれないが。

こうした日々の暮らしの中で、細々とあたりに用心しながらSM誌の購入によって未来生活を夢見ている僕が、会ってみたい、場合によっては高校生年代の女性を照準にしていることを捨ててもいい、と思った女性が出現した。具体的に挙げるなら、SMセレクト誌七六年度九月号の「美樹は真性マゾです」(グラビア頁)の女性である。

表題の惹句につられて、彼女を本物だと信

じ込んではおられないのかも知れないが、どうやらこうやらセレクト誌がSMマニア向きの体裁が整ってきたところでの「素人娘の登場」で、僕はすっかり気をよくしたのだ。

同誌の編集後記には、「久し振りに本物に出会えた喜びに酔った」とあり、あながち作り話ではなさそうだ。といって、僕はファンレターまがいのものを、彼女に送ったわけではない。それはこれからしてみたい事なのである。

彼女は「SM誌を愛読するうちに倒錯した性への憧れが欲望と変り、マゾ女としての自分を知った」そうである。自分の性願望を告白できる女性は稀有であり貴重である。

年令二十三。写真で見ると限りではプロポーションもよし、顔もくせがなく悪くはない。さて、僕の願望と最近の好みが具体的に変わったところで、僕は抱負語りのピッチをあげたいと思う。

今こそは、よき素

材発掘に邁進？

僕は、被虐性の誘発という点では縄による緊縛は認めるが、緊縛させたからといって相手をマゾっ気があったとか、マゾであると断

定する人士の言は信じない。むしろ笑止である。

また、相手の自由を奪っておきながら、性感帯を刺激し、正常な肉体感覚を持っている人なら誰でも性感が昂進する鋭敏な個所をぬたくって、反応現象から被虐悦楽に溺れていったとかどうか云う手合いも、程度の知れた人間である。

僕が調教したいと思う相手に巡り合ったなら、縄やバイブレーターなどの小道具は一切使わず、知覚面から性愛を理解させて行き、稟性をさぐり当てることを第一義に置く。はつきりと性志向が云える女性なら、その好みにあわせることはあるだろうが、それで堪能させてやることはしないだろう。してしまえばサービスになってしまう。

どちらが前後するかは決め兼ねるが、調教作業の第二は、出合いまでの一切を知るため相手の記憶が払底するまで聴き出す。言い淀むことがあれば、制裁を加えて過去の全貌は掌握してしまいたい。併せて趣味も特技も無視して、今、僕のために僕の顔前に出現したばかりの素材に還って貰うのである。

恋愛も結婚も損得勘定で始まる世の中のとだ。打算が少しでも動いた心で、僕を見て

欲しくはないのだ。特に、奴隷妻と表現は悪いが、美辞麗句に換えれば永遠の伴侶の獲得に奔走するのが本音なのだから、僕の野望を成就させてくれる女性ではないとならない。

無論、女性側だけに鑄造を強要するのではない。僕自身が人後に落ちることのないように努めることが必要で、それなくしては臆面もなく理想は語れない。

北川夫妻は「花と蛇」という小説に影響されて、加虐・被虐の悦楽生活を選ぶようになったとのことだが、僕は天邪鬼で団鬼六の小説は読んだためしがないのである。だからS M雑誌の一部を除き、始末する気になったし手放せた。僕は虚構より実績を重んじる方なのだ。実績と云っても、多かれ少なかれ他人の創意工夫に影響され煽動にのったものであろうが、勇を鼓して独自の愉悅を開発した人々には、若輩から見ても敬意を払う。

調教作業の第三は、ただ慢然と生きて行く女にさせないため、規律ある生活にならさせることである。

家庭生活に入ると、大抵の女性はなりふりかまわない「主婦」に墮落して行く。これは男にとって幻滅な筈。僕は同じ轍をふませない。若さを保つ美容法、美容体操も、若さを

失いかけてから始めるのでは遅い。僕との密着した生活に入った時点から、トレーニングとして連日一定時刻に一定時間、それをさせるのだ。

引合いに出したセレクト誌上の美樹にしても笠井奈保子にしても、プロポーションは良いと云っても抜群なわけではない。胴がくびれ腰がパンと張り、乳房はもっと豊隆であって欲しいから、トレーニングはかなり厳しいものにしなければならぬだろう。

「セックス・ドレイマリー」が、日常全裸で過させられるのとは、僕の夢想では大きく差異がある。

发育途上のミドルティーンや、ハイティーンはどう変って行くか想像がつかないが、ウエストニッパでウエストを思いきって締め上げ、バスト・マッサージを慣行にすれば、かなり理想に近い体型が出来上って行くのではなかろうか。ペッティングは女らしさを磨く全身美容面にも顕著な効果があるそうなので、僕は愛撫もトレーニングの科目の一つとして掌で撫ぜまわしたいと思っている。

唐突な結論になるが、今年こそはよき素材の発掘に邁進するつもりだし、新しいカメラは、その記録用の専用機なのである。

スパークする愉しみ ■

夢のある夜の生活

師走の風は冷たい。朝夕ともなると、めっきりと肌をうつつ空気の寒さに、思わず首をすくめてしまう。



岡 淳

師走の風は冷たい。朝夕ともなると、めっきりと肌をうつつ空気の寒さに、思わず首をすくめてしまう。

(仕方がない……冬なんだから……)

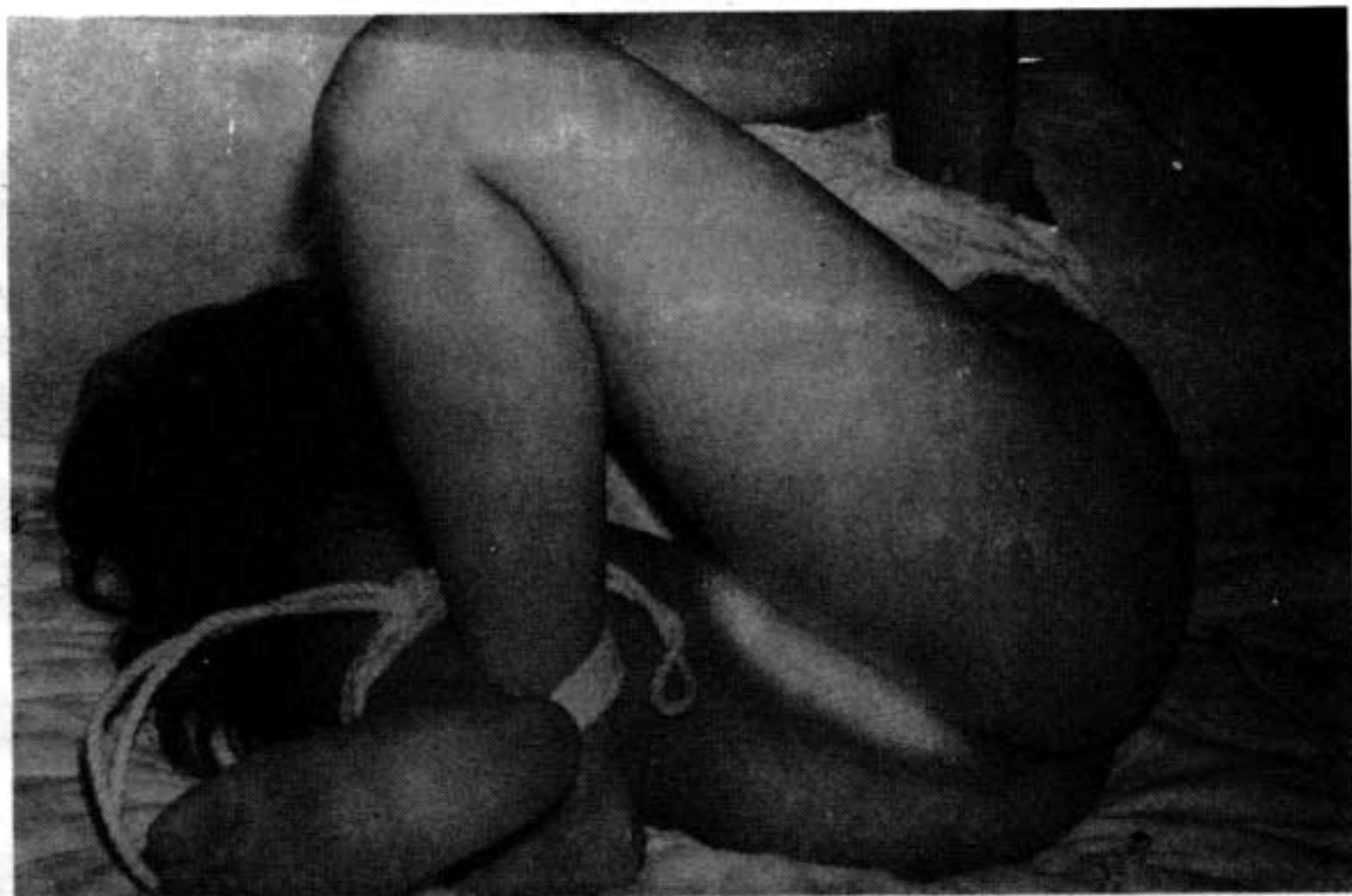
そう思っても、やりきれない毎日だ。

人間とはせいぜい沢なものだと思ふ。夏になれば夏になるで暑さをうらみ、冬になると毎日が陰うつになってしまう。

(とにも角にも年末……もっとも、これが活字になって店頭を飾る頃には、年も明けて初春と言われるのだから、おかしいものである……)

“もう幾つ寝るとお正月……”

子供の歓声がかすかに聞えてくる。街中で



編集長から矢の催促で、原稿原稿って言われ続けている。電話が鳴る度に、命の縮む思いがするのは、何も一流作家ばかりではないと、近頃気付いた。

第一、テーマが考えられない。売れている作家だったら、でレインも多いだろうし、必ずテーマの三つや四つは持ち合せているだろう。しかるに……しかるにだ！私の場合は必ずしも作家と言えない男である。

作家のはしくれと言った方がいゝだろう。と言うのは、雑文も物にして食べてはいけず従って、他の職業を持っている身では、仲々書くと言った作業に取り掛かる前に考えこんでしまう。

あ、そうだ。また長々とやっちまった。テーマ、テーマ、えーと何だったっけ……？そうそう寝ること……帰ることだったっけな……よし、これできまりだ。

「SMと寝室に於ける相関関係について」

こりゃあ硬すぎるな。しからば、

「SMと睡眠状態以前の考え方」

面白くもおかしくもない。

「ベッドルームとSM……」

そうだ、これでいってみようか。

(ようし、色々と……)

今までの習慣を

捨てることから……

寝室、ベッドルーム……なにかピンク色のほのかなぐわいのある言葉である。

でも、住宅ブームになる前には、それこそ屋根があればいいといった時代があり、哀れな人になると、六帖ひと間に家族五人、なんて場合があったし、良い場合でも、個室といったものはなく、すべての部屋が共通に使われていた。

白く、客室食堂兼、応接間ダイニングルーム兼用。

そんな状態では、寝室と言っても、ただ寝ればいいと言った考えが多く、夫婦の隣りに子供が居たり、お姑さんと同室で寝ていたりする。

これでは甘いムードも屁ったくれもない。

たゞ単に寝るだけでは、夜の秘め事もなくなくなってしまうし、気兼ねだけが先走ってしまう。ところが住宅事情が一変して、最低単位が3DKぐらいになってきて、かなりの柔軟性を帯びてきた。

夫婦だけの部屋を考え、ピンクムードの部

は「ジングルベル」が鳴りひびき、別に年が変ると言ったところで、何の変化もみられない筈なのだけど……
(本当に、あと幾つで正月かなあ……)
幾つ寝たら……そうそう、これでいこう。

屋造りに熱中する。

何もピンクムードは若夫婦だけに限ったことではない。そこで、様々な考え方が始まってきたのである。

まず、ベッド購入が非常に多くなった。○ベッド、△△ベッドとあり、シングル、ダブルと、色々とカラフルになってきた。

ともすると、部屋一杯になってしまいうダブルベッドを入れると、文字通り身動きも出来ない場合も多い。

余裕を持った方がいいと思うのだが……。

永い間習慣づけられていた畳生活から、いきなりベッド生活に入ると、大抵の人は戸迷いを感じるらしい。ひどい人になると、よくベッドから転げ落ちるそうで、仕方なく床の部分に別布団を敷いておくのだそうだ。

これでは何のためにベッドにしたのが理解に苦しむ。中には、日曜大工でベッドに柵を取りつける人もいて、おかしいことこの上ない。

そうして、今度はいざ夫婦生活となると、更に布団で慣れていた体位が、まるで勝手が違ってくるのだ。

ご存知のように、ベッドにはスプリングが入っている。そのために、妙な体位だと、結

合がはずれてしまうので、中には、頭にきてベッドを処分してしまったりする。

“日本人は、矢張り日本間さ”

などと言う輩は、得てしてコリた人間が多くなるものである。

ある建築業者の友人から訊いたところでは、寝室を洋間にしておいたが、何だかシックリこないの……と言って、日本間に改造する人が多いそうである。

大体に於て、人とは工夫をしない動物だと思ふ。一寸した創意工夫で、より楽しい思いも自由になる筈なのだから……。

倦怠期を鬼ゴツコ

で吹飛ばそう

よくこの頃言われている事だが、夫婦生活つまり寝室にSMプレイを持ちこんだらと言う提案がある。

結婚生活も三年ばかり過ぎると、いわゆる“ケンタイ期”がやってくる。そこで、その“ケンタイ期”に対処するために、様々な工夫を盛り入れた中に、SMゲームと言う訳であろう。

週間誌等では、強姦ゴツコも楽しからずや

と言っているが、これは、まかり間違うとえらい事になるし、夫婦だけのくらしなら良いが、大家族では珍妙なことになるってしまう。そこで、この際、個室である寝室での強姦ゲームについて考えてみよう。

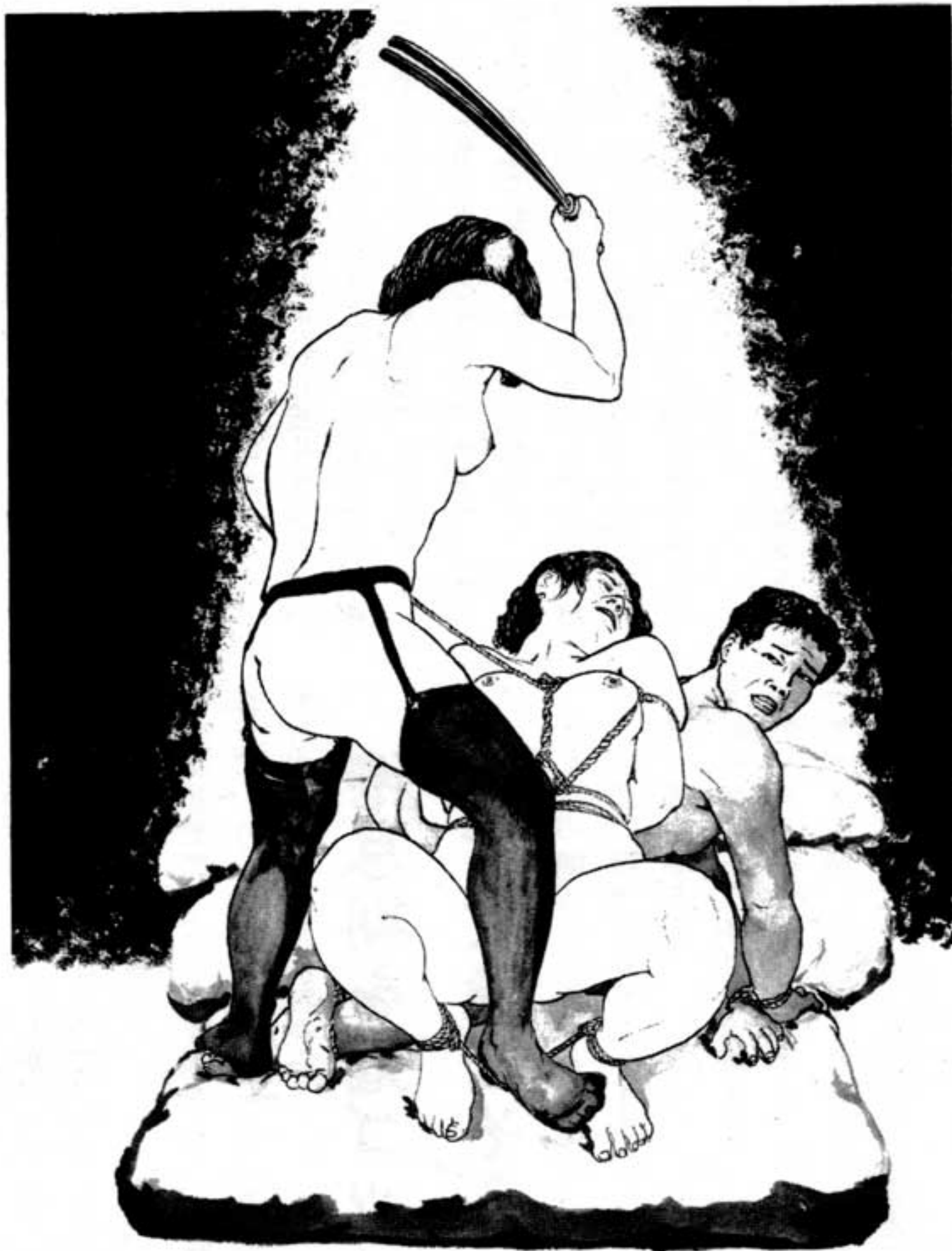
当然なれ合いではあるが、やっているうちに妙な気になってくることは確かであろう。また、狭い室内であるから、やり難いこともあろうが、そこはそこ、一寸したアブノーマルな気分を味わうのも一興であると思われる。まず、強姦ゲームであるから、夫側が当然の事攻め側に廻る。従って妻の方は逃げる立場である。

たゞし、夫婦二人だけの場合と異って、一応家族がいる場合には、まず音に対しての注意が必要となってくる。つまり終始無言で行うことを条件とする。

まあ夫婦関係の行為に移行した場合には、仕方がないことであるが、襲う場合にはすべて無言で行う。襲われる妻にしても、無言で逃げまわる。

動きは鬼ゴツコよろしく素早いものになるが、あまり物音はたてないように留意する。

次に、出来るならば、棄ててしまいう筈の下着類とか、ブラウス、スカートの類を着用



しておく。

さあて、いちにのさんで開始する。追う、逃げる。逃げる追いつくのゲームが始まる。追う側も逃げる方も、時間がたつにつれて、奇妙に真剣になってくる筈だ。

やがて、捕まえた方は、相手を押えつけておいて、なるべく乱暴に衣服を手で破ってゆくのだ。

入用ではないと解っていても、交錯した気持の中では、共に生々しい被虐感を味わう。

する方の立場もそうであって、破かい行為の楽しさを充分に味わえ、次々に無惨な恰好になってゆく相手を見ると、不思議な興奮に襲われること必条である。

まして、女性の場合だと、無理矢理に剥がされることは、最大限の羞恥を感じる筈だしそれが破られる衣類となってくると、名状しがたい屈辱から倒錯的な気になってくる。

見なれた姿態でも、無理に破いていって段々と露わになってくる肌を見ていると、別な感激を生んでこようというものだ。

強姦願望は、男性女性ともに深い心の中にはあるそうである。こんな莫迦莫迦しい……と言ったらそれまでである。

あくまでもゲームとして、より荒々しくやったならば、変った悦びも湧いてこようし、「ケンタイ期」もどこかへ、ふっ飛んでしまふことだと考えられる。

ここで一言。

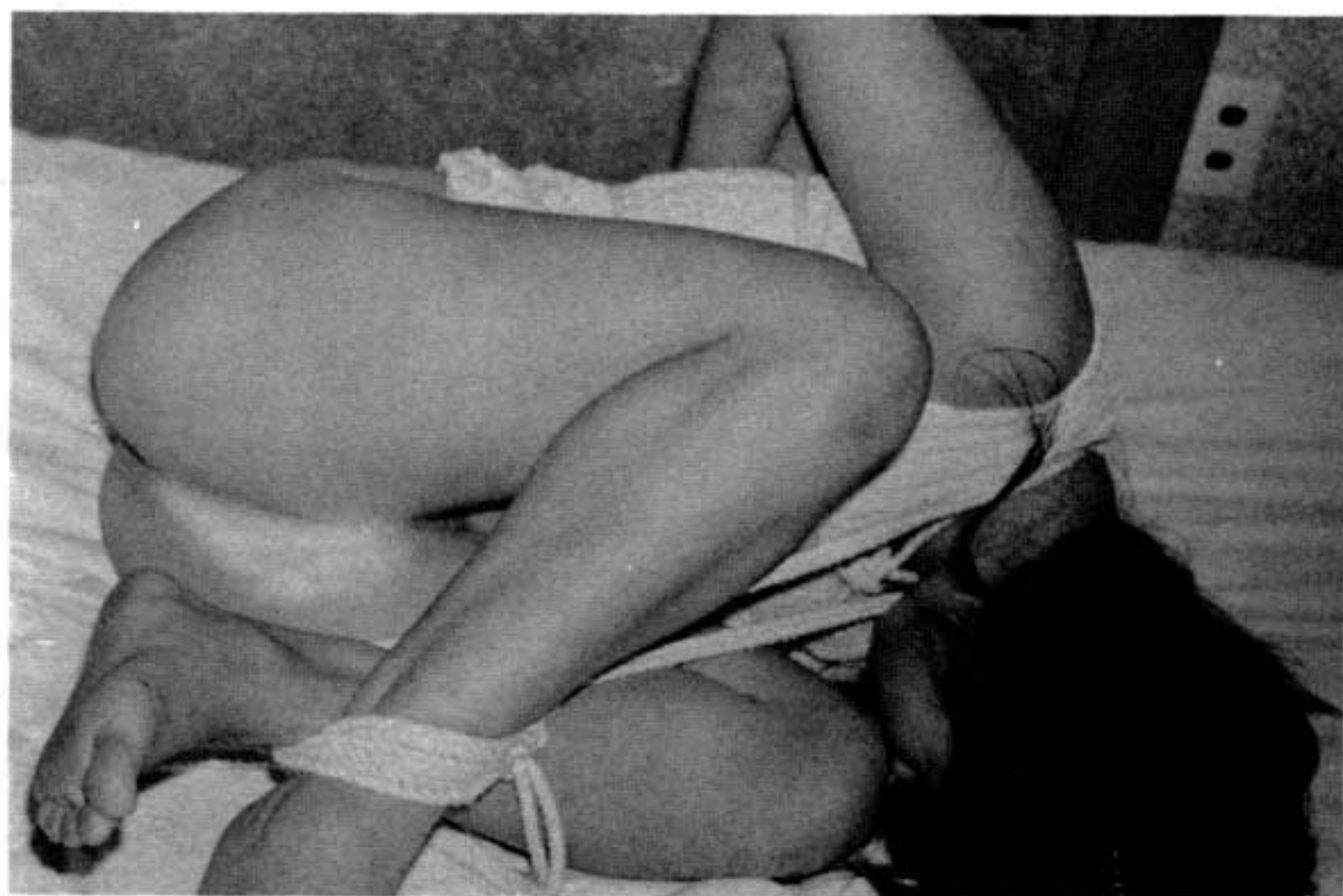
だからといって、このゲームはあくまでも寢室の中だけとすること。

この遊びがおもしろくなって、出張して他の相手を襲うと、これは犯罪になってしまうから……。

木刀二本で道具

が作れる

寝室に於けるSMゲームのおすゝめ………と書くと、何やら固苦しいが、要するに人生



を楽しく送るために、欲望の中の性欲を満足させようと言うのであるから、そうつきつめないで読んでいただきたい。

SMプレイ・イコール縄と大体の相場がきまっているけれども、これはあくまでも日本人の感覚であって、何も縄だけではないことは薄々さとしていたる人も多いことを思う。

でも、外国風のもものは、舞台装置が大袈裟で、いわゆる手のかかった写真等が雑誌に出ているが、あれを見ていたら、ただおじ気をふるってしまうのがオチであろう。

家庭の中に、あの様な大道具は、まずスペースから言っても無理だし、大体あの様な道具は販売はしていない。だからと言って、自分で造るとなると、面倒臭いし、大げさすぎて二の足を踏んでしまう。

そこで二、三小道具について考えてみた。スポーツ専門店にゆくと、剣道具として木刀を売っている。あれは、カシの木を使ってあるので非常に丈夫だ。

一本では、少し足りないので二本買ってくる。そうして、先端の刀渡りの部分を、ノコギリで切り落してしまう。切った部分はヤスリなどで綺麗にケバを取っておく。

もう一本の木刀の方は、柄の部分を二・三

十センチの長さに切り落す。つまり長短二本の棒にしてしまう訳である。

次に、長い方の棒の中央に、ノコギリとヤスリで切りこみを入れ、短い方の棒はその溝にはまるように細工を施す。

長い棒に直角に当たるようにして重ね合わせ、ドリルで穴をあけてしまう。そのあけた穴は、ビスナットで締めるのであるから、あらかじめ適度の穴をあけておく。

あとは木工用のボンドと、ビスナットを使い長短二本の棒をT字型に留めてしまう。短い方の棒に、ドリルで先端、つまりT字の下の個所に少し大き目の穴をあけておく。これで出来上りとなる。

使い方としては、まず両手を縛っておき、このT字型の器具の太目の穴には、なるべく太目の縄——毛糸であんだ紐とか、兵庫帯の使えなくなったもの——を通してにおいて、T字の横棒の部分を両膝の裏側にあてがっておき、短い縄または兵庫帯の棒の所を、首に近づけて縛ってしまうわけである。

こうすると、被縛者は嫌応なしに屈曲位にされてしまうので、様々なプレイに移行出来るよう。

別にT字型器具を作るに当って、何の材料



を使っただけでよい訳であるが、意外と強度が必要なため折れてしまう場合が考えられる。それに、仕上げるにしても、角材を使った場合角の部分は当然のことけずり落して丸みを帯びさせねばならぬ手間が入用になってくるわ

けである、であるために、私は木刀を利用する事をおすすめする次第である。被縛側にしても、膝の裏側に当たる木刀は、綺麗に仕上げられているので決して痛みは感じない筈であるし、それでいて、かな

りの長さがあるために、はずそうとしても、そのためには、より大きく下肢を広げなければ、その姿勢から開放されない。

また、膝と木刀を結びつければ、自由に開肢状態にする事が出来るから、様々に変化させる悦びも湧くというものだ。そして、次には、T字型を利用して、ハリツケ型に両手を固定した場合には、短かい部分の棒を足に結びつけることに依り、色々と変化する。身体を前に倒したポーズの固定、後にそらせたポーズ、海老責め型にも出来る。

手作りの味で

楽しむのが一番

こうした小っぱけな器具ならば、ベッドルームには簡単に置けるから便利である。

まだアイディアはある。

これは聞くとところでは、中国あたりで開発されたらしく……杖といった名があるそうであるが、結構面白い。

一七〇センチぐらいの竹の棒を二本用意する。太さは適当なものでよい。それを夫々の先端の個所に穴をあけて紐を通しておくだけでいいわけである。

つまり、両手を広げさせて固定する……一本の竹に……。もう一本は、膝の裏側でも足首でもかまわない。ともかく、下肢を広げて固定させるのが基本である。

屈曲させて、各々の竹を結びつければ、開肢屈曲の凄まじいポーズが出来る。竹と竹の間の調節によっては、這い姿の鞭打ちポーズも出来るし、俯向けにすると愛情行為に即移行出来ることになる。工夫の仕方ひとつで、誰でも楽しめる。

ベッドの場合、四隅の個所から引き出し式に紐を出しておけば、大の字型の緊縛の裏表のポーズが出来るし、右手右足、左手左足を縛って頭の方へ左右に結べば、矢張り屈曲位の姿態が出来る。

竹と四隅の紐を利用すると、鞭打ちの理想的なポーズが出来るわけである。

竹と四隅の紐を

利用すると……

外国物のSM雑誌を見ると、実に様々の大道具が出てくる。それ用に造ったらしく、実に凄まじい出来上りだ。頑丈な角材を縦横に駆使しており、様々の鉄輪や皮製品が取り付

けられてある。

その金具の使い方を变化させた写真が頁を飾っており、あなる程といった点が感心させられる。

モデルもプロポーションの見事な女性ばかりで、けっして見あきることがないが、こういった道具を考えると、実現不可能をさとり、まずそれだけで尻ごみしてしまう。

一部マニアの人の中には、それ相応の装置をととのえて、楽しんでいる人もいるそうだが、聞き伝えだけでお目に掛かれる機会は現在まで全然私にはない。

しかし、道具ばかりを考えても実現不可能だとあきらめざるを得ないので、それならばと、大道具から小道具に変えることを提案したくなった次第である。

ハリツケ台にしても、まるで大がかりだし木馬にしたところで自分で造るとなると、日曜大工の得意な人は別として、不得手な人では、考えたただけであきらめざるを得ない。

前記方法ならば、手軽に造る事は可能だし、ベッドから紐を取り出すのはたやすく出来る筈だ。

また、仮に、手先が器用な人の場合でも、造る物が物だけに、後めたい気になる場合

が多く、一寸庭先で……といった具合には仲々いかない。

少し話題がはずれるが、私の友人でSMプレイ用の器具を造る人がいて、秘密裡に道具造りをして運びこんで呉れる人がいる。

費用の点では、物が物だけに普通の人では買うわけにはいかないけれど、結構満足出来るそうである。家屋そのものをSM用に造ったものを販売しているそうで、もし興味を持ち欲しい方が居られたらお取り次ぎはする。

蛇足で申し訳ないが、単に秘めやかに自分達夫婦だけで楽しみたい場合には、大がかりにする事は出来ないの、金に糸目をつけない人は別として、小道具を考えたり、あり合せの物を利用することによって、楽しみを倍加するようにすすめる次第である。

棒一本、竹一本で様々のバリエーションが楽しめる訳であるから、十年一日の如くきまったパターンから逃れて、少しカラから出てみたらどうだろうと考えるのだ。

日本家屋の寝室であつたら、天井を開けてしまつてハリを利用する事を考えれば、吊りプレイも楽しめる事が出来る。

たゞ、こうした事をした場合には、決して他人を寝室に導くことが出来ない難点が出て

くる。その点、寝室と言っても、日本家屋の場合には色々とむずかしい問題がある。

S M趣味の人々の多くは、自分の性癖を他人に隠したい気があるために、あらゆる事に気を配るため、道具作りひとつにしても他人の目を必要以上におそれてしまう。

で、あるから、なるべくはありあわせの小物利用で色々としむべきだと思う。

小物一つでも使い方

によつては

私の友人で多貫欣と言う男がいる。実にアイデア豊富な人で、あらゆる物を利用するのが実にたくみである。

極端な言い方をすれば、彼にかかると何でも責め具になってしまうし、こんな物が……と思われる物が即座に利用価値を産んでしまう。

ある雑誌に「タヌキンのアイデア……」と銘うって、様々の器具のアイデアをしている。それらのひとつひとつが、実にコッテいるので彼のファンが結構いるらしい。

その彼が言っていたことだが、日本人と言わず、一般の人達に言える事だが、工夫が足

りないと言っていた。

一寸、扱い方を変えるだけで色々とバリエーションがある訳で、何とか工夫をもってすれば、思考転換ひとつでどうとでも変った方式が出てくるのである。

かく言う私とて、縄ひと筋で来た男であり多貫氏との出会いで、かなりの刺激を受けた次第である。

言われてみて、考えてみると、成程小物ひとつでも使い方色々面白ことが考えられる。

寝室に於ける夫婦生活での話題も、彼からのヒントがあつての事で、完全に自分のアイデアではないけれども、同じくS M志向の人のために、よりよいS M趣味を満足させたいと思うために書いたわけである。

寝室を豊かにする事は、住宅ブームから始まり、室内をピンクムードにしたり、インテリアにコッたりしている。そうして夫婦生活に変化を与えていたのだが、矢張り倦怠期ともなると、すべてがマンネリ化しているように思えてくるものである。

そこで、強姦ゲームでもS Mゲームでも、することに依り、また真新らしさを発見出来る筈である。

創意工夫でいくらでも楽しめる

世の移り変りと共に、すべての生活様式は変っていった。秘めやかであるべき夫婦生活も、白昼下にさらされる事はないまでも、明治・大正・昭和の初期に比べて、いちぢるしい変遷を示している。

性の開放……は、陰湿な行為感から、享楽の手段としてエスカレートの一途をたどり始めている。あらゆる雑誌類も、性の満足度について記しはじめ、単なる生殖行為と考えられ、男性本位であった性に関する思考は、男女平等に取り扱われ始めていた。

そして、それが段々と普遍化していくにつれ、楽しみ方も、視覚面感覚面、そうして医学面と様々と発展していった。

もはや、セックス面に於ては行き着くところまで行った様相を呈している。

そこで、更にエスカレートし、行為に到るプロセス面にまで延びていったのである。

「如何にして性生活を豊かにするか」と考えた結果、そこに出て来たのがS M的な思考だと思われる。



つまり、元来人間にそなわっている能動、他動の思考、ひいては征服、被征服……そしてサディスティック、マゾヒスティックなる考え方並びに行動が発芽を始めた。

人間本来にそなわっているとは言え、従来では、アブノーマルな事象として片づけられ

ていたものが、次々に移りゆく時代の変化と共に取り入れられていったと考えられる。

もはや、性生活は、ひっそりとした行為と考えられていた時代は過ぎて、色々な小道具、雰囲気をともしなう必要性に迫られて来た模様である。

そのひとつの方法として、SMチックな遊びを取り入れた場合、背徳感云々は度外視して、大いに人生の一断面である夫婦生活を享受出来るのではあるまいか。

それには、家の中に転がっている様々なものを大いに創意工夫をこらして使ってみるべきだと思ふ次第である。

ふと思ひ出したので、ここに記すが、これはある雑誌でだいぶ以前に読んだ中での記事であるが、ある夫婦がいて、セックス生活というものを大事に考えていたそうである。

夫の方は普通の体形だったが、妻の方が結婚後、いつとはなしに肥りはじめ、何年かのちには、いわゆる肥満体になってしまったそうである。

それまでは、かなりのラーゲを実行していた夫婦だったけれども、完全肥満体になってしまうと、ラーゲも以前の様に自由にこなせなくなってしまう、大分悩んだらしい。

恋愛結婚であったその夫婦は、色々考えたあげく、小道具を利用するに到ったと書いてあった。

その中で、体験記として非常に興味をひいたのが、寝室に色々な設備をととのえたものの紹介があった。

肥満体になってしまったため、彼らの満足感を充たす屈曲位が、妻の方が苦しがるので出来なくなつて、二人して色々考えた末、ベッドの上にブランコ状のものを天井から吊り下げたのである。

滑車かなにかを旨く利用するようになつていて、妻が両足をそのブランコにかけると、ちょうど鉄棒体操の様な体位になる。夫が妻かが縄の一端を引くことにより、ブランコは意のままに上下運動が出来るわけである。

こうすると、心理的にも肉体的にも新鮮な気分が味わえたと結んであった。

現代は文明の世の中である……というといふ大げさであるが、生活様式も変化のめまぐるしい今日この頃、ひとつ、セックスに対する視界も大きく拡大されてはどうだろう。そのように考えている。

SUN&MOON通信欄

創刊に期待する!!

「衝撃」とはこういうものか
ということを味わいました。た
だただ驚いています。でもそれ
がまたたく間に喜びにとって代
わり、雑感にしろ報告にしろ、

これから発表の場ができるわけ
ですから大いにお薦めに従って
纏めて行きたいと考えています。
盛んに三十年の歴史（実績）
を吹聴していたKK誌が枯死し

次号予告

吊責め、鞭打ちの
拷問プレー実験記



灼熱の間に熱風が渦巻いた!!
葛西六郎

佗しい想い
をしていた
わけですが
悦楽を啓蒙
された人々
は依然健在
の筈ですし
新雑誌を手
にすれば飢
餓をいやす

思いで支援の情が湧いてくるこ
とが予想されます。それは小生
の期待でもあります。

SMはインモラルなものだと
悩むことのない「語らいの場」
が再現することは、砂漠のよう
な生活環境の中のオアシスとな
るでしょう。弱々しい男たちに
は「活」を入れてやりましょう

一筆啓上

創刊に寄せて

御創刊おめでとうございます。
お便りいただいて、本当にわ
がことのように嬉しく思い、楽
しみにしています。
第一、雑誌の題名がいいじゃ
ないですか。

……鼻柱だけ強くなった女たち
には「寛」を叩き込んでやろう
ではありませんか。寡（かん
か）孤独な人間に対して御誌が
光明となるよう希求して止みま
せん。

新しい年の発奮の成果を後刻
お送り致します。お待ち下さい

岡山市 徳永 恵司

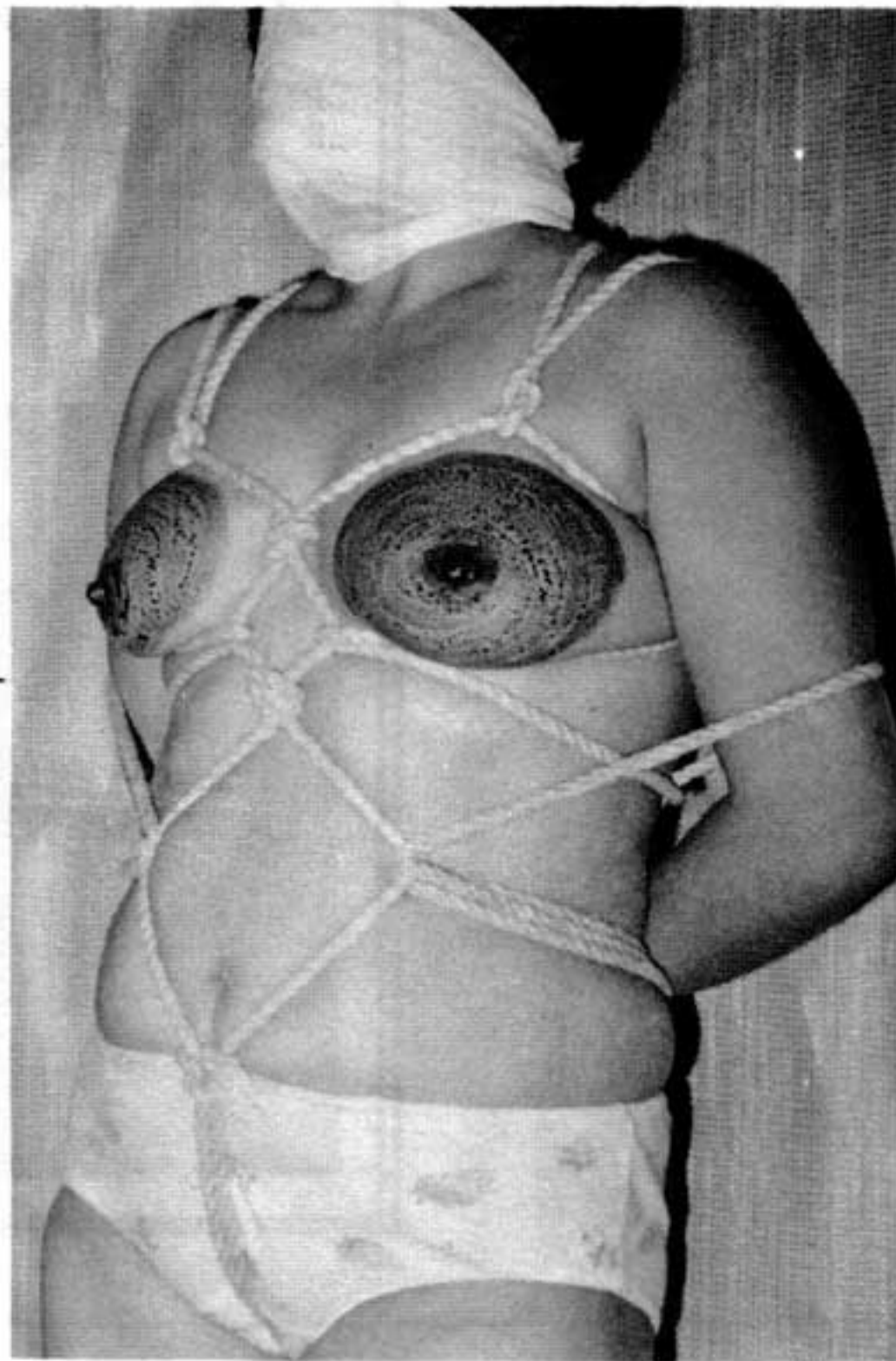
SMを話すのに十年ぐらい前ま
ではヒソヒソ喋らなくてはなら
なかったのが、今では半ば公然
と自分の好みのものとして人の
前でも話ができ、時と場合によ
っては、面白い人だと思われ意

気投合することすらあるようになりましたが、やたら目につく「SM×××」などの標題の雑誌は買うことにも抵抗を感じ、書棚に並べて楽しむことになりません。そこへ行くと、今度の新企画の雑誌は、ひょっとすると婦人も気安く買えて、家庭生活の中にとけ込んで行くようになる気がします。

それに、第二は嗜虐小説がないという点も私は絶賛します。欧米のポルノ解禁は、性犯罪激減に役立ったそうですが、日本ではかえってタガをはめられている中で、卑わい・露骨な表現がエスカレートし、それらが好奇心を矢鱈に刺激しているように思われてなりません。他の文芸では食って行けそうにないかと、安易な創作態度で羞恥文学とやらの分野に群らった人々の単調な作品が掲載されないということとは、まさしく画期的であり邪魔がないという救われ

た思いになります。

たとえばいうなら、貴殿は「奇ク」誌のサロン頁と読者通信を一冊の雑誌にするようなものだとご親書に書いてご説明く



ださいましたが、全くその計画は私の楽しみに一致して将来が明るくなった気分です。

欲をいえば、「SM研究会」あるいは「懇親会」というような組織作りも始めていただきたいと思っています。日本列島の中心

でもある様々な人が全人口の1割以上も住む東京で、そうした集りがあることになれば、私の如き地方に住む愛好者は、一度は東京見物したいものと思って

いますから、あらゆる都合をつけて出掛けて行くことになるでしょう。是非ご検討いただいて、早急なご報告を誌上なりとご発表ください。

さて、私どもの近況は、進展もなく退歩もないという平凡な

暮らしぶり、家内相手のSMプレイ記録も、たまさかやってみるかと思重になってしまった体に掛け声かけて動き出す始末。思わず年だなあとつぶやきがもれます。年のせいばかりではなく、発奮する動機がなくなったからとも思いますが、お便りいただいたのを幸い、早速久しぶりに撮影した写真を同封致しましたので、ご覧の上誌上发表はおまかせします。

いつの頃だったか忘れましたが、「奇ク誌」に「黒い乳房」と題するM女呼びかけの文があり、その時以来家内の乳房を真っ黒に染めてみようという考えはあったのですが今回その試みを敢行したわけです。でも子供の習字用墨汁では皮膚の脂に反撥され、ムラ塗りになってしまい、私のイメージは完全に活きてきませんでした。次回は油性の塗料か即乾性のラッカー・スプレーなどでやってみようと

考えています。"黒い乳房"に
白いクリップなどの乳首を挟む
責めを加えたら、少しは視覚効
果が出てくるものと思います。
貴誌の性格を考慮において、
私なりの特写協力なので、パン
ティを穿いたままの股間縛りで
すが、その下がどうなっている
かは私をよくご存知な筈の貴殿
はご想像いただけるものと思
います。

来春は長女が高校に進みます
ので、妙な素振りや気付かれな
いように、夫婦の愉しみも自重
してゆかなければなりません、
その範囲での映像工夫は今後も
お届けしたいと考えています。
なにはともあれ、貴誌の充実
と発表を祈願申し上げて、創刊
を祝賀するご挨拶といたします。

室蘭・村井 幹雄

グループ紹介 『立体写真愛好会』



本誌「秘蔵悦虐写真集」にも
快く写真を提供してくださった
『川崎ハR/V氏』を中心にした
グループをご紹介します。
まず、カット写真をご覧ください。
さい。一枚の印画紙(画面)に
同じようなポーズの緊縛女性が
撮影されています。これが「立
体写真」になるのです。旭光学、
又は他社のステレオアダプター
撮影したフィルムでスライドを
おこし、それを「覗く」か、偏
光レンズ使用の投写をスクリー

ンで観賞するか二通りの楽しみ
方ができますが、R氏は器材発
売以来の熱心な愛好者で、ほと
んどS Mハント記録は「立体
写真」で収録された門外不出で
す。

活きいきと飛び出してくる臨
場感横溢の記録はマニアならず
とも垂涎の的で、少数のメンバ
ーの間で巡覧されて好評です。
氏の主宰する会に加入御希望
の方は当編集室で御斡旋いたし
ますから左記の要領で回送依頼

の便りをください。

一、正しい住所、連絡電話番号

一、ご職業

一、氏名、年令

一、写歴(一般のスチールカメ
ラ撮影)

一、ご希望事項

(例・作品交換、巡覧加入、
製作依頼、共作など)

回送後の個人宛返事はR氏か
ら送られますので、詳しい会の
運営・会費などの情報はそれに
よって御判断願います。なお、
カメラ操作、撮影が御自分では
苦手で、記録としては是非残し
ておきたいと思われる耽美実践
家の方へは出張撮影の協力をさ
れるそうですから加入希望者と
同様、その旨明記の上お便り願
います。

新規会員募集の締切期限は特
に設けられてありません。
初回の文通回送だけは編集室
で責任をもって取り扱いいたし
ます。

日月舎通信

『太陽と月』の当誌は、この地球上の森羅万象を照らし出す光のように、人びとの暮らしの様ざまを浮き彫りにしてゆきたいものと思っています。昼は活き、夜はまどろむという生物の法則から、人の歴史も夜作られるなどといわれ、その憩いの中から多くの幸、不幸が芽生えたり枯れて行くようですが、当誌は「昼も夜も」皆様のそばにあって、幸わせを築く方のお役にたきたいと考えます。

といっても当誌にご関心をお示しになる方は、おそらく周囲からは「特殊視」されているのではないかと、まず警戒心が先きにたつような事柄に悩み、または「憧憬」「希求」があっても曲解をおそれて、社会生活の重圧に耐えておられるのではな

いかとも思われます。その住みにくさを感じておられる多くの方が、軽く吐息して安堵する、滋味豊かな緑の牧草の果しなく広がる放牧地に立った清々しさを感じていただく空間にしたいものです。

あの知恵、この工夫が、互いの生活技能となっていかがされて行くなら、決して人生は暗澹たるものではなくなり、むしろ励しを得て大きく立ちほだかる困難を乗り越えて行くことができると思っています。

他人の話す自慢は、時にはそれを目標に発奮する動機となります。自分より低い次元で話す事には、よい教唆を授けることができます。見聞を広く深く極めてみると、その姿勢が英知となつて生活を支えてくれるものです。

英和の源泉を、これからの『太陽と月』が多くの人と共に歩むことで、絶えることのないもの

とし、飢餓荒涼の「性の地」に潤いをもたらし続けて行きたいと考えております。

原稿募集要綱

呱呱の声をあげたばかりの『サン・アンド・ムーン』誌は、愛情生活を営みつつある方を主たる対象に、共に作り、共に歩むことを希いとした交歓誌でありたいと思います。

その趣旨に賛同し、共鳴してくださる方の中から本誌の充実を図る諸原稿、真実な情報、新企画を募集します。

既成・評価の高い作家であっても、新生面をひらこうと新人に還って執筆を試みられるのであれば、玉稿を拝受して参りたいと考えます。

各位、よろしく御参集賜りますよう、お願い申し上げます。

よろしくご支援とご鞭撻、並びに積極的なご参加をお願い申し上げます次第です。

応募規定

作品内容は異性間の出来ごとに限ります。ホモ・ラブ、レズ・ラブは本誌採用の枠外ですので御留意下さい。性に関わる記事を収録する特質上、題材にはおのずと法治国家内での出版物としての制約が及びますので、それを良識とご判断の上、新分野開拓の野心作をお寄せ賜れば幸いです。

頁数の膨大さを誇る強力な定期刊行物とは異なり、一見玉石混濁な内容でも皆様の日々の暮らしに豊かな潤いをと心懸けての編集ですから、表現過剰・読後空疎感を催す小説は同性愛もの同様募集の対象にはしてありません。

卓抜な性愛描写、秀逸な表現を具象した写真、イラスト、ルポルタージュ作品に対しては他誌にみる冷遇を諫めとして、偉才育英に尽力をおしみません。

告白記は、懊悩・願望のはけ口としてご執筆ください。ご寄稿いただいたご本人の秘密は厳守し、慎重且つ適切な配慮を誌上で示して参りたいと考えます。

稿料その他

依頼原稿は除き、お寄せいただいた各種原稿には掲載誌発売後一ヶ月内にお支払い致しますが、原稿用紙枚数による倍数額支払いは致しません。例え短文であってもご努力に対する寸志をこめ、編集同人協議の上、決定報酬額をご送金申し上げます。

また、採否にかかわらずご応募くださいました作品はお返しすることを原則とし、ご納得いただく所存です。

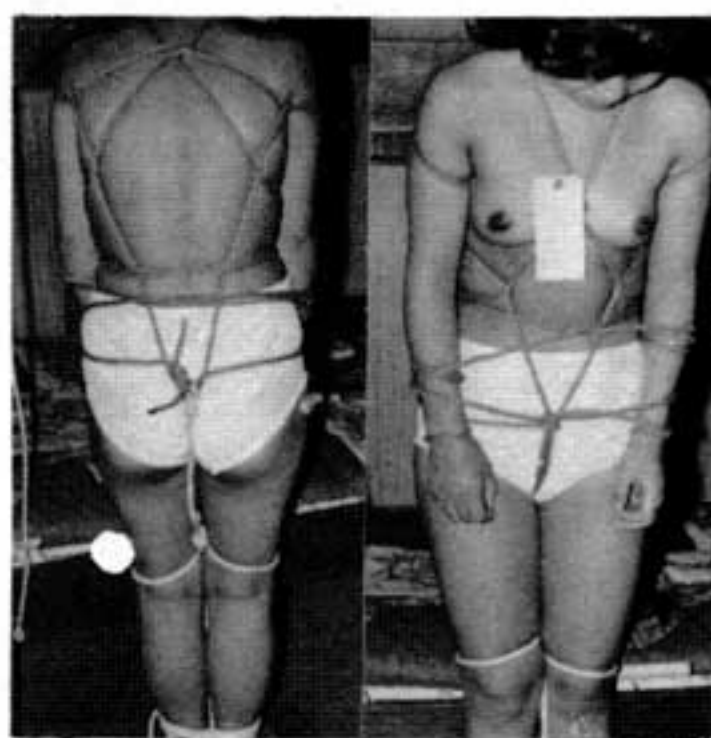
「落穂記」

また悪性の風邪が流行しました。お蔭で本誌の創刊にもろ手を挙げて共鳴して下さった寄稿予定者の中からも、初陣におくれをとらざるを得なかった方が続出しました。お互いに残念なことでした。

それでも、世にも珍しい全く「小説」の載らない雑誌が生まれたのです。今後もこれが本誌の独自性となって行くことでしょう。

本誌の表紙は、カメラ・ハンターの六本木氏撮影の作品から仕上げました。撮影にご協力くださいました「奴隷市場」の堀井氏に、深甚なる感謝を申し上げます。なお、撮影当日の模様は六本木氏の執筆になる「好事三昧」で読者各位はお楽しみくだされたことと思いますが、皮製品の妖しい魅力はいかなものでしたか。

妊婦緊縛の中宮さかえ氏は、SM雑誌に寄稿予定の玉稿を、急拠当誌のために変更して御提出くださいました。次号でも臨月を控えた妊娠夫人を取材した続篇をお約束下さっております。ご期待下さい。



座談会も毎号掲載して参りたいと思いますが、司会の不馴れもさることながら、お互い初顔合わせのこともあり、口が重くなりがちです。われこそはとお思いの方はふるってご出席ください。今回は八耗映画が「エサ」でしたが、毎回歓迎企画を変えてご来駕いただくお楽しみに致

したいと思っています。

日本各地に散在するカメラ・マニアの方からお寄せいただく秘蔵悦虐の写真は、どれもこれも見事なものです。使わせていただいた写真・見合わせた作品のすべては丁寧に取扱いご返却致しますので、ご安心願い、更にご力作をお寄せいただきたく存じます。編集子の蒐集癖で私蔵するのが目的ではありません。念のため一言附記させていただきます。

昭和五十二年三月一日発行

SUN & MOON

編集兼発行人 世田介一

発行所 日月舎

東京都杉並区天沼三二二二一三

一六七

電話〇三―三九三―四一五九

発売元 エド・プロダクツ

東京都千代田区猿樂町

電話〇三―二九二―八七八〇

限定三〇〇〇部